

若宮宮田工業団地関係 埋蔵文化財調査報告

第 1 集

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在古墳群の調査

1 9 7 9

福岡県教育委員会

若宮宮田工業団地関係 埋蔵文化財調査報告

第 1 集

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在古墳群の調査

1 9 7 9

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

地域振興整備公団若宮・宮田工業団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和51年度に始まり、本年で3年を経ました。工業団地は、東西に走る九州縦貫自動車道の南北に沿って同一丘陵に造成されるため、両方の用地内にまたがって存在する遺跡もあり、8地点、17,000㎡について発掘調査を実施しました。

悠久の眠りから、突如として目を覚まし、現代の光と空気に触れた遺構や出土品の整理も一段落つき、このほどようやく、調査報告書の第1冊目を発刊できるようになりました。

本書は、昭和52年度に行った調査のうち、汐井掛古墳群・高平古墳群・南ヶ浦古墳群についての発掘調査報告書であります。

十分な報告書ではありませんが、文化財保護活動や地域の歴史を知るうえで、本書を活用いただければ幸甚です。

発刊にあたり、本文中に記名した方々をはじめ、種々御協力いただいた方々に深く感謝いたします。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

例 言

1. 本書は、地域振興整備公団による若宮・宮田工業団地造成によって破壊される遺跡について、福岡県教育委員会が受託事業として発掘調査を実施したもののうち、昭和52年度に調査した汐井掛古墳群・高平古墳群・南ヶ浦古墳群の発掘調査報告である。
2. 遺物整理にあたっては、九州歴史資料館の岩瀬正信氏の協力を得た。
3. 本文の執筆については、各文末に氏名を記して文責を明らかにした。
4. 掲載写真のうち、遺物写真は九州歴史資料館写真室の前田次郎氏が、遺構写真は調査担当者が撮影した。また、毎日新聞社撮影のものを一葉借用した。
5. 遺構実測・地形測量は調査補助員および学生がこれにあたり、とくに地形測量については調査補助員日高正幸氏（測量士）の多大な助力を得た。
6. 遺物実測は土師器と須恵器甕・器台を調査補助員関晴彦氏が、石器を調査補助員平ノ内幸治氏が、他は児玉真一が担当した。
7. 製図は、地形図、墳丘断面図を日高が、他は児玉が担当した。
8. 遺跡分布図、発掘調査工程表は池辺元明が作成した。
9. 石室、出土土器は本書の末尾に一括して表にした。よって、これらの説明は本文中では極めて簡単な記述にとどめた。
10. 発掘調査は、児玉・池辺両技師が担当し、終始地元各位の多大な協力を得た。
11. 本書の編集は池辺の援助をうけて児玉が担当した。

本文目次

	頁
I 調査の経過.....	1
II 汐井掛古墳群の調査.....	7
1. 汐井掛16号墳.....	7
2. 汐井掛17号墳.....	20
3. 小 結.....	22
III 高平古墳群の調査.....	23
1. 高平1号墳.....	23
2. 高平2号墳.....	30
3. 高平3号墳.....	31
4. 小 結.....	33
IV 南ヶ浦古墳群の調査.....	34
1. 南ヶ浦1号墳.....	34
2. 南ヶ浦2号墳.....	39
3. 南ヶ浦3号墳.....	42
4. 南ヶ浦4号墳.....	46
5. 南ヶ浦5号墳.....	48
6. 南ヶ浦6号墳.....	51
7. 小 結.....	52

図 版 目 次

	本文対照頁
図版 1 (1) 汐井掛古墳群・高平古墳群遠景	7・23
(2) 汐井掛古墳群B支群	7
2 (1) 汐井掛16号墳全景	7
(2) 汐井掛16号墳墳丘肩部列石	7
3 (1) 汐井掛16号墳石室掘方切込面の全景	7
(2) 汐井掛16号墳地山面の全景	7
4 (1) 汐井掛16号墳石室全景	12
(2) 同右側壁石積状態	12
5 汐井掛16号墳玄門閉塞状態	12
6 (1) 汐井掛16号墳Ⅰ区列石	7
(2) 同Ⅱ区列石	7
7 汐井掛16号墳墳丘盛土断面	7
8 汐井掛16号墳Ⅲ区墳丘内土器出土状態	12
9 汐井掛16号墳Ⅳ区墳裾部土器出土状態	12
10 汐井掛17号墳石室全景	20
11 (1) 汐井掛17号墳奥壁	20
(2) 同横口閉塞状態	20
(3) 同石室全景	20
12 (1) 汐井掛17号墳横口部と閉塞石	20
(2) 同前庭部土層断面	20
13 (1) 汐井掛17号墳床面	20
(2) 同石室掘方と石室構築の初期段階	20
14 (1) 汐井掛17号墳発掘後全景	20
(2) 同Ⅲ区土器出土状態	21
15 汐井掛16・17号墳および汐井掛遺跡発掘後全景（毎日新聞社提供）	7～22
16 (1) 高平古墳群全景	23
(2) 高平1号墳全景	23
17 (1) 高平1号墳全景	23
(2) 同石室全景および土器出土状態	23

18	高平1号墳石室全景	23
19	(1) 高平1号墳前室土器出土状態	25
	(2) 同前室入口閉塞状態	23
20	高平1号墳墓道内土器出土状態	26
21	高平1号墳Ⅳ区墳丘内土器出土状態	26
22	(1) 高平1号墳Ⅳ区出土土器群と墳丘盛土との関係	26
	(2) 同1群土器出土状態	26
23	(1) 同2群土器出土状態	26
	(2) 同3群土器出土状態	26
24	(1) 高平2号墳全景	30
	(2) 同床面および閉塞石	32
25	(1) 高平3号墳全景	32
	(2) 同玄室床全景	32
26	(1) 南ヶ浦1～4号墳遠景	34～46
	(2) 南ヶ浦5・6号墳遠景	48～52
27	(1) 南ヶ浦1号墳石室全景	37
	(2) 南ヶ浦2号墳石室全景	37
28	(1) 南ヶ浦2号墳石室全景	37
	(2) 同奥壁	37
29	(1) 南ヶ浦2号墳後室左側壁石積状態	40
	(2) 同後室右側壁石積状態	40
30	(1) 南ヶ浦3号墳石室全景	41
	(2) 同奥壁および後室床面	41
31	(1) 南ヶ浦3号墳後室左側壁石積状態	41
	(2) 同後室右側壁石積状態	41
32	(1) 南ヶ浦3号墳前室と閉塞状態	41
	(2) 同後室の立石遺構	41
33	(1) 南ヶ浦4号墳石室全景	43
	(2) 同床面	43
34	(1) 南ヶ浦4号墳奥壁と後室入口	43
	(2) 同前室入口での閉塞状態	43
35	(1) 南ヶ浦4号墳後室左側壁石積状態	43
	(2) 同後室右側壁石積状態	43

36	(1) 南ヶ浦5号墳石室全景	48
	(2) 南ヶ浦6号墳石室全景	51
37	汐井掛16号墳Ⅲ区墳丘内出土一括土器	14
38	汐井掛16号墳出土土器	14
39	汐井掛16号墳出土土器	14
40	汐井掛16号墳出土土器	14
41	汐井掛16号墳出土土器	14
42	汐井掛16号墳出土土器	14
43	汐井掛16号墳出土土器	14
44	汐井掛16号墳出土土器	14
45	汐井掛16号墳出土土器	14
46	汐井掛16号墳出土土器	14
47	(1) 汐井掛16号墳石室内出土遺物	14
	(2) 汐井掛17号墳出土遺物	22
48	高平1号墳出土土器	25~29
49	高平1号墳出土土器	25~29
50	高平1号墳出土土器	25~29
51	高平1号墳出土土器	25~29
52	(1) 高平1号墳出土砥石	25
	(2) 高平3号墳出土土器	32
53	南ヶ浦2号墳出土遺物	39~42
54	南ヶ浦2号墳出土遺物	39~42
55	(1) 南ヶ浦2号墳出土の布付着鉄鏃	39~42
	(2) 南ヶ浦3・4号墳出土土器	44
56	南ヶ浦3号墳出土遺物	44
57	南ヶ浦3号墳出土遺物	44
58	南ヶ浦3・5号墳出土遺物	44・45
59	南ヶ浦5号墳出土遺物	44・45

挿 図 目 次

第1図	若宮・宮田工業団地用地内調査地点図(1/3000)	頁 折込
第2図	若宮・宮田町主要遺跡分布図(1/25,000)	5

第3図	古墳・石室各部名称	6
第4図	汐井掛古墳群全体図 (1/1200)	8
第5図	汐井掛古墳群 B 支群地形実測図 (1/400)	9
第6図	汐井掛16号墳全体図 (1/200)	10
第7図	汐井掛16・17号墳墳丘断面図 (1/80)	11
第8図	汐井掛16号墳第Ⅲ区墳丘内土器出土状態実測図 (1/20)	12
第9図	汐井掛16号墳石室実測図 (1/60)	折込
第10図	汐井掛16号墳出土土器実測図 (1/2)	13
第11図	汐井掛16号墳出土土器実測図 ① (1/4)	14
第12図	汐井掛16号墳出土土器実測図 ② (1/4)	15
第13図	汐井掛16号墳出土土器実測図 ③ (1/4)	16
第14図	汐井掛16号墳出土土器実測図 ④ (1/4・1/6)	17
第15図	汐井掛16号墳出土土器実測図 ⑤ (1/4)	18
第16図	汐井掛16・17号墳出土土器拓影 (1/3)	19
第17図	汐井掛17号墳全体図 (1/200)	20
第18図	汐井掛17号墳石室実測図 (1/40)	折込
第19図	汐井掛17号墳出土土器実測図 (1/4・1/6)	21
第20図	高平古墳群地形実測図 (1/300)	24
第21図	高平1・3号墳墳丘断面図 (1/80)	25
第22図	高平1号墳石室実測図 (1/60)	26
第23図	高平1号墳閉塞石および遺物出土状態実測図 (1/30)	26
第24図	高平1号墳出土土器実測図 ① (1/4)	27
第25図	高平1号墳出土土器実測図 ② (1/4)	28
第26図	高平1号墳出土土器実測図 ③ (1/9)	29
第27図	高平1号墳出土土器実測図 (1/2)	29
第28図	高平2号墳石室実測図 (1/30)	30
第29図	高平3号墳出土土器実測図 (1/4・1/6)	32
第30図	高平3号墳石室実測図 (1/40)	折込
第31図	高平古墳群出土土器拓影 (1/3)	33
第32図	移築復原された南ヶ浦3号墳	34
第33図	南ヶ浦古墳群周辺地形図 (1/2000)	35
第34図	南ヶ浦1号墳全体図 (1/200)	36
第35図	南ヶ浦A支群 (1～4号墳) 地形実測図 (1/400)	折込

第36図	南ヶ浦1号墳墳丘断面図 (1/80)	37
第37図	南ヶ浦1号墳石室実測図 (1/60)	38
第38図	南ヶ浦2～4号墳全体図 (1/200)	折込
第39図	南ヶ浦2号墳墳丘断面図 (1/80)	40
第40図	南ヶ浦2号墳石室実測図 (1/60)	折込
第41図	南ヶ浦2号墳出土遺物実測図 (1/2)	41
第42図	南ヶ浦3号墳石室実測図 (1/60)	折込
第43図	南ヶ浦3号墳墳丘断面図 (1/80)	43
第44図	南ヶ浦3・4号墳出土土器実測図 (1/4)	44
第45図	南ヶ浦3号墳出土遺物実測図 (1/2)	45
第46図	南ヶ浦4号墳石室実測図 (1/60)	折込
第47図	南ヶ浦4号墳墳丘断面図 (1/80)	47
第48図	南ヶ浦5・6号墳全体図 (1/200)	48
第49図	南ヶ浦5号墳石室実測図 (1/60)	49
第50図	南ヶ浦5号墳出土遺物実測図 (1/2)	50
第51図	南ヶ浦6号墳石室実測図 (1/40)	51

表 目 次

第1表	発掘調査工程表	頁 2
第2表	墳丘および石室計測表	53
第3表	土器観察表	54

I 調査の経過

エネルギー革命は、筑豊地区の石炭産業にも波及し、相次ぐ合理化を促進せしめ、果ては消失の一途をたどり、かつて盛況であった産炭地にはボタ山と朽ちた炭住がめだち、人口の減少と共に、失業者の増加は目にあまるものがあった。ために国は地元からの強い要望により、産炭地の復興を政策とし、失業者対策ならびに人口の流出をふせぐため、石炭産業の跡地利用を目的とし、我国の高度経済成長の中心にあった工業の再配置計画を策定した。これは全国の産炭地に工場団地を造成し、ここに軽・重工業を誘致し、これに失業者を就労させるとともに若年人口の流出を止め、あわせて産炭地の振興を図ろうとするものであり、この計画を実施するにあたり、国は通産省を中心として、工業再配置産炭地域振興公団を設けた。

この国の政策にそって、福岡県内においても多くの工業団地造成計画が掲げられた。若宮・宮田両町に計画された宮田工場団地もその一つである。宮田工業団地は、早くから計画が策定され、文化財行政側における当事業の情報収集が遅れ、昭和47年度からの工事着手の時点において確認するに及び、福岡県教育委員会は工業再配置産炭地域振興公団と接触し、当公団筑豊事務所より当団地事業計画を聴取し、あわせて文化財の保護について協議した。

その結果、当団地は広大な面積であり、有木地区と若宮地区の二つに大きく分かれ、有木地区を五工区に分け、この地区より着手するとのことであったので、当委員会では公団の年次計画等にあわせ文化財の分布調査を実施した。当団地はボタ山と周辺の丘陵を占めるものであり、丘陵は草木の繁茂がいちじるしく、分布調査は非常に困難であり、有木地区における文化財は確認できなかった。

こうした状況のなかで、昭和49年度には、当団地若宮地区を東西に貫通する九州縦貫自動車道路の発掘調査が開始された。この発掘調査は半ばどれほどの遺跡が遺存しているか十分確認されぬままに着手したのであるが、調査を進めるにつれて、当団地若宮地区の占める丘陵には広大な面積にわたって遺跡の遺存することが予測されるにいたり、49年度に改称なった地域振興整備公団の依頼により若宮地区の詳細な分布調査を実施した。その結果、遺跡の主要部分は九州縦貫自動車道路が占めるが、隣接する当団地敷地内にもなお広大な遺跡があることが確認され、公団との文化財保護にかかる協議を重ね、福岡県が公団の委託を受けて、昭和51年度から数ヶ年にわたり発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和51年度から着手することとなったが、若宮地区を対象とし、遺跡の遺存範囲が広大であるため、遺跡の範囲を確定するとともに内容を確認し、調査を円滑かつ有効に進めるために、初年度は広くトレンチを設定し予備調査を実施した。

本調査は52年度から実施した。汐井掛遺跡・古墳群、柳ヶ谷遺跡、高平古墳群、天神ノ上遺

跡の順で発掘調査した。この間に有木地区の工事中に第3工区において南ヶ浦古墳群が発見されたので、これについても発掘調査を実施した。また、発掘調査に併行して出土遺物の整理作業を実施した。

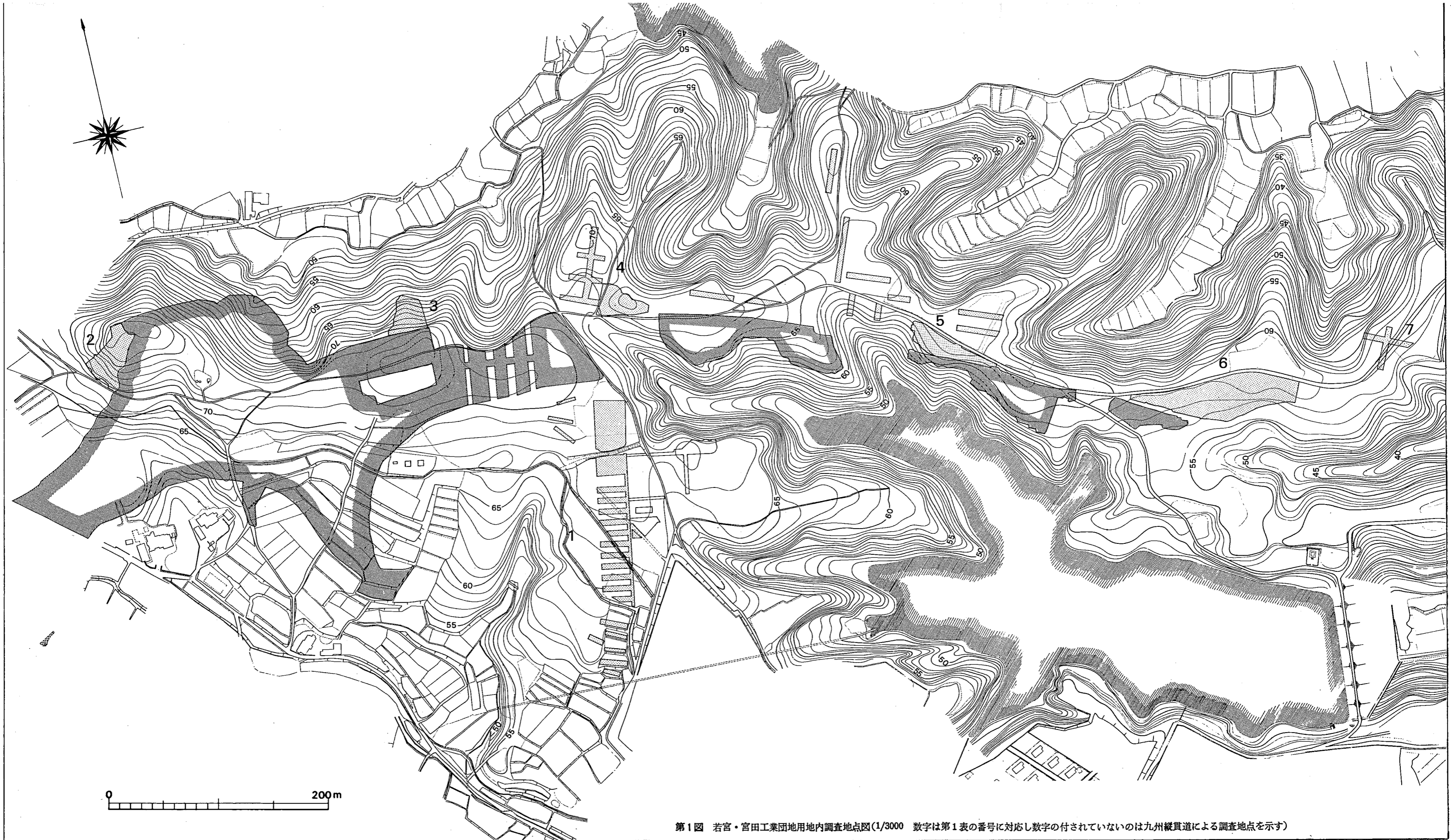
昭和53年度は、若宮地区第2工区の予備調査を実施した。調査は主に九州縦貫自動車道路筑豊西インターから当団地に通ずる進入道路敷地周辺を対象とした。また、本年度は遺物の整理作業が中心となり、当第2工区の予備調査は54年度にも実施する。

以上のように、宮田工業団地の発掘調査の実施方については地域振興整備公団の多大なる御理解により進められてきたが、当団地内に遺存する汐井掛遺跡・古墳群については当初から保存の要望を打ち出していたが、先行して着手された九州縦貫自動車道路との関連で、現状での保存が非常に困難であること等から、やむなく記録保存の措置を講ずるに止まらなければならなかったのは残念であった。

(浜田 信也)

	遺跡名	内容	所在地	調査面積			備考
				51年度	52年度	53年度	
1	都地遺跡	散布地・古墳1基	鞍手郡若宮町 大字沼口字都地			4.17~9.15 4000㎡	
2	汐井掛遺跡 汐井掛古墳群	木棺墓・石棺墓・ 石蓋土壙墓・円墳 2基	若宮町大字沼口字 汐井掛 宮田町大字上有大 字高平		4.1~6.30 1.260㎡		
3	高平古墳群	円墳3基	宮田町大字上有木 字高平		9.4~10.31 900㎡		
4	天神の上遺跡	木棺墓・石棺墓・ 石蓋土壙墓	大字上有木字坂元	1.17~2.25 1.245㎡	11.1~12.15 800㎡		51年度トレン チ調査
5	柳ヶ谷遺跡Ⅱ	住居跡	大字上有木字坂元	11.24~ 1.14 1.960㎡	8.1~9.16 1.035㎡		51年度トレン チ調査
6	柳ヶ谷遺跡Ⅰ	住居跡・掘立柱建 物	大字上有木字坂元	7.26~ 10.30 4.227㎡			
7		散布地	大字上有木字坂元	11.1~ 11.20 415㎡			遺構ナシ
8	南ヶ浦古墳群	円墳6基	大字中有木字 南ヶ浦		7.1~8.11 932㎡		
計				7.847	4.927	4,000	

第1表 発掘調査工程表



第1図 若宮・宮田工業団地用地内調査地点図(1/3000 数字は第1表の番号に対応し数字の付されていないのは九州縦貫道による調査地点を示す)

遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。

昭和51年度

地域振興整備公団九州支部	支 部 長	桑山 六郎		
筑豊事務所	所 長	山田 文吾	管理課長	赤松 康城
	課長代理	花田 敬一	事業課長	石松主基生

福岡県教育委員会

総 括	教育長	森田 實	管理部長	西村 太郎
	文化課課長	藤井 功	課長補佐	武久 耕作
	課長補佐	川崎 隆夫	参事補佐	松岡 史
			調査係長 (兼)	
	技術主査	宮小路賀宏	技術主査	栗原 和彦
庶務会計	庶務係長 (兼)	武久 耕作	庶務主事	大神 新
発掘調査員	文化課技師	浜田 信也	同 技師	児玉 真一
	同 技師	池辺 元明		
発掘調査補助員	高田 一弘	日高 正幸	小田 雅文	
学 生	片岡宏二 (早大)	田崎博之	山田成洋	水島稔夫
	長津宗重	杉山洋	鮫島泰夫 (九大)	山田英雜
	樽見直子	石村真澄 (山口大)		

昭和52年度

地域振興整備公団九州支部	支部長	桑山 六郎		
筑豊事務所	所 長	山田 文吾	管理課長	小野 恭三
	課長代理	花田 敬一	事業課長	石松主基生

福岡県教育委員会

総 括	教育長	森田 實	管理部長	西村 太郎
	文化課課長	藤井 功	課長補佐	武久 耕作
	参事補佐	松岡 史	調査係長	松岡 史
	技術主査	宮小路賀宏	技術主査	栗原 和彦
庶務会計	庶務係長	大淵 幸夫	主任主事	豊福 金蔵
発掘調査員	文化課技師	浜田 信也	同 技師	児玉 真一
	同 技師	池辺 元明		
発掘調査補助員	高田 一弘	日高 正幸	平ノ内 幸治	稻富 裕和
	大石 昇	近沢 康治	関 晴彦	渡辺 健二
学 生	白石 浩	片岡宏二	岸上伸啓	宮本伊織 (早大)

石田英二 野村哲郎（別府大） 杉山洋 鯨島泰夫（九州大）

昭和53年度

地域振興整備公団九州支部	支部長	桑山 六郎		
筑豊事務所	所長	山田 文吾	管理課長	小野 恭三
福岡県教育委員会	課長代理	花田 敬一	事業課長	石松主基生
総括	教育長	浦山 太郎	教育次長	友野 隆
	管理部長	岩下 光弘	文化課課長	藤井 功
	課長補佐	武久 耕作	技術補佐	松岡 史
	調査第一係長	宮小路賀宏	調査第二係長	栗原 和彦
庶務会計	庶務係長	大淵 幸夫	主住主事	豊福 金蔵
発掘調査員	文化課技師	浜田 信也	同 技師	児玉 真一
	同 技 師	池辺 元明		
発掘調査補助員	高田 一弘	日高 正幸	平ノ内 幸治	
学生	野村哲朗（別府大）	長谷川隆則（明治大）		

地元協力者（51～53年度）

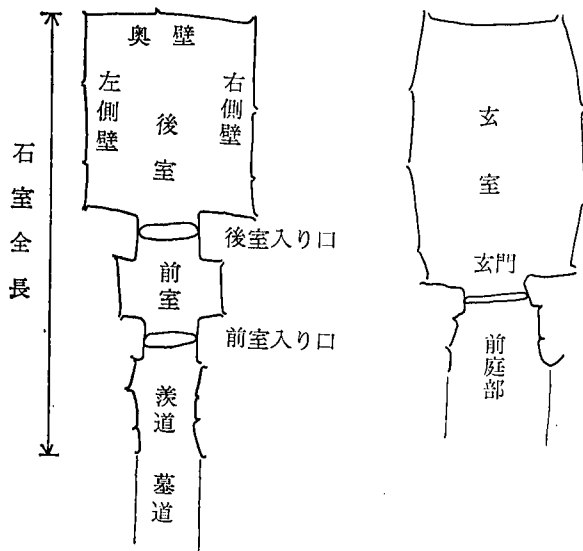
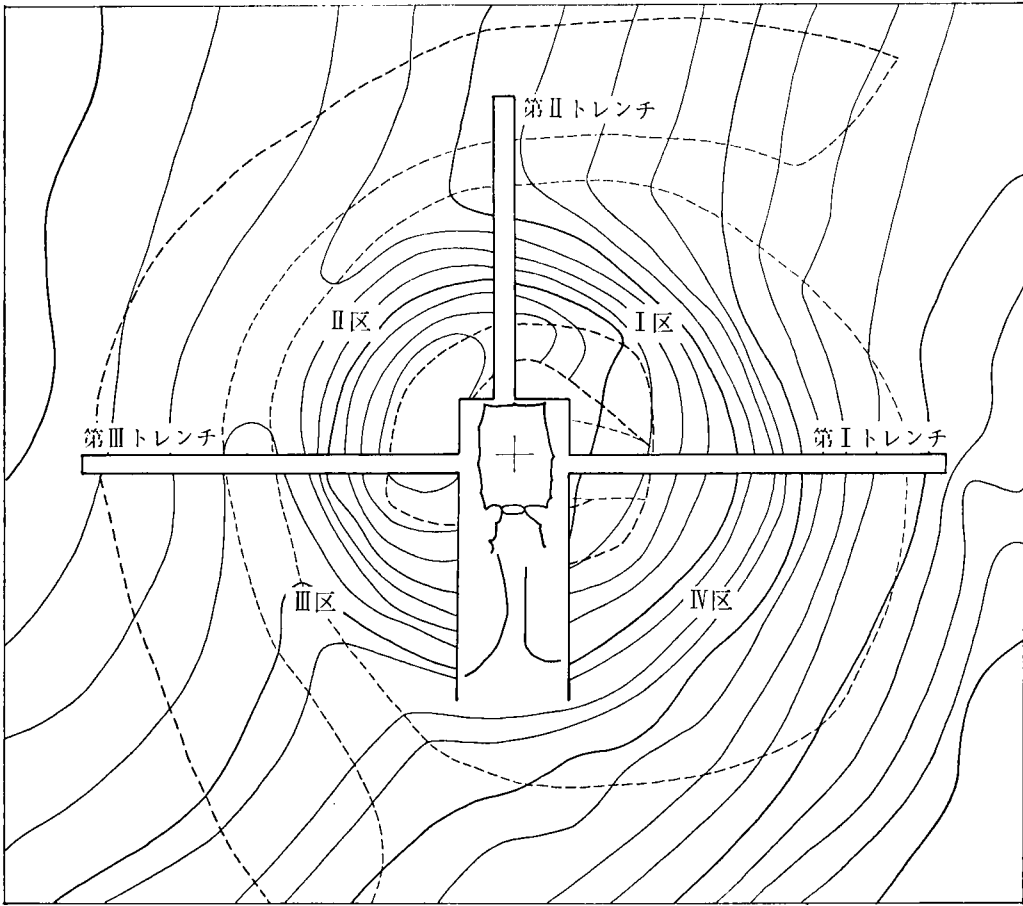
石川 次三	本田 顕市	中島 利夫	北崎 守勝	有吉 良助	大久保亥之吉
塩川 善喜	塩川 豊	花田 繁美	松尾 牧夫	荒牧 重喜	河原健一郎
岡 博晃	塩見モモエ	荒牧ハル子	本田 ヒデ	河村 政野	中島トシエ
北崎千恵子	井田チズ子	塩川キヌ子	吉田ヒデ子	吉田美智子	奥村マツ子
上野フサエ	安永ヤチ子	丸山 文子	安武ナミ子	松尾 キミ	大峰アイ子
神谷ミツル	伊東 シゲ	中村 フミ	花田エツ子	安河内和子	波止みどり
藤島 峯子	有吉 美幸	塩川ツキノ	楠葉美智子	松田梨絵子	神谷恵美子
安永 幸子	古野チズエ	吉田ハギエ	本田 初子	丸山チトセ	塩川 昭代

なお現場作業には福島建設壇守氏，器材借上に関しては稲尾産業株式会社の協力を得た。

また遺物の復元作業においては，九州歴史資料館の岩瀬正信氏の協力を得た。記して感謝の意を申し上げます。

（池辺元明）

- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|----------|
| 1 都地遺跡 | 2 汐井掛遺跡・古墳群 | 3 高平古墳群 | 4 天神ノ上遺跡 |
| 5・6 柳ヶ谷遺跡 | 8 南ヶ浦古墳群 | 9 平原古墳群 | 10 都地遺跡 |
| 11 咲花遺跡 | 12 北田遺跡 | 13 小原遺跡 | 14 小原古墳群 |
| 15 茶白山城跡 | | | |
| 16 里古墳 | 17 平原遺跡 | 18 片ノ熊古墳群 | 19 竹原古墳 |
| 20 八幡塚古墳 | | | |
| 21 金丸古墳 | 22 田尻遺跡 | 23 都地八幡経塚 | |



第3図 古墳石室各部の名称

II 汐井掛古墳群の調査

犬鳴川の支流で見坂峠付近に源を発する山口川が、谷間を流れ下りながら東流して平野部にはいり、ゆるやかにその流れを南へ変えるころ、左岸丘陵上に汐井掛古墳群がこつぜん姿を見せる。この丘陵は、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査以前は山林であったが、現在は九州縦貫自動車道筑豊西インター・チェンジ（通称若宮インター）となっている。

福岡県教育委員会による縦貫道建設に際しての事前の表面観察と発掘調査により、この丘陵には、墳丘が目立たない小石室を含めて53基の古墳が確認され、縦貫道建設予定地内の38基について調査が行われた（註1）。これら円墳群は丘陵鞍部をはばかるように斜面に構築され、丘陵鞍部に密集して存在する箱式石棺墓・土坑墓・木棺墓（註2）の多くは古墳構築に際しての破壊からまぬがれている。

今回調査した16・17号墳は当初から現状保存の要望を出していたが、工事の先行している九州縦貫自動車道との関係で現状保存が技術的に困難であるという理由から発掘調査に踏み切った。2基とも他の古墳と同様に丘陵斜面に構築され、汐井掛古墳群A～H支群中のB支群に属する。調査は昭和52年4月1日に開始し、箱式石棺墓・土坑墓・木棺墓からなる汐井掛遺跡と併行して行い、同年6月30日に終了した。（児玉真一）

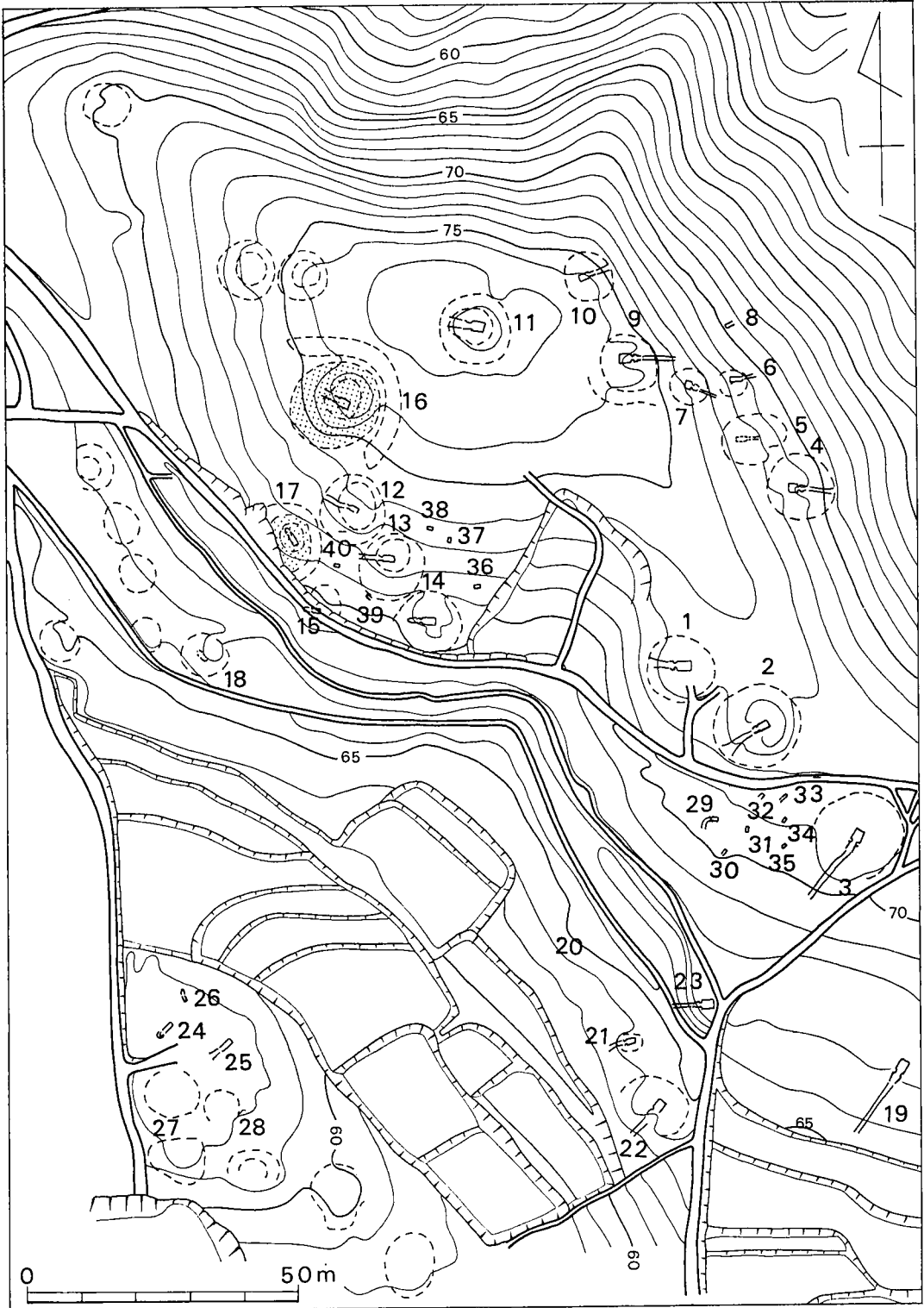
1 汐井掛16号墳

1 墳丘（図版2・3・6～8，第4～8図）

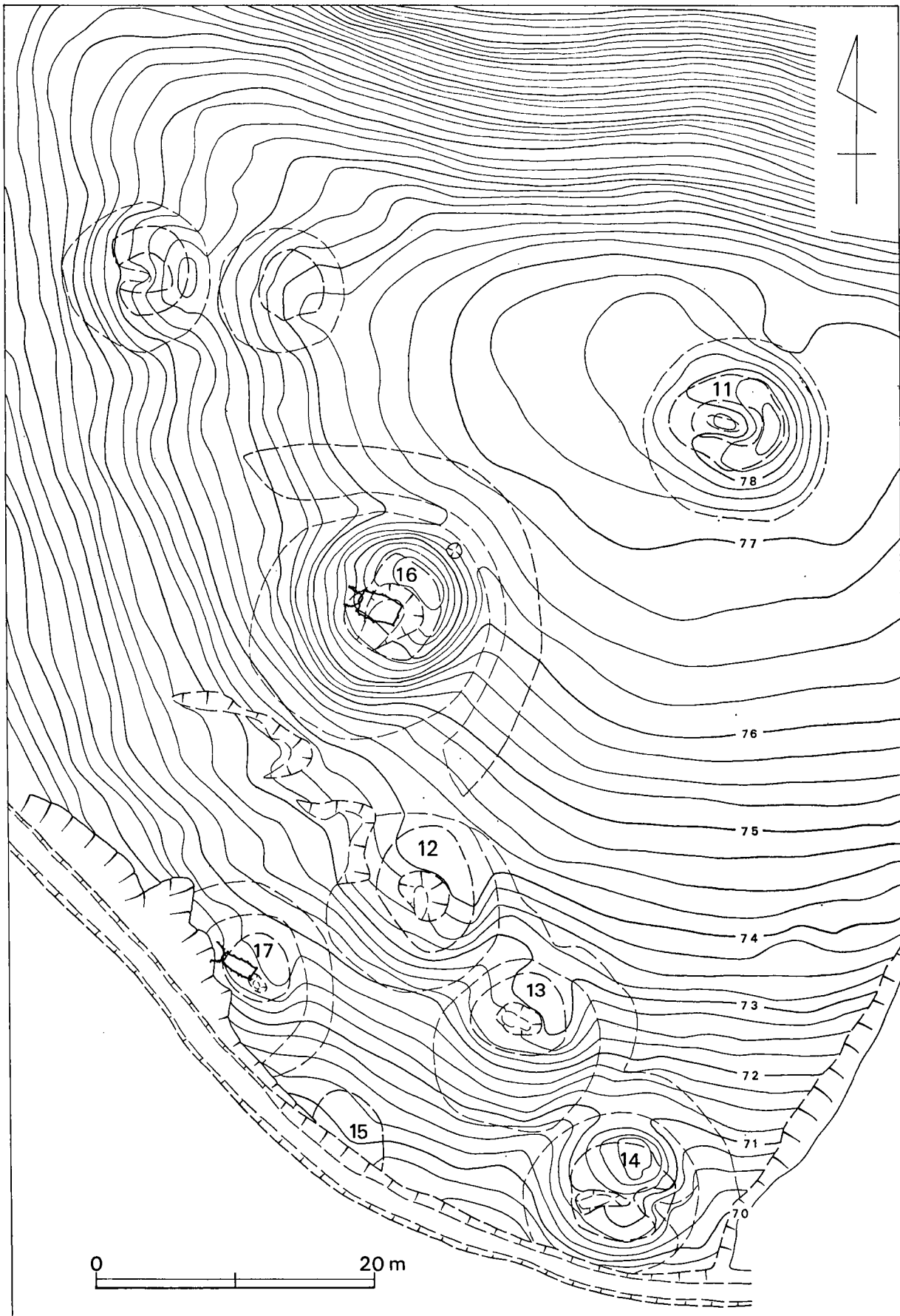
汐井掛16号墳は、遺跡の西部標高75mの丘陵上に築かれた円墳で、汐井掛古墳群の中でもっとも大きく11号墳とともに中心的な位置に立地している。調査前の観察で馬蹄形の溝が確認でき、盛土の残存状態も良好であった。変換線で墳径は16mを測った。ただ盗掘のため墳頂部は陥没し、北東部の墳丘裾部は径約1mの横穴が残り、なまなましい感じがした。

築造にあたっては、北側に馬蹄形の溝を掘り墳丘を際立たせる造行が行なわれる。この溝から判断して墳径は16mを測る。盛土は旧表上に行なわれ10数層に分かれる。高さ約1.7mを測る。溝底からは約2.1mある。墳丘の陥没した部分を補足して本来の高さを想定すると現状より50～60cmほど高かったであろう。

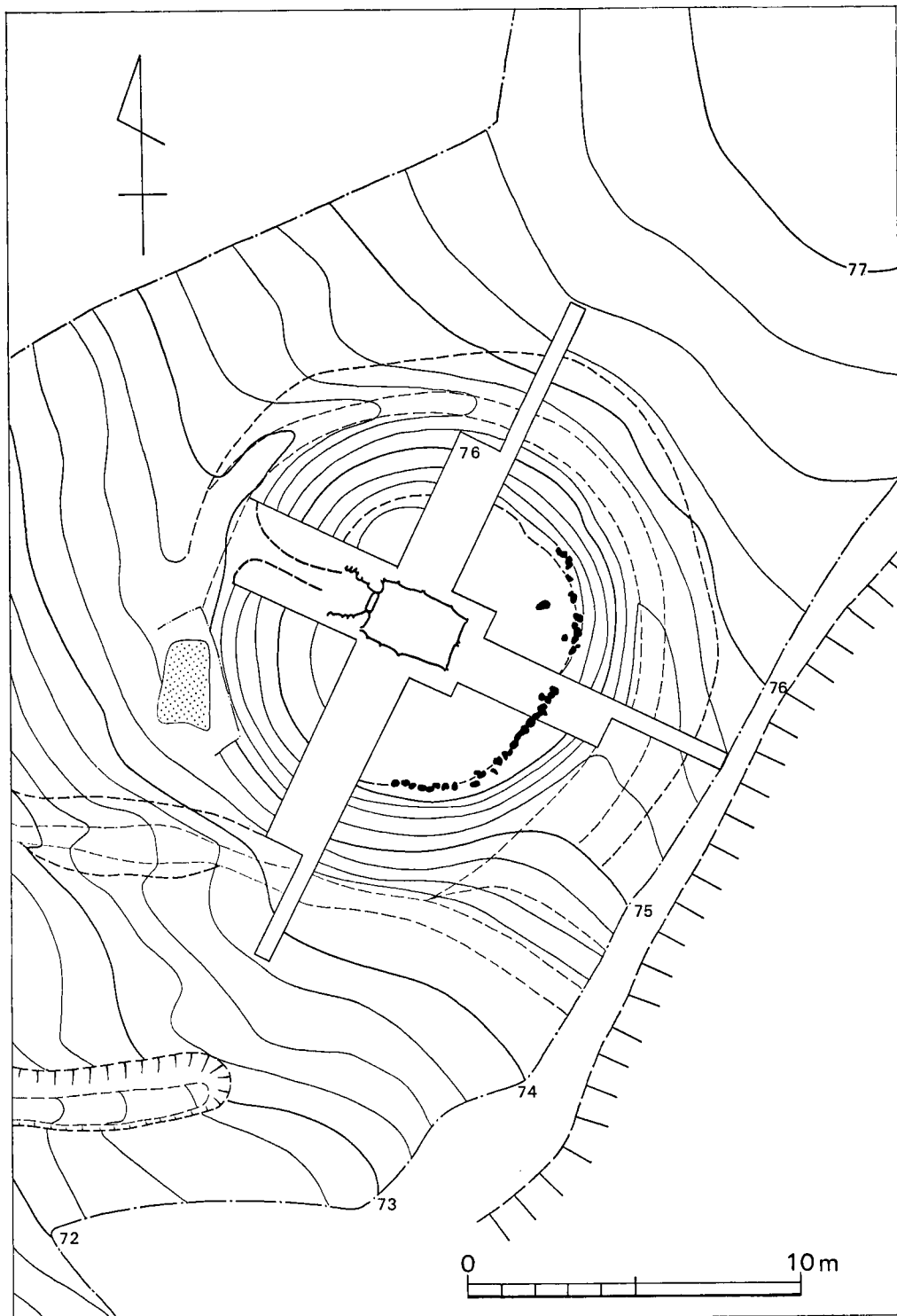
各トレンチを中心に封土の築成を検討してみると、大きく3段階に分けられる。第1段階は墓壙内に腰石を据えた後、壁石の積み上げに併行して1段ずつ盛り上げられ石室に近いほど念入りに叩きしめが行なわれている。第2段階は天井石の被覆と大方の墳形を整えるものである。この段階で第Ⅰ区・第Ⅱ区においては土留めの作業として列石が認められた。この列石は墳丘



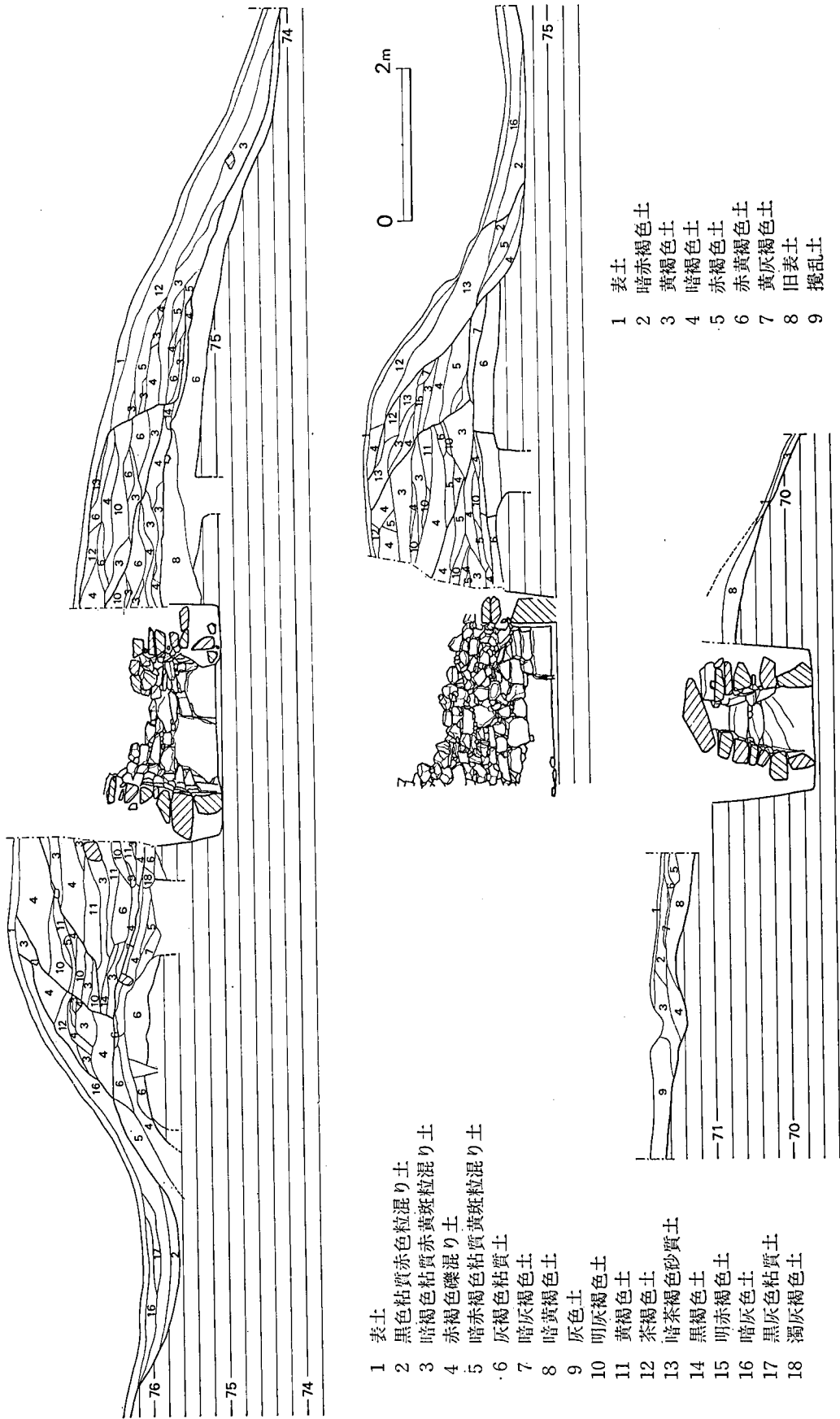
第4图 沙井掛古墳群全体图 (1/1200)



第5图 汐井掛古墳群B支群地形実測図 (1/400)



第6图 汐井掛16号墳全体図 (1/200)



- 1 表土
- 2 黑色粘質赤色粒混り土
- 3 暗褐色粘質赤黄斑粒混り土
- 4 赤褐色礫混り土
- 5 暗赤褐色粘質黄斑粒混り土
- 6 灰褐色粘質土
- 7 暗灰褐色土
- 8 暗黄褐色土
- 9 灰色土
- 10 明灰褐色土
- 11 黄褐色土
- 12 茶褐色土
- 13 暗茶褐色砂質土
- 14 黑褐色土
- 15 明赤褐色土
- 16 暗灰色土
- 17 黑灰色粘質土
- 18 濁灰褐色土

- 1 表土
- 2 暗赤褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 赤黄褐色土
- 7 黄灰褐色土
- 8 旧表土
- 9 攪乱土

第7図 沙井掛16・17号填丘断面図 (1/80)

全体を巡っていたとも考えられる。この古墳は、標石をもつ弥生時代後期の土壙墓・木棺墓上に築造されたもので、基礎整形の段階で表面にでた標石を土留め用の列石として利用したものと推定される。第3段階は、列石の被覆、さらに墳形を整えるものである。

トレンチによる封土状態の観察後盛土をすべて除去したが、第Ⅲ区の旧表土層上で、須恵器の坏身・坏蓋が石で潰された状態で出土した。旧地表面で盛土を行なう前に祭祀が行なわれたものと考えられる。また、第Ⅳ区の墳丘裾部からも多量の須恵器・土師器が出土している。

2 石室（図版3～5，第9図）

隅丸長方形の掘方内に構築された単室構造の横穴式石室である。主軸はほぼ東西を示し、西に開口している。石室掘方は旧表土層から切り込んでおり、最深部で90cmを測る。

玄室はやや胴張りの長方形プランを呈している。石室の残存状況は奥壁と右側壁で5～6段、床面からの高さは約1.2m、左側壁は玄門側が最も残りが良く天井石の近くまで残存している。最高で10段、床面からの高さは約2mを測る。

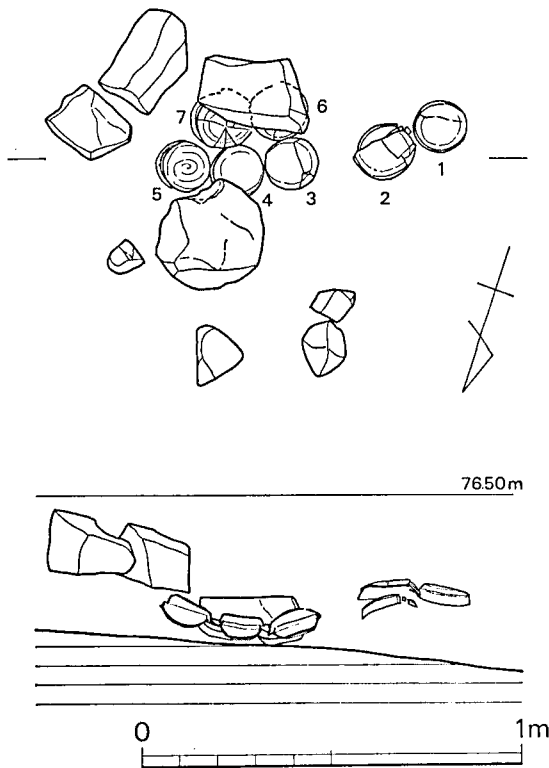
基部は墳底をわずかに掘り下げて奥壁2枚、左右両壁4枚の石材を用い腰石を立てて据えている。腰石も大きさがまちまちで特に小さな腰石を使用した右側壁の玄門側3枚の腰石の外側に

根じめ石を多く使って腰石を支えている。2段目以上の壁体を構成する石材も全体的に小さな石が多く積み方は粗雑である。積石間の隙間には多くの小石を用いてパッキングをしている。壁体の内傾度は5～6段目から上位が大きくなっている。

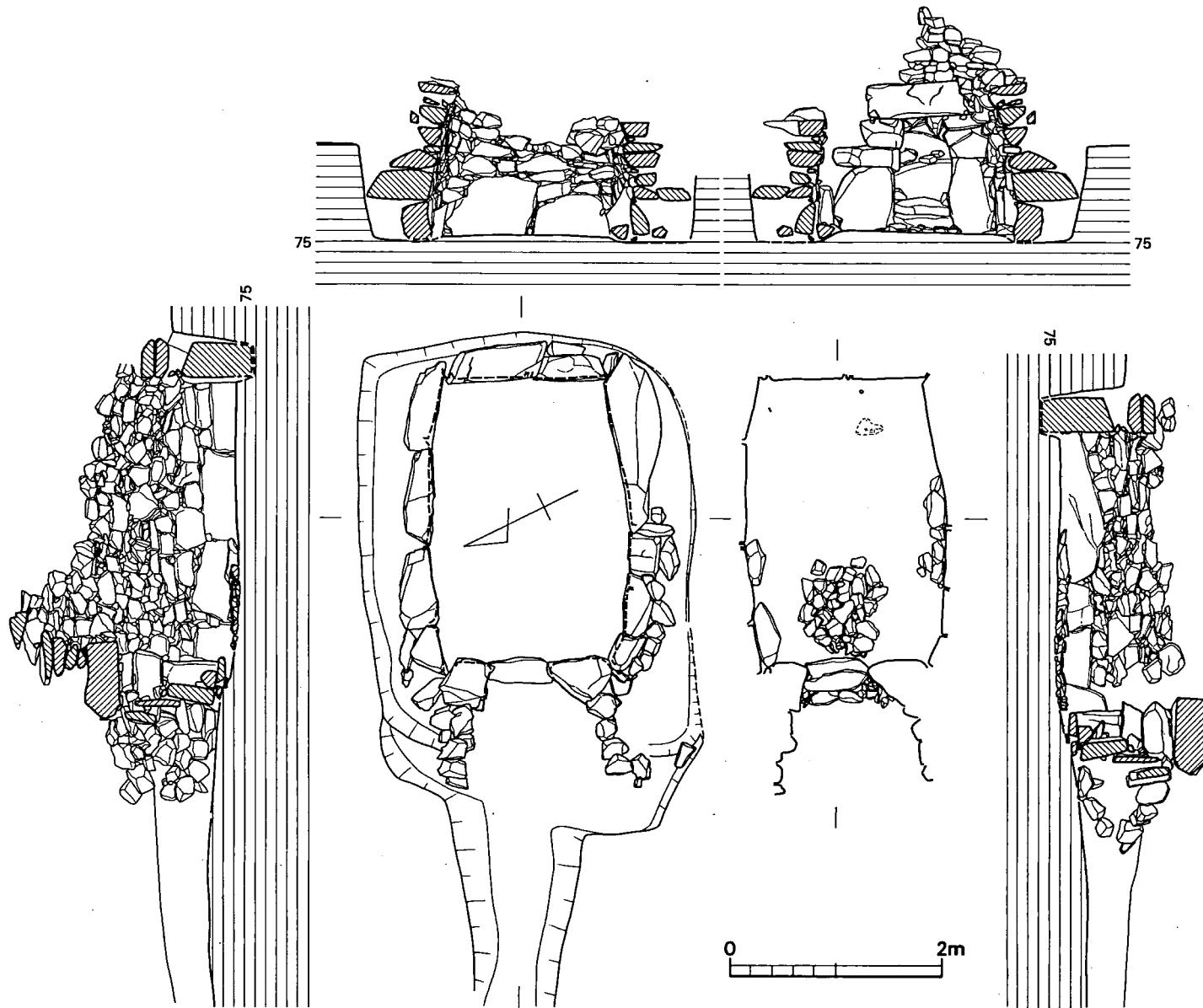
玄室床面は荒らされており、敷石が玄門近くにわずかに残る程度である。しかし床面は丁寧に整形され水平を保っている。

玄門には2本の柱状の石を立てて使用し、さらに2段の積石の上に天井石が載る。玄門幅は52cmを測る。

前庭部と玄室は、2段におかれた長方形の仕切石によって区切られ、この仕切石に合わせる様に閉塞石がある。閉塞石は完全な状態で検出された。3枚の板石を使用している。このうち2



第8図 汐井掛16号墳第Ⅲ区墳丘内土器出土状態
実測図 (1/20)



第9图 汐井掛16号墳石室実測図 (1/60)

枚に赤色顔料が残っている。この2枚の板石は、16号墳の東側から検出された箱式石棺墓の蓋石を刳いだものではなからうか。

前庭部の両側壁は20~30cm大の石を用いて積み上げられ、プランは「ハ」字を呈しやがて素掘りの墓道へとつづく。U字形の墓道はゆるやかに傾斜して周溝に達する。

3 出土遺物（図版9・37~47, 第8図・第10図~第16図）

玄室からの出土遺物は、管玉1・ガラス小玉19個+α, 耳環1, 鉄鏃片を検出した。墳丘盛土の旧表土上面では前述した如く須恵器の坏身5・坏蓋7このうち5セットは重ねた状態で検出された, また第IV区墳丘裾部から多量の土器が検出された。須恵器・坏蓋27・坏身28・高坏14・高坏蓋7・埴3・甕1・台付長頸壺1・器台1・土師器高坏9が出土した。（池辺）

装身具

碧玉製管玉 径9mm, 長さ23mmの完形品で穿孔は一方から行なわれている。

ガラス製小玉 径3~4mmで, 色調はコバルトブルーのものが過半を占め, 残りはスカイブルーである。

耳環 銀製で最大内径15.5mm, 同外径21.5mmを測る。

土器

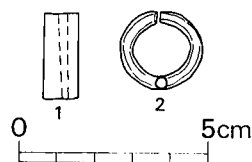
須恵器 出土土器のほとんどが, 古墳構築および埋葬の際の祭祀にかかわるものである。

1~12の坏身・坏蓋は第III区墳丘内旧表土層上で盛土を除去した際に出土したもので, 古墳構築の一過程—石室構築の過程—で行なわれた「まつり」に供された品であろうと考えられる。したがってこれらは古墳構築の時期を示す有力な資料であり, その形態的特徴から第II型式のうちに含まれると考えられる。

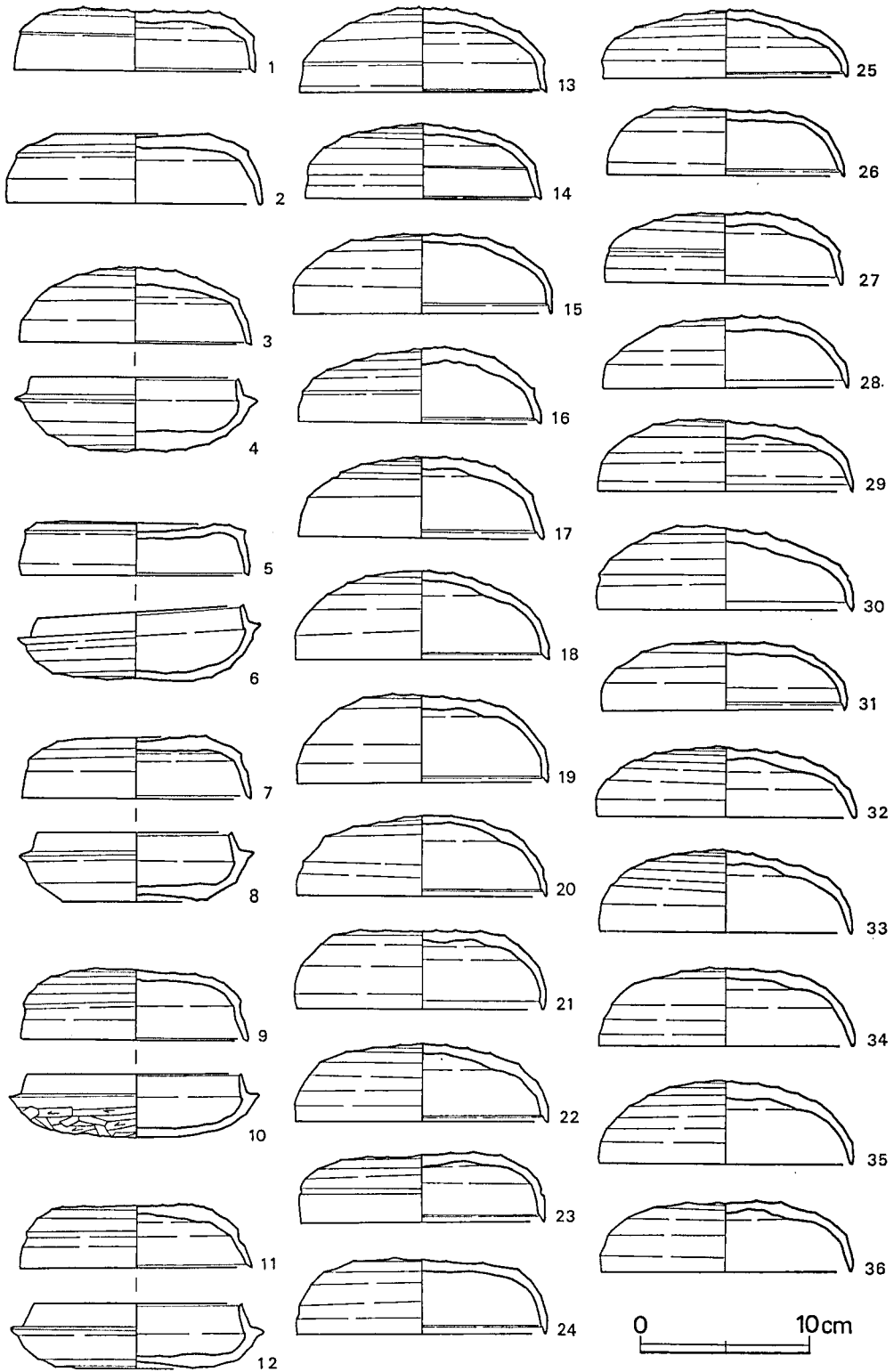
13~97のうち, 95・96の一部の破片が他の場所から出土した以外はすべて第IV区墳丘裾で意識的に破碎された状態で出土した。これらは送葬儀礼に際して供された土器と思われ, 一定の型式差を示している。それらは第III A 型式~III B 型式に属し, 68・82・83・97など一部の土器は第III区墳丘内出土の土器群と殆んど時期差を感じさせず, 初葬時のものと考えられる。

土師器 98・100・101・103・106の高坏は第IV区墳丘出土で, 104は16号墳南側斜面, 107は16号墳上での表採である。104はこの斜面に存在する土壙墓類に関係する可能性がある。104・107を除く土器は16号墳に伴うもので, これは形態差から, 98・99, 100・101, 102・103のグループに分けられる。これは, 追葬時期の差を示すものかどうかは不明である。

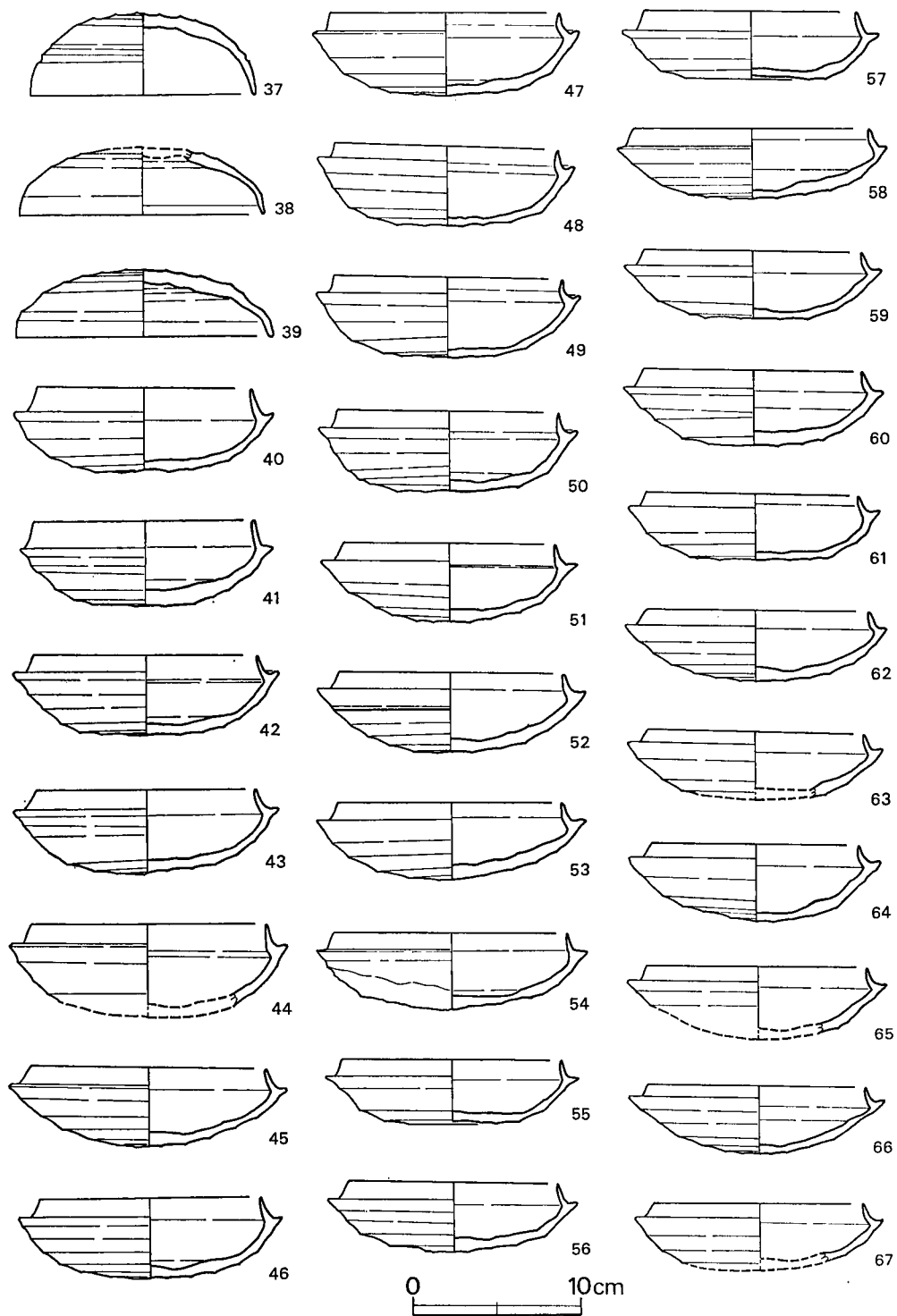
出土した土器から, 本墳の構築時期は6世紀前半の中葉に近い時期と推定され, 以後, 6世紀代を通じて数回の追葬がなされたようである。（児玉）



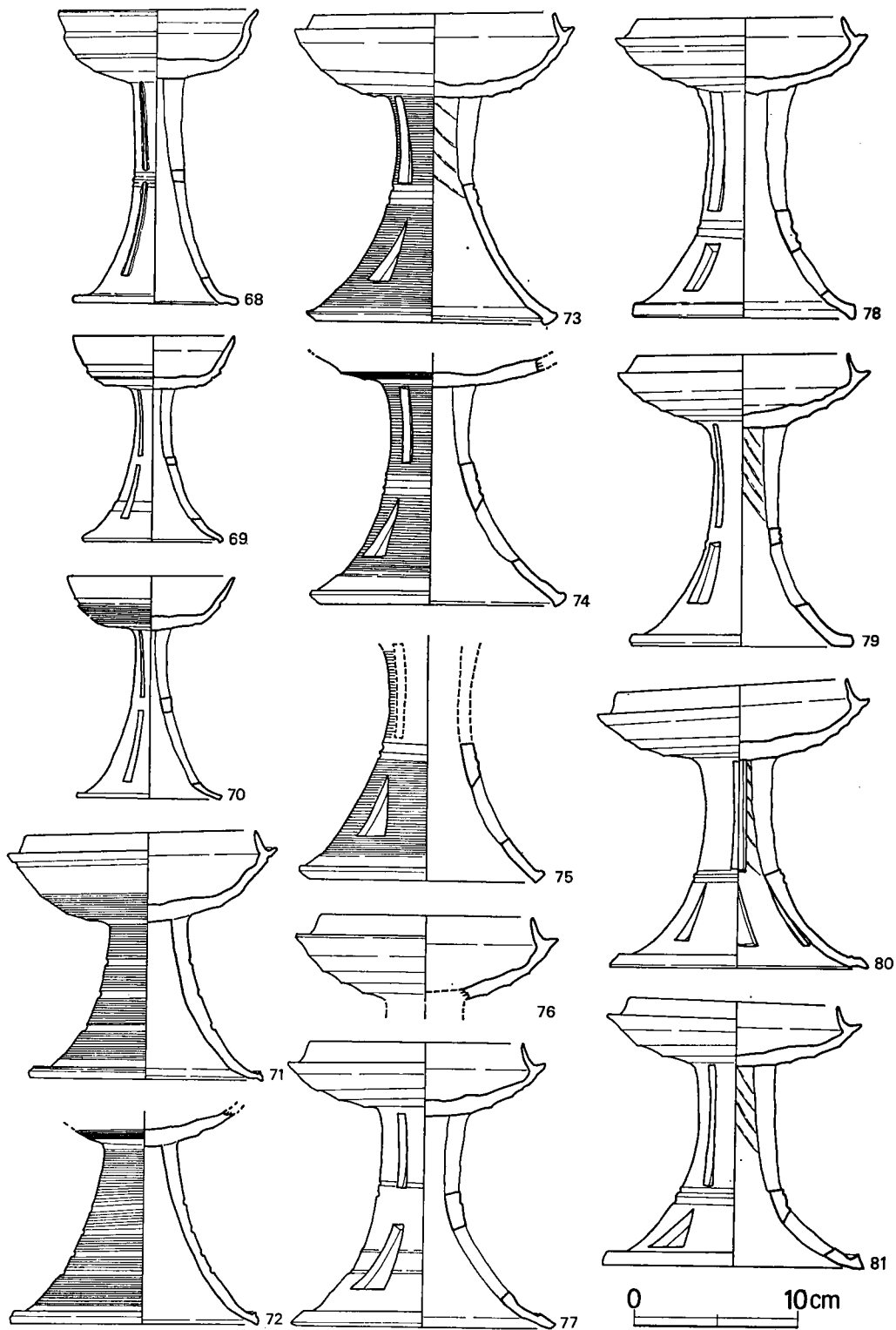
第10図 汐井掛16号墳出土遺物実測図 (1/2)



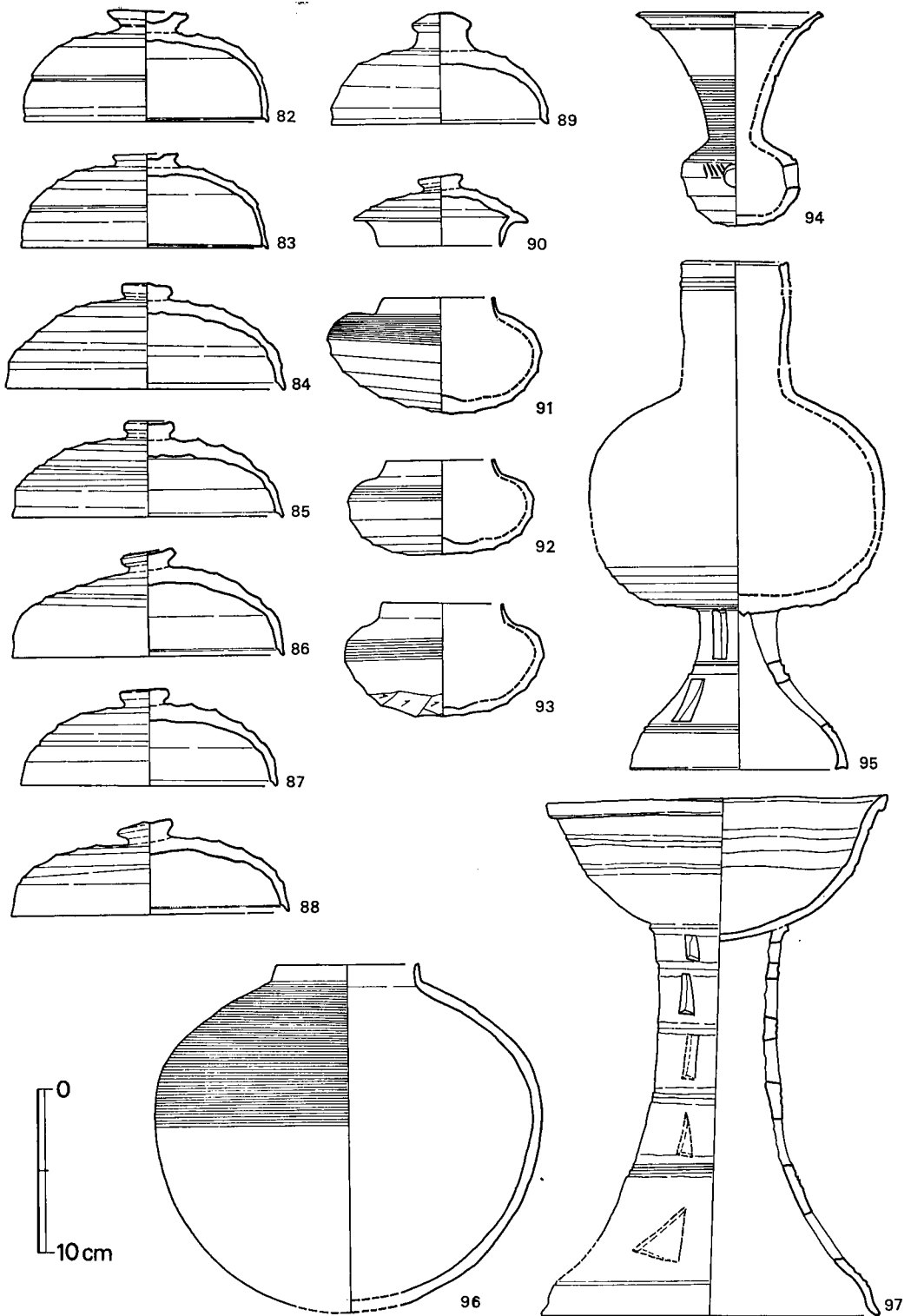
第11图 沙井街16号出土土器实测图① (1/4)



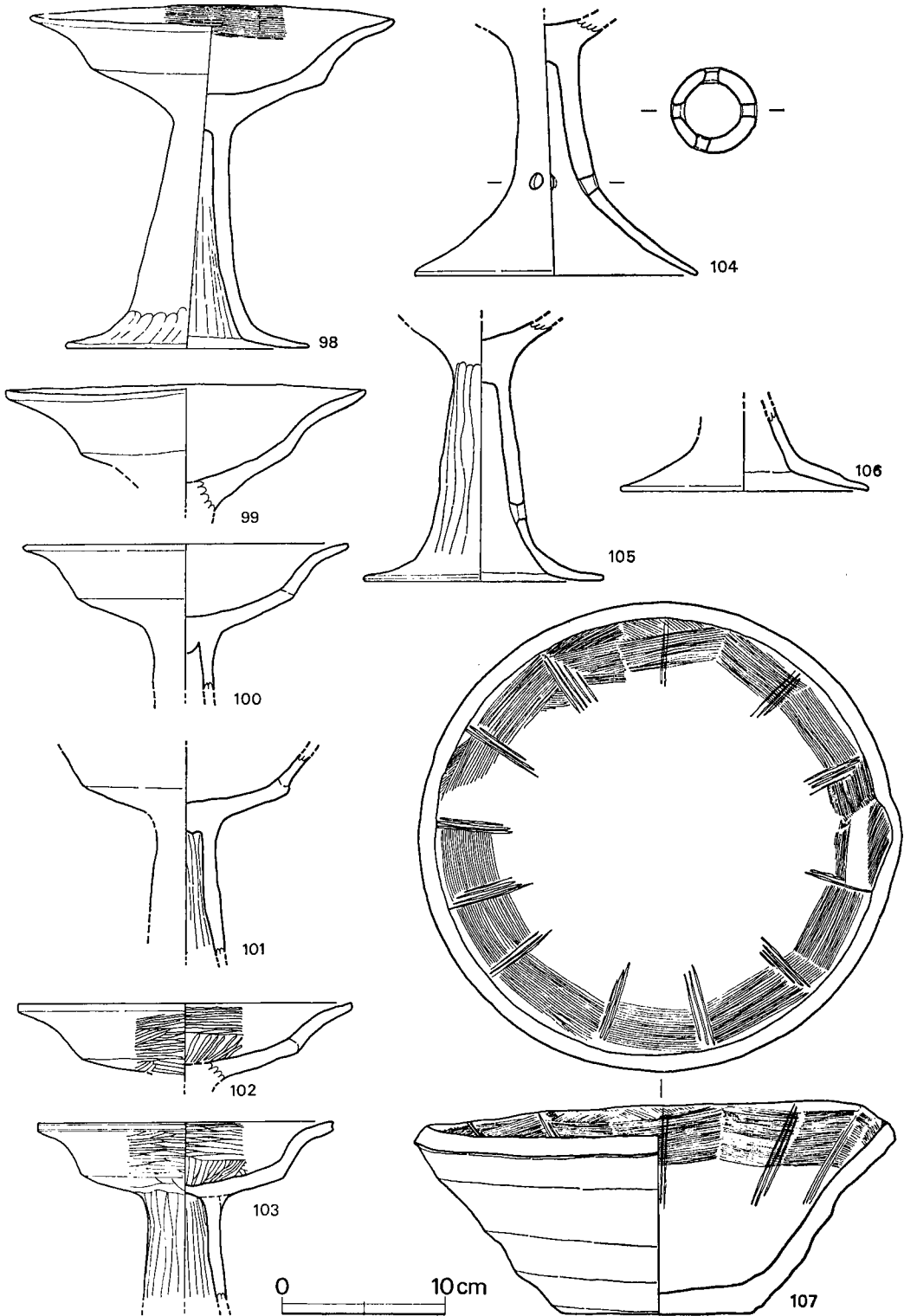
第12图 汐井掛16号墳出土器実測図② (1/4)



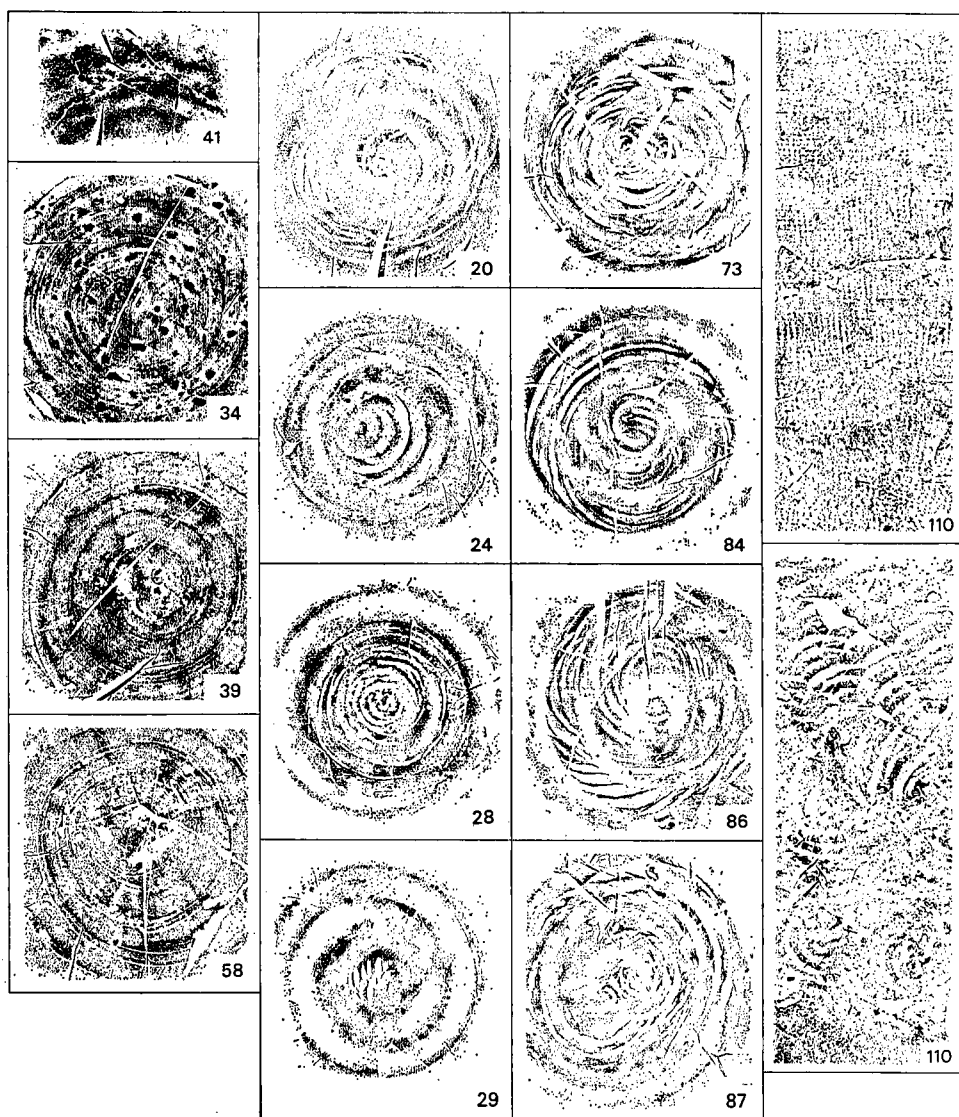
第13图 汐井掛16号填出土土器実測図③ (1/4)



第14图 沙井掛16号墳出土土器実測図④ (1/4, 97は1/6)



第15图 沙井挂16号填出土器实测图⑥ (1/4)



第16图 汐井掛16・17号墳出土土器拓影

2 汐井掛 17号墳

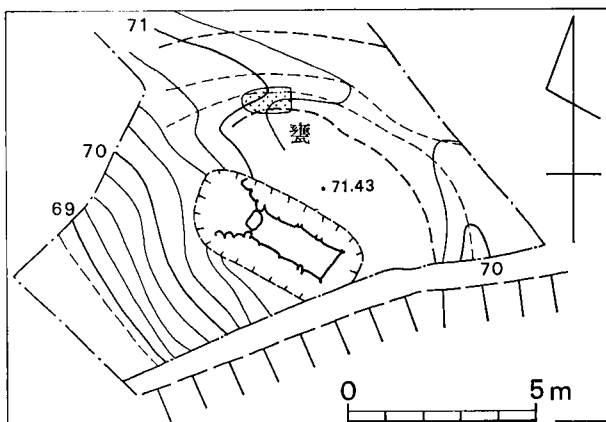
1 墳丘（第17図）

調査前に墳丘はその半分が削り取られており、残りの部分も墳丘盛土の残存状態が悪く、墳丘に関する正確な資料を得ることができなかった。調査の結果、石室中心部が墳丘中心部に構築されている可能性があり、直径10m前後の円墳に復原できる。また墳丘裾部から甕1個が故意に破碎された状態で出土している。

2 石室（図版10～15、第18図）

地山深く穿たれた墓拡内に構築された竪穴系横口式石室で北西に向かって開口する。石室はほぼ完存するが、盗掘の際に奥壁上部の石積を1～2段分抜き取って内部に侵入し床面を荒らしている。

石室はわりと丁寧に作られ、天井石相互のすき間は小石で目張りをし、裏込めは石室掘り方を穿った際に出た粘質の土で固く叩きしめている

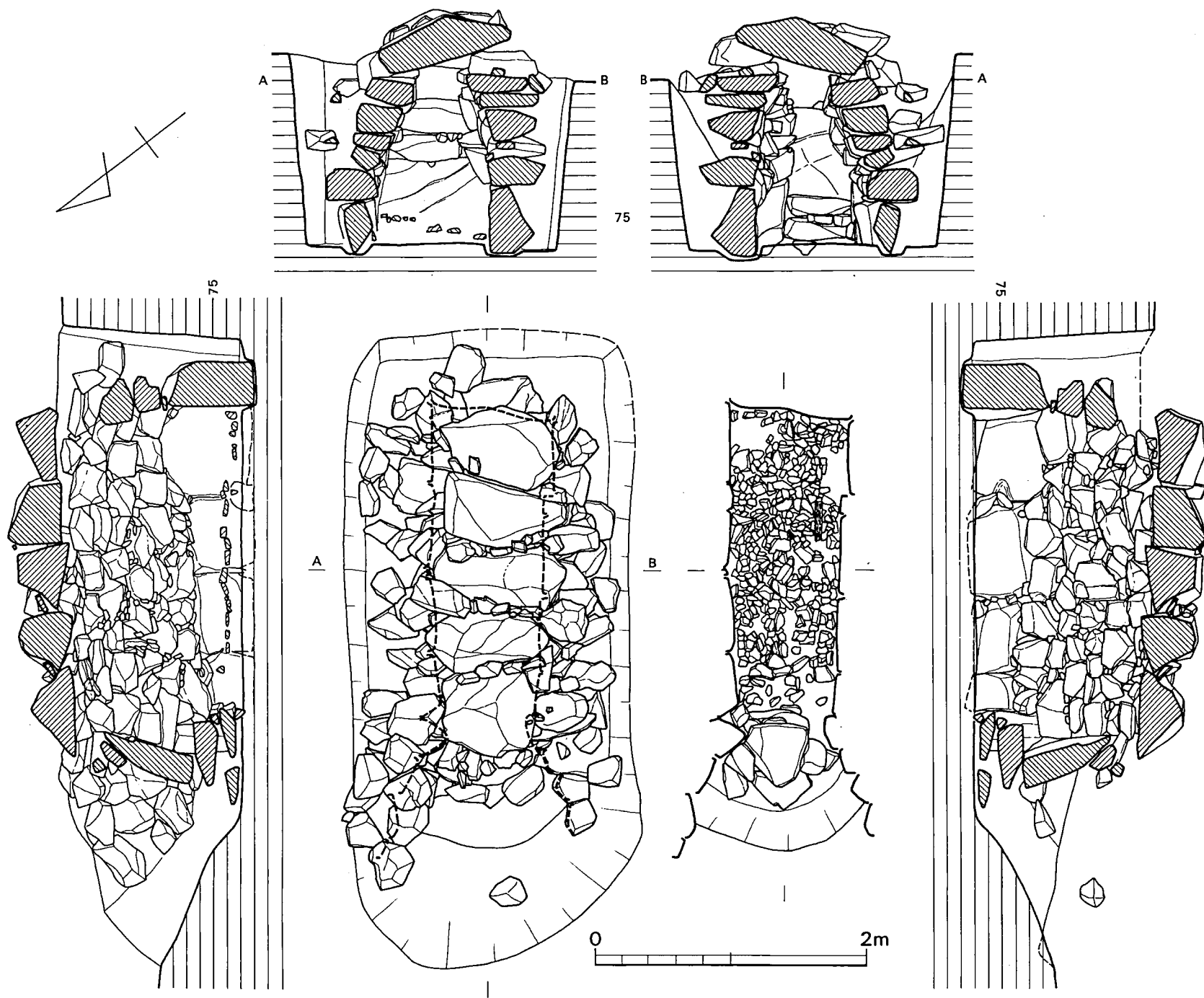


第17図 汐井掛17号墳全体図 (1/200)

る。また、天井石と左右側壁最上部の積石との間にはうすく粘土を敷いて土砂の流入を防ぐ努力がなされている。

石室床面は略長方形プランを呈するが、奥壁側で幅90cm、横口部で幅70cmを測り、奥壁側が少し広めになっている。左右側壁は腰石の上に5～6段の石積みを行っており、左壁体は土圧でせり出して原状を保っていないが、右壁はほぼ原状を保っているようで、天井石下の2段の石積に若干の持ち送りが見られるがそれ以下の壁体はほぼ直立している。また、本石室の四隅の積み石は、はずに積まれており、したがって袖石は平面的には袖石としての一定の機能を果たしているが、立体的には腰石的な役割を担っており、当然のことながら前壁構造を持たない。

石室の閉塞は基本的には自然石に近い一枚の平石でなされ、天井石と左右両側壁との間にできるすき間には20～30cm大の石で補っている。補足的に使用したこれらの石材は極めて不安定で、前庭部の土砂の排土作業中にその過半がずり落ちてしまった。前庭部の排土は、このことを予測して土層断面を残して掘った所、4層に分層できた（図版12）。この層序の各層は平面的には、たとえば言えば自然推積層や墳丘盛土のように秩序だって整然としたものではなく、



第18图 沙井掛17号填石室实测图 (1/40)

狭い前庭部においてややまちまちな状態であった。この状況は、堅穴系横口式石室を内蔵し、石室掘方の上端の線が完結して特に墓道的なものを持たないこの種の石室にあっては当然なことかも知れない(註3)。前庭部左右両壁は、石室本体に対して「ハ」の字に開く。この側壁基底底部は前庭部床面の傾斜に沿っており、左壁で70cm、右壁で60cmを測る。

前庭部掘り方を確認した面より20cm程上層で、石室中軸線からやや右壁側に寄った部分で20cm大の石を1個検出した。この石は発掘前は地表面には姿を見せず、表土を剥いで石室天井石検出後に姿を見せたものである。また、この石の下には黒色の土層はなかった。よって、平面的には石室掘方内にぽつ然と一個だけ存在するこの自然石は、当時において前庭部の位置を示す目印であったのかも知れない。

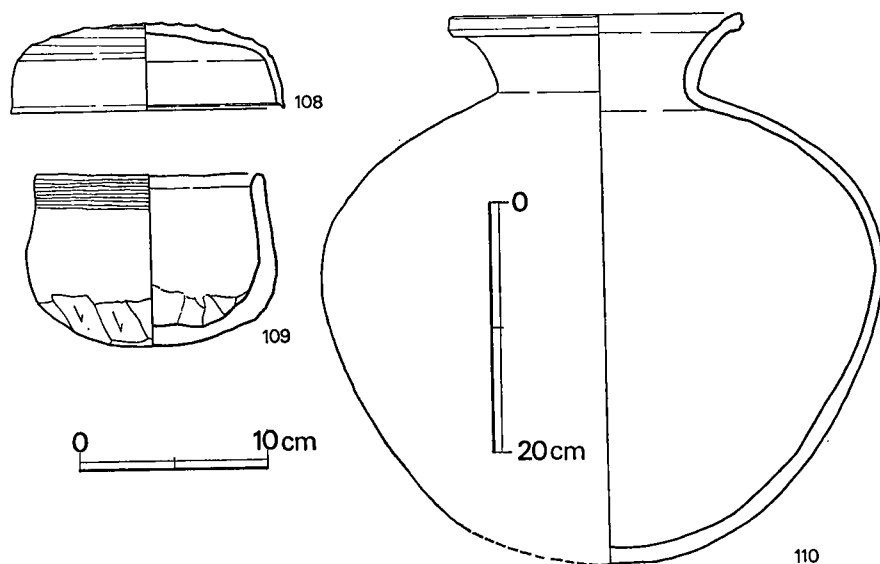
なお、この石室に使用された石材はかなり粗雑なものではあるが、各所に小石を用いて入念にパッキングを行っている。

3 出土遺物 (図版14・47, 第19図)

石室内では、床面から30cm程浮いた状態で奥壁に沿って109の土師器を、床面敷石間で鉄鍬片1、人骨を検出した。この人骨は足を奥壁側に、頭を横口部側に置いて埋葬されていたようである(註4)。鉄器は前述の鉄鍬片だけであったが、小片で口示し得ない。

石室外では、第Ⅲ区墳裾部で意識的に破砕された須恵器の甕一個体分を、第Ⅱ区周溝内であるいは第Ⅰ型式に属するかと思われる甕の国縁部片数片を検出した。また第Ⅳ区寄りのⅢ区墳裾付近で須恵器小片を検出したが、その形状の判明したのは108の一個体だけである。

108坏蓋はその形態的特徴から第ⅢA型式を降らないと考えられ、出土状態から本墳に伴うことには問題はなく、送葬儀礼に供されたものと思われるが、初葬時に伴うものとは断定でき



第19図 汐井掛17号墳出土土器実測図 (1/4・1/6)

ない。また109号はその出土状態より、本墳構築時のものと考えられる。この甕は底部の一部を欠くがほぼ完形で、焼成およびつくり共にしっかりし、形態的にも均整がとれた優品である。この時期において、甕だけによる時期決定は困難ではあるが、他の出土土器と勘案して、本墳は少くとも六世紀中葉を降らない時期に構築されたと推定する。

3 小 結

汐井掛古墳群B支群は、九州縦貫道建設に伴う調査で5基（11～15号墳）、今回の調査で2基（16・17号墳）、計7基の内容が明らかになった。16号墳北東側の丘陵斜面に存在する2基の小円墳も未調査であるが立地的にはB支群に包括することは可能であり、現状ではB群は9基の円墳で構成されている。

16号墳は、12～15・17号墳のようにほぼ墳裾を接する様に構築された在り方とはやや異なり11号墳と同様に他の古墳とは一定の距離を保っている。この在り方の差は石室構造の差に対応し、11・16号墳は単室の横穴式石室で、他の5基は竪穴系横口式石室（15・17号）と、形態的にはその系譜に連なりそうな構造の石室（12～14号）である。

内部構造に差を示しながらもこれら7基の古墳のうち11～15号墳はほぼ6世紀中葉代に比定され（註1）、16・17号墳とほぼ同時期である。このことは、石室構造の差異は古墳構築時期の差とさほど関係なく、その差異は他の要因による可能性を示唆している。

次に、本古墳群で最も多量の土器を出土した16号墳は、前にも述べたようにその出土位置と状態より、第Ⅲ区墳丘出土の土器群を古墳構築に伴うもの、第Ⅳ区墳裾出土の土器群を送葬儀礼に伴うものと推定した。前者の土器群は盛り土を除去して旧表土層上で検出したものであり、石室掘方が旧表土層から切り込まれている事と併せ考えれば、盛り土が行われる以前の石室構築の一過程でとり行われた「まつり」の供献土器だと考えられる。後者の土器群との性格の相違は、埋葬行為を行う側に内在する「まつり」の対象の相違によるものと考えられる。

（児 玉）

- 註 1 上野精志編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXII—」 1978 福岡県教育委員会
 2 池辺元明編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXVII—」 1979 福岡県教育委員会
 3 本石室の前庭部のような形状をもつ竪穴系横口式石室へはいるには、斜め上方が降りるようにして行なうものであり、その入口は墳頂部からやや降った所にあると考えられる。よってこの部分は横穴式石室の墓道と違って埋まりやすかったと考えられる。だが、17号墳の前庭部埋土の様に黒色土系統の土はなく、自然に埋まった形跡はない。死者を埋葬後に意識的にこの部分を土でふさいだと考えられる。1枚の平石で閉塞をし、前庭部を土砂で埋める過程で、天井石・閉塞石・前庭部左右側壁の間にできた間隙に20cm大の石を置いてすき間をふさいだと思われる。それ故に、閉塞石上のすき間をふさいだ石材は、前庭部の土砂を排土したらば、支えるものがなくなり自然に落下したものであろう。
 4 九州大学医学部木村幾太郎氏による。

Ⅲ 高平古墳群の調査

汐井掛古墳群の東方150～200m、標高72～65mの丘陵北斜面に構築された古墳群で、墳丘の明確ではない2号石室を含めて3基を調査した。この3基以外に周囲で古墳は発見されず、当初から3基程度で一群をなしていたのかも知れない。巨視的には汐井掛古墳群の一環をなすものと考えられる。

昭和51年度に、九州縦貫自動車道の法面との関係で、無断で1号墳の過半が削られた。この破壊行為により、後室全部と前室左壁が完全になくなり、石材が多量に散乱していた。よって1号墳南側は高さ10m程の崖面となっており、足場が悪く調査は危険を伴った。(児玉)

1 高平1号墳

1 墳丘(図版16, 第20・21図)

尾根線頂部附近に立地し、この古墳群の一番高所に位置する。墳丘は調査前に縦貫道工事によって南側が破壊されていたので詳細は明らかではないが、北側トレンチによって推定すると直径約18m、現状で高さ1.5mを測る。発掘前から東側墳裾から11m程の墓道が見られた。古墳構築に先立っての地山整形は北側は旧表土を残しており、この面から石室掘方を切りこんでいる。

2 石室(図版17～19, 第22・23図)

内部主体は複室構造の横穴式石室であり、丘陵斜面に平行して略東に開口している。

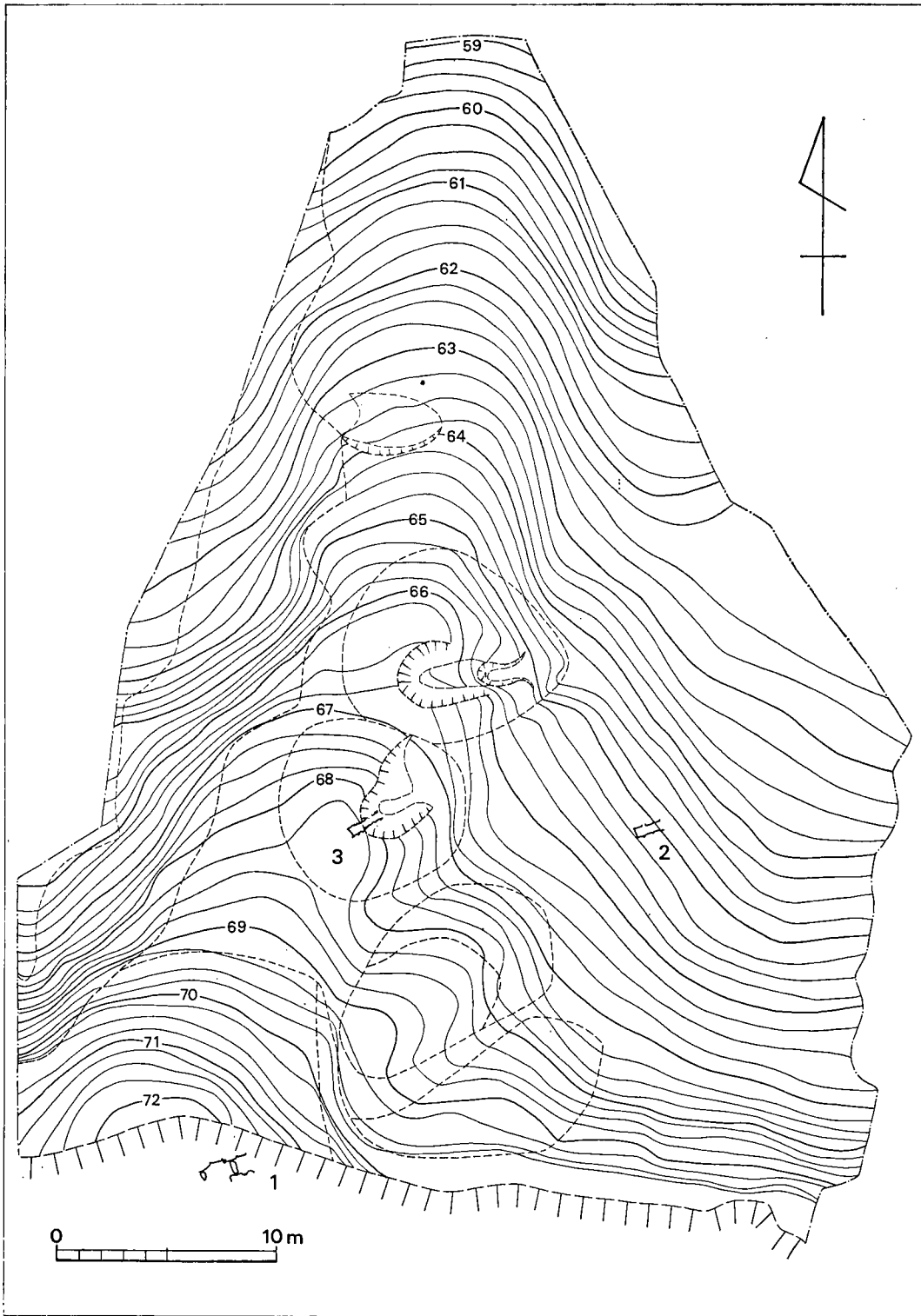
後室と前室左壁は完全に破壊されて詳細は分からない。

前室は床面での幅約0.5～0.9m、長さ1.1mの胴張りの不整長方形を呈する。床面は掘方床面に若干の土を敷きその上に5～10cm大の石を敷きつめている。前室右壁は1枚の腰石が内傾して据えられ、二段目から角ばった石材を横積みしている。四段目まで残存しており、床面からの高さは約80cmであり、この上に天井石が載るものと推定出来る。

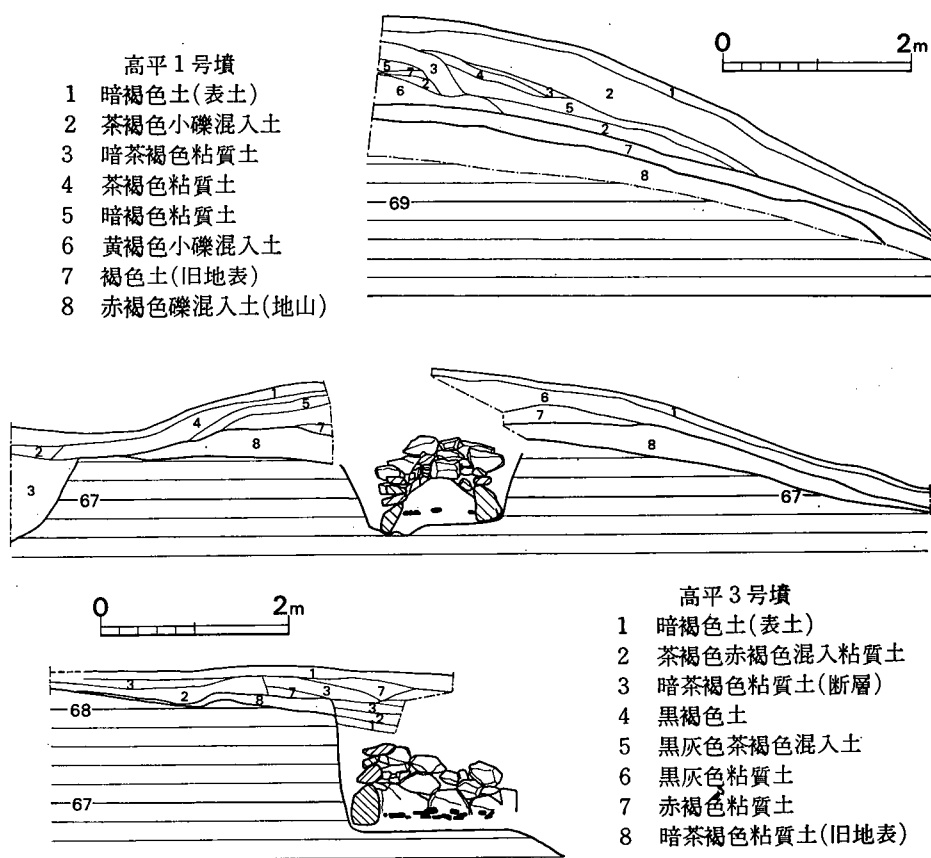
前室の入口に三段に石を積み上げて閉塞がなされている。

羨道は長さ55cm・幅約80cmで、腰石は小さな石を横積みし、二段目からは粗雑に小口積みしている。

墓道は深さ0.4～1.5m、上端幅2.0～3.6m、下端幅0.5～0.7m、全長約15.5mを測る。羨道入口より約4.5mで折れ「く」の字形になり、これより先は掘り上げた土を左右に積んでいる。



第20图 高平古坟群地形实测图 (1/300)



第21図 高平1・3号墳丘断面図(1/80)

3 出土遺物 (図版20~23・48~52, 第23~27・31図)

前室右壁の床面直上より須恵器が出土し、閉塞石より1.5m程の墓道上に床面より30cm程浮いた状態で須恵器・土師器・砥石が出土した。

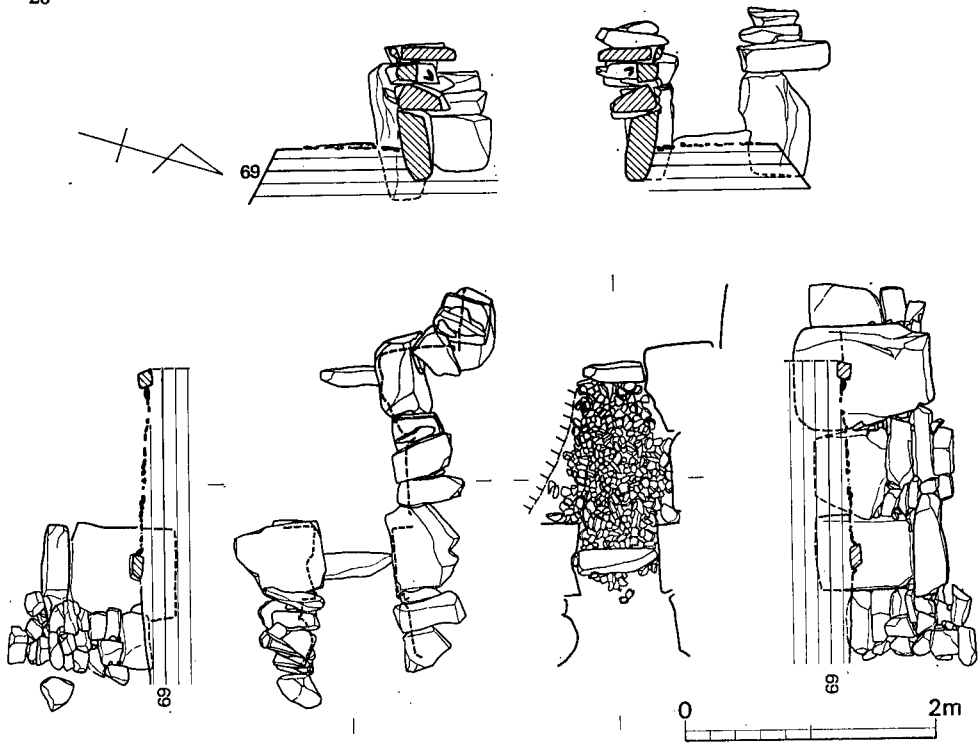
墳丘第IV区の旧地表直上から須恵器・土師器が三群に分かれて出土した。この土器群は大甕が主体である。
(日高正幸)

工 具

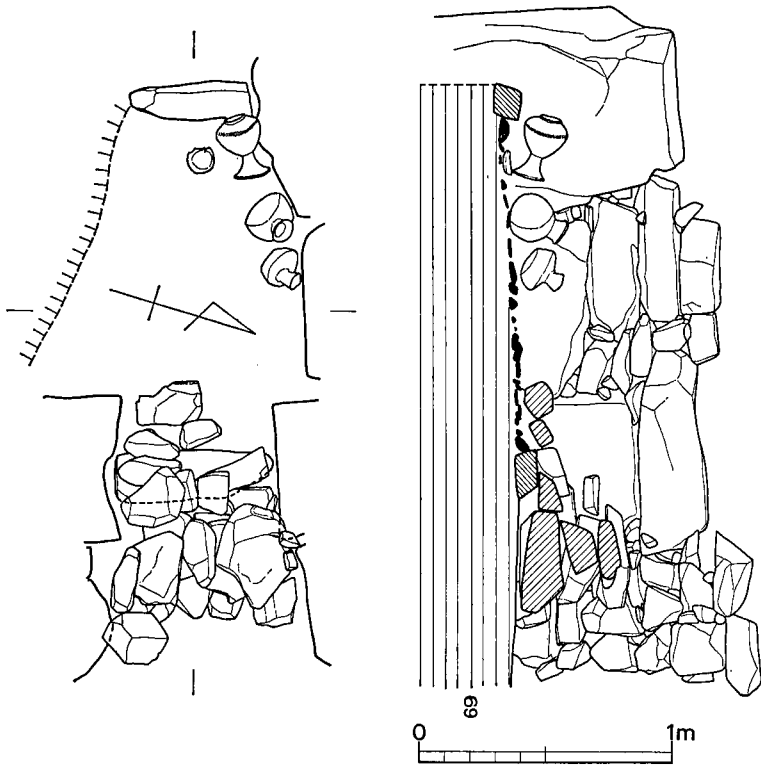
砥 石 2点出土し、1は第IV区墳裾部で検出したもので、砂岩製かと考えられる。一部欠損しているが、長さ7.3cm、幅2cm、厚さ0.8cmを示す。2は墓道から土器といっしょに床面から浮いた状態で検出した。石質不明で目が荒らい。長さ5.7cm、幅2.5cm、厚さ2.2cmである。

土 器

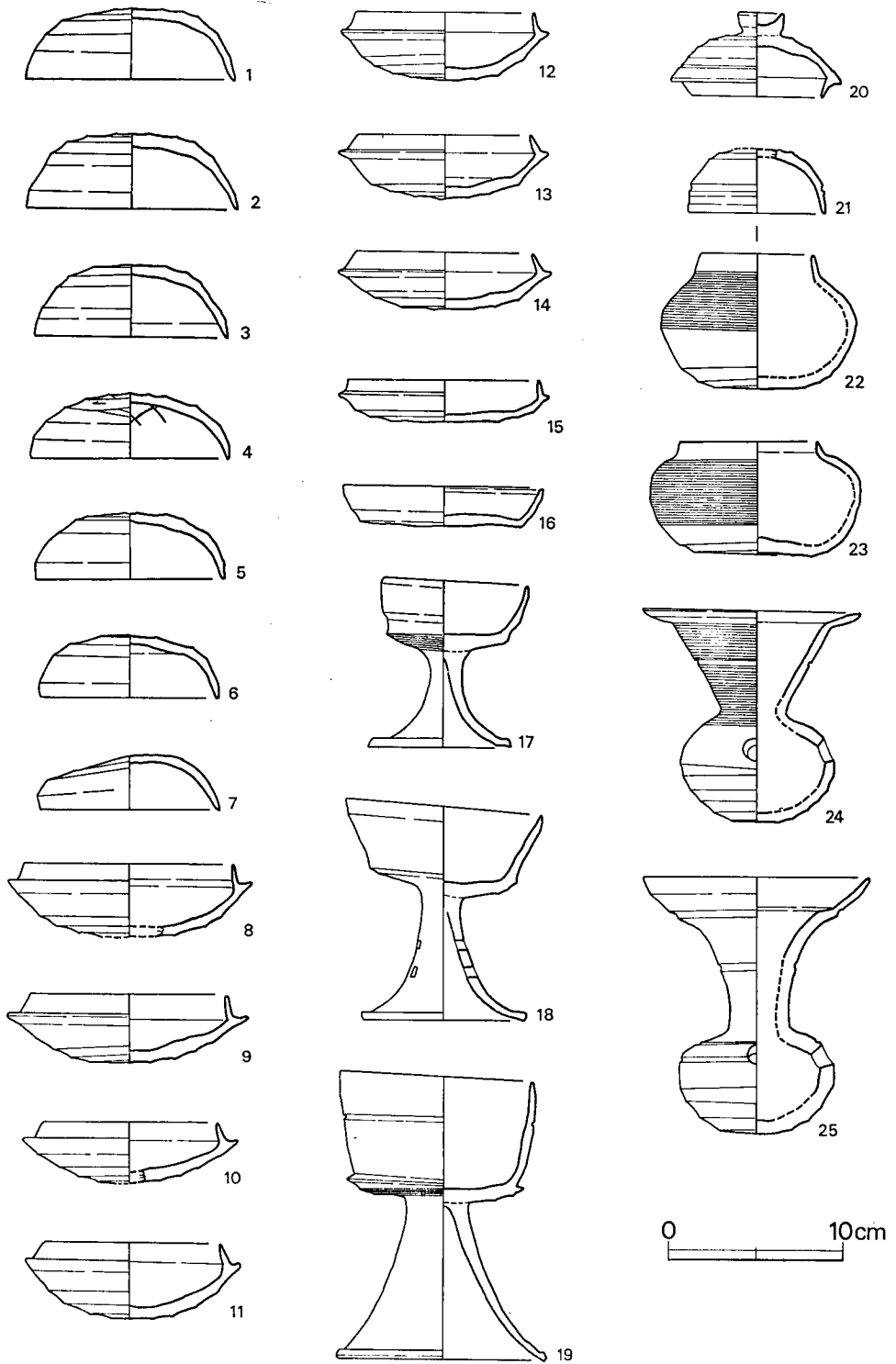
須恵器 ほぼ原位置を保って出土したのは、前室床面上で検出した7・31・33・34と、第IV区墳丘内で検出した35・36・37と若干の土師器である。35~37の大甕は旧表土上で検出した



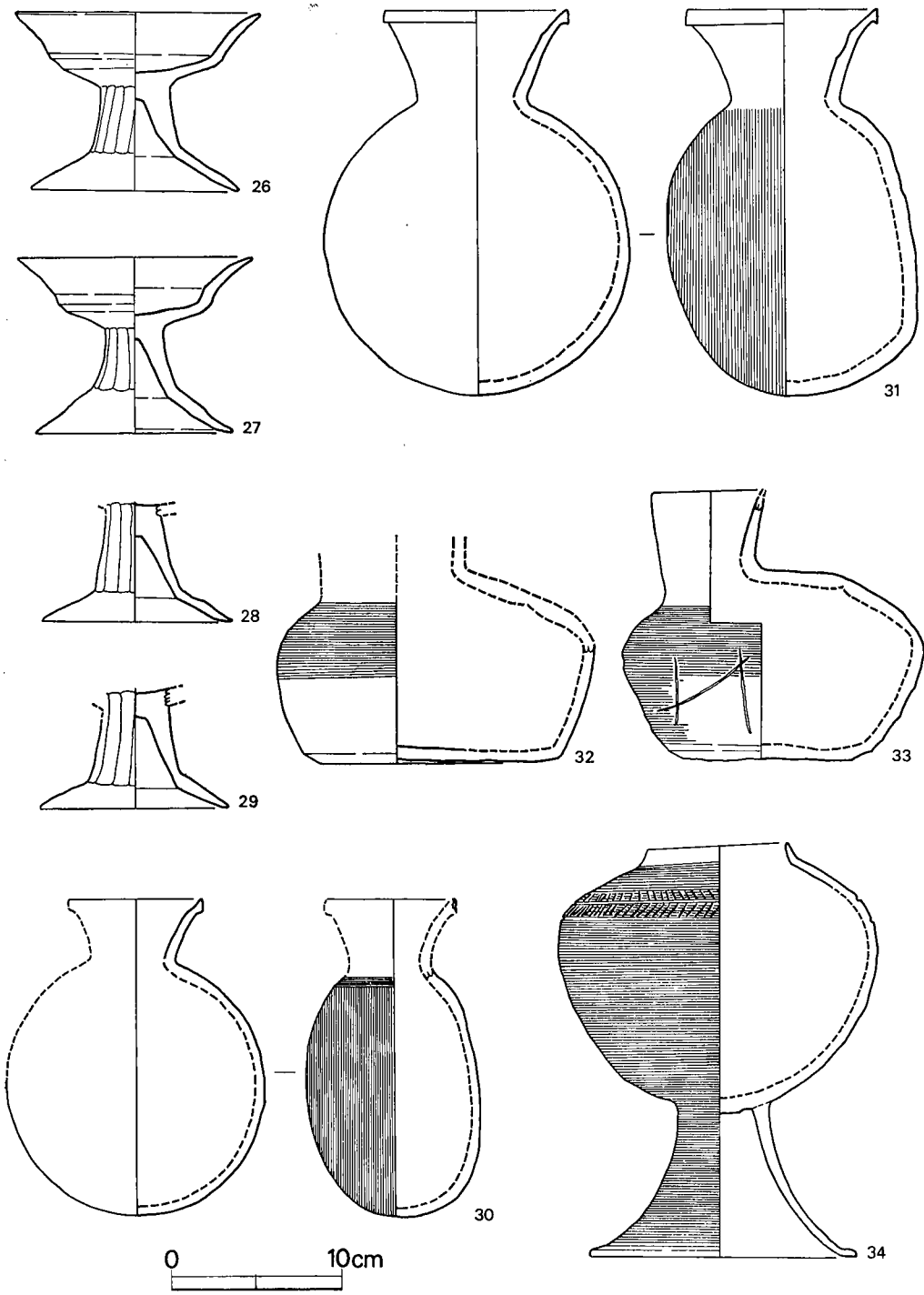
第22図 高平1号墳石室実測図 (1/60)



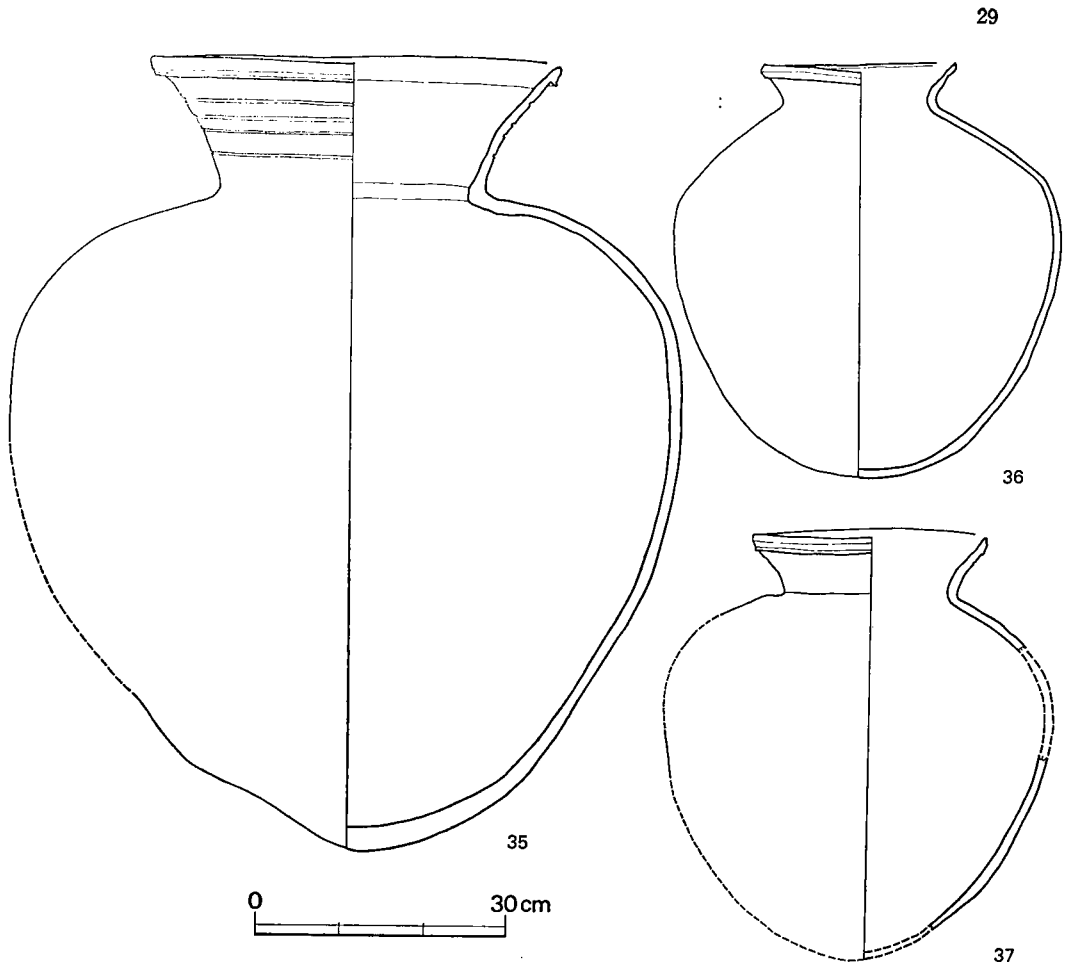
第23図 高平1号墳閉塞石および遺物出土状態実測図 (1/30)



第24图 高平1号墳出土土器実測図① (1/4, 7は前室床面出土)



第25图 高平1号墳出土土器実測図② (1/4 31・33・34は前室床面出土)

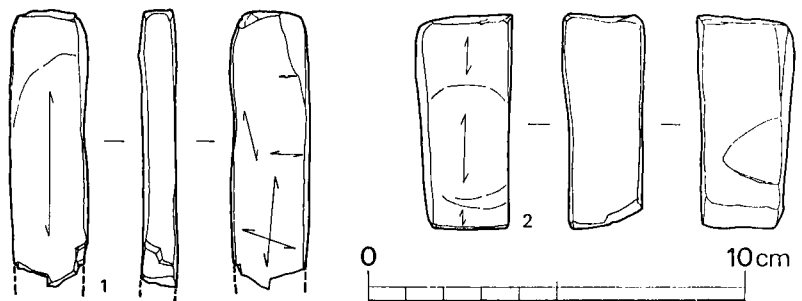


第26図 高平1号墳出土土器実測図③ (1/9)

もので意識的に破碎されている。これらは石室構築の過程の祭祀に供されたものと考えられる。他は墓道埋土および墳裾等から出土している。これらは第ⅢB型式以降のものである。

土師器 墓道埋土から2点(26・27), 第Ⅳ区墳丘内土器群の第1群に伴って2点(28・29), 計4点の高坏が出土している。

以上の出土土器から
本墳は6世紀後半に築
造されたと考えられる
(児玉)

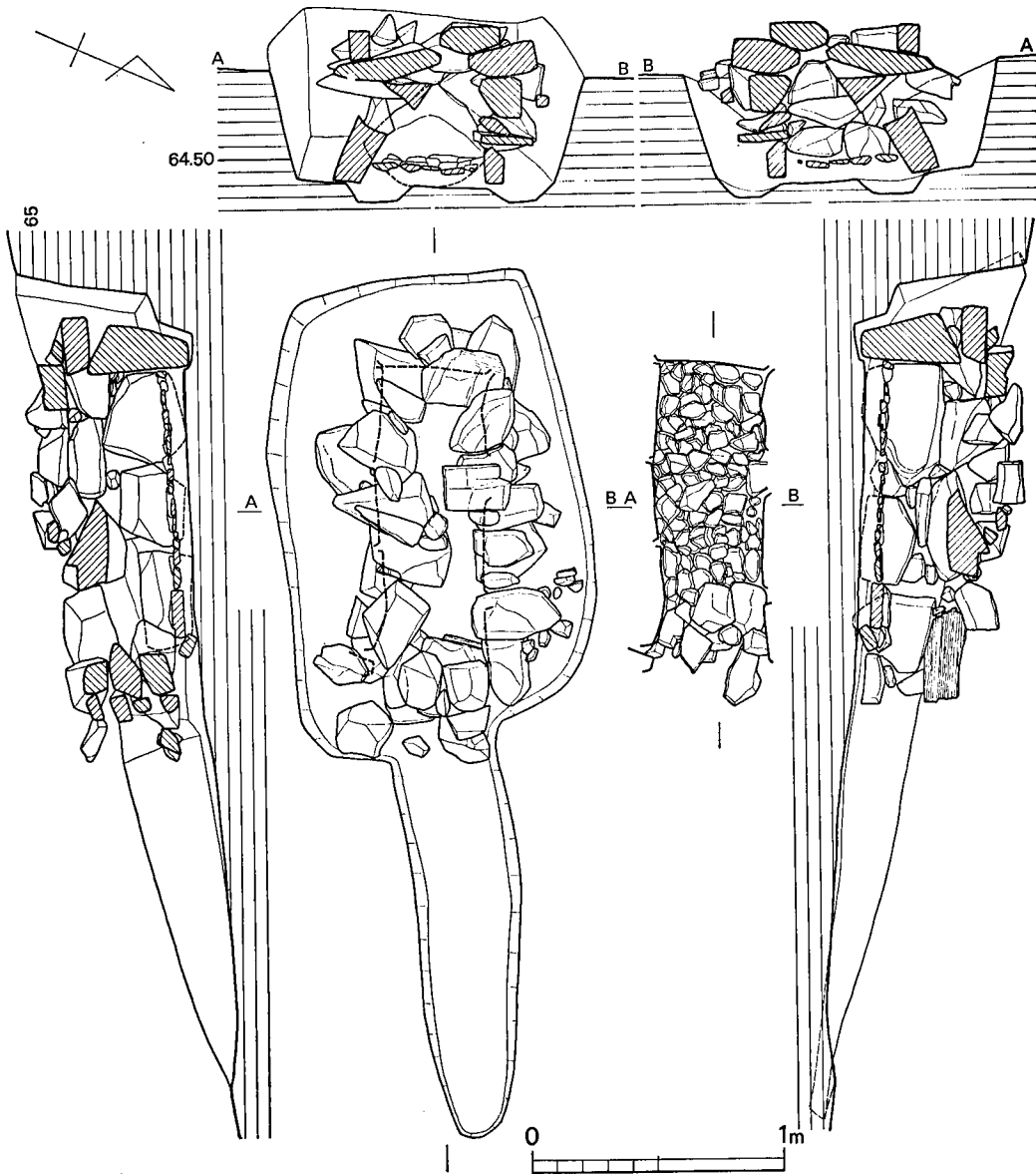


第27図 高平1号墳出土磁石実測図 (1/2)

2 高平 2 号 墳

1 墳 丘 (図版16・第20図)

丘陵緩斜面に立地する。伐採後の観察では墳丘の高まりなど見られなかった。発掘の過程で表土除去の際に直ぐ天井石を検出した。



第28図 高平2号墳石室実測図 (1/30)

2 石室（図版24，第28図）

主体部は単室構造の横穴式小石室であり，斜面とほぼ直交し，標高の低い東側に開口する。

石室は長方形のプランで石室掘方の床面に土砂を敷いて床石の安定をはかっている。石室の入口付近には15cm程の石が二石，仕切石のような状態で設置されている。

奥壁の腰石は略三角形の一枚石であり，左右壁は三石よりなり，角ばった石をよこ長に内傾させて据えている。二段目からは角のある不整形の石材を用いて粗雑に持ち送りしながら積んでいる。床面より天井石まで約40cmを測る。

玄室入口に壁面より小さめの石材によって閉塞がなされている。

閉塞石より，長さ1.5m幅30cmほどの墓道状の掘り込みが見られる。遺物は皆無であった。

（日高）

3 高平3号墳

1 墳丘（図版16，第20・21図）

丘陵の斜面上標高約67mに立地している。調査前の変換線から判断すると墳径は約7mと考えられた。調査の結果，斜面を旧地表から切り込み，掘方内の土を利用し40～60cm程の盛土を行っている。本来の墳径は7m，高さ1m程度の小円墳であったと考えられる。墳丘構築に先だって墳裾の旧表土層をわずかに整形している。

2 石室（図版25，第30図）

隅丸長方形の掘方内に構築された単室構造の小形の横穴式石室である。主軸はほぼ東西を示し東に開口している。石室掘方は旧表土層から切り込んでおり，最深部で90cmを測る。

玄室は長方形プランを呈している。石室の残存状況は奥壁で4段，左右両側壁3段を残すだけである。

基部は壙底をわずかに掘り下げて奥壁1枚，左右両壁4枚のほぼ同じ大きさの石材を用い腰石を立てて据えている。各腰石の間には腰石を支えるために頭大の角礫が据えられている。2段目以上の石の積み方は粗雑で石の大きさも一定しない。壁体はわずかに内傾している。床面からの高さは約70cmを測る。

玄室床面は二重構造であることが確認された。追葬の可能性が考えられる。一次・二次の床石ともに奥壁側に大きめの礫を敷き，他は10cm前後の礫を敷石として床面を水平に保っている。

玄門部と羨道部は地層活動により床面が50cm以上落ち込み完全に破壊されており詳細は明らかではない。

羨道部には閉塞石が残る。閉塞石の外側からU字形の素掘りがゆるやかに傾斜してつづく。羨道・閉塞及び墓道では追葬の痕跡は認められなかった。

3 出土遺物（図版52，第29図）

玄室の玄門横から須恵器のほぼ完形の提瓶1個体，坏蓋1個体が出土した。また東側墳裾から1～2m位の所から須恵器の大甕を破片で検出した。

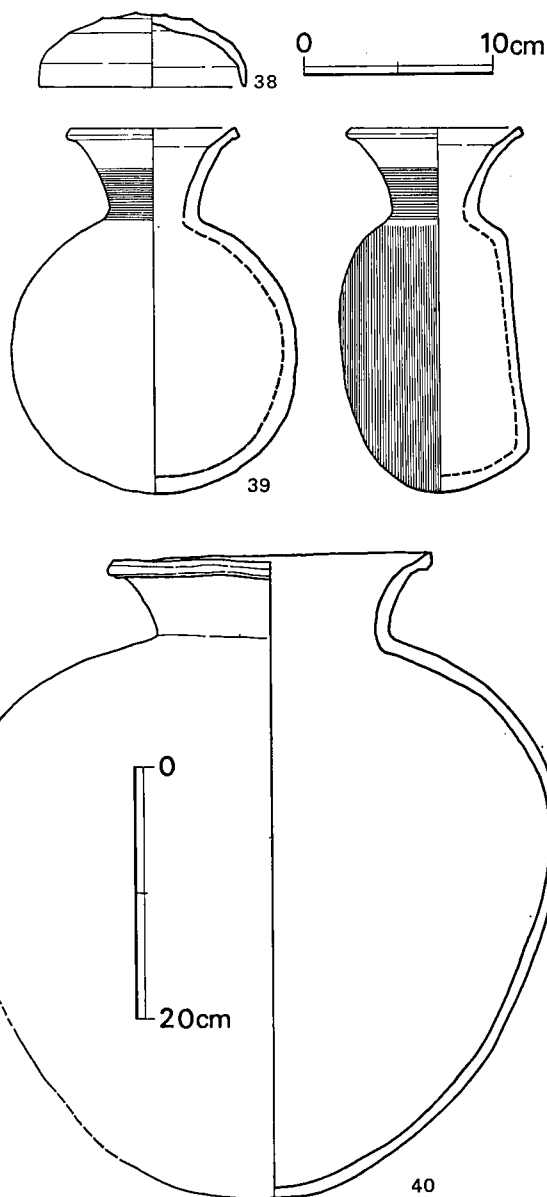
（池辺）

4 小 結

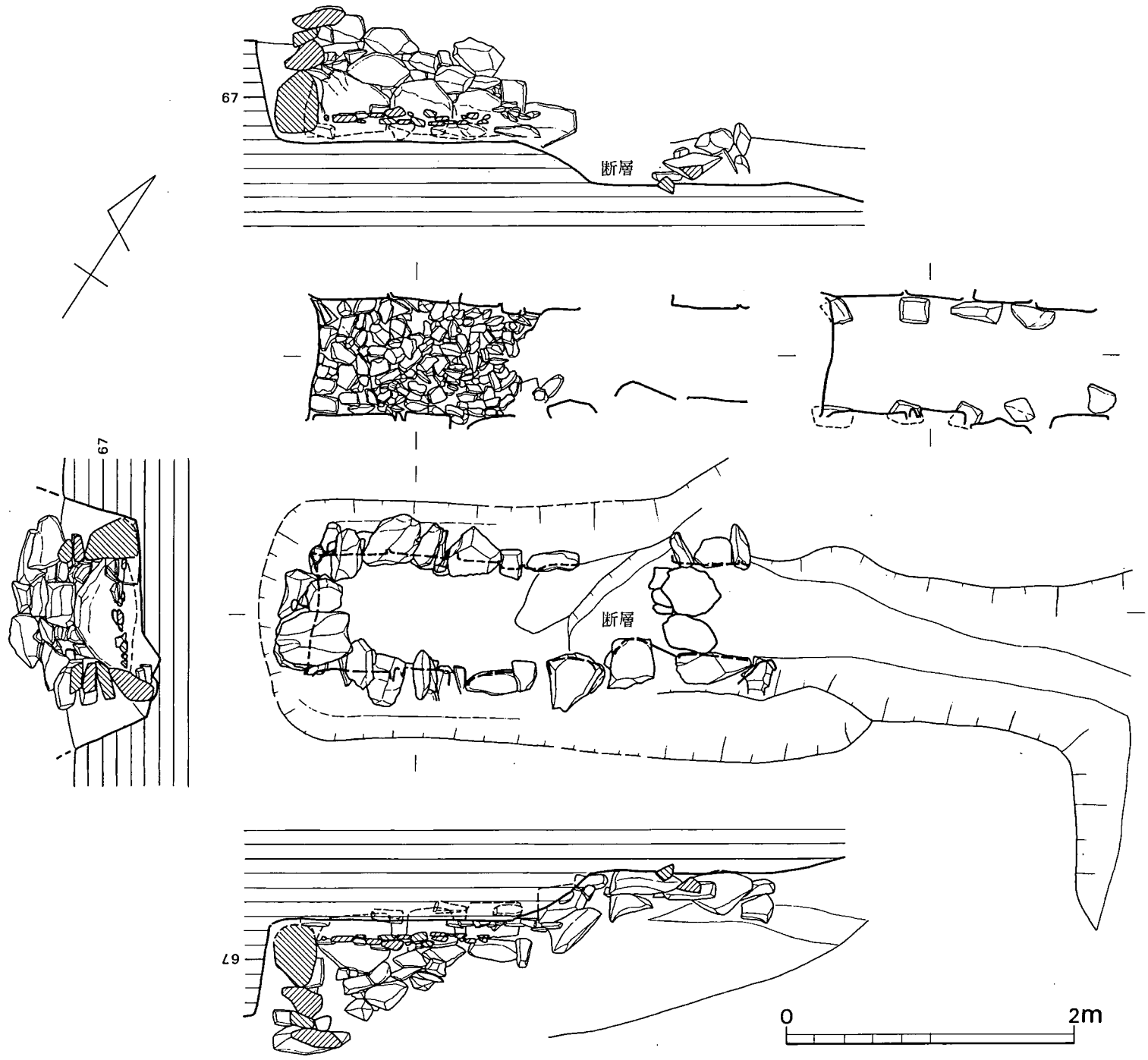
調査の結果，各古墳の内部構造は三者三様でバラエティに富むものであった。この石室構造と墳丘規模に見られる差は，各々がさほど時間的へだたりをおいて構築されたとは考えがたく，被葬者の生前に属した集団内の社会的な階層差の反映とみることが許されよう。

また，図版17に示した如く，1号墳の墓道は異常に長く全長15.5mを測る。古墳直径と不釣り合いに長いこの種の墓道は沙井掛古墳群においても3号墳，19号墳等で検出されており，いわゆる「ハカミチ」の存在が推定されている。高平古墳群において，実際に遺構として検出することに成功したわけではないが，一応「ハカミチ」の存在の可能性を留保しておきたい。

次に，1号墳IV区で検出した3個の大甕は，底部が欠損したり，当初から底部にひびがはいったものであり，水あるいは酒等を入れる容器として本来の機能を全うし得ないものであり，故意に破碎されていた。更に裾部から坏類が出土しており，一応，容器と飲食器が揃っている。

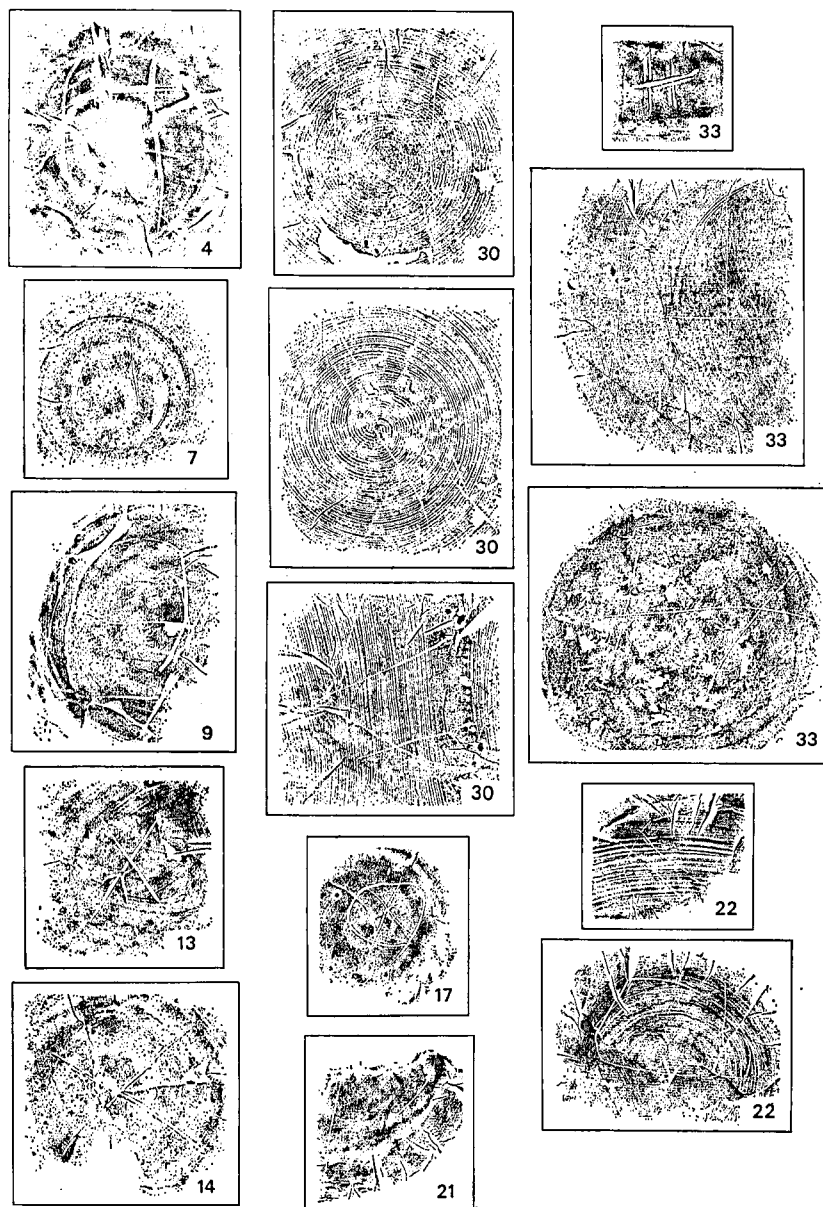


第29図 高平3号墳出土器実測図（1/4・1/6）



第30图 高平3号填石室实测图 (1/40)

祭りの実体は明確ではないが、飲食行為の形式を伴うものであったと考えられる。しかし、甕は底ぬけであり、仮器として据えられ、祭りの終了と共に破碎されたものであろう。(児玉)



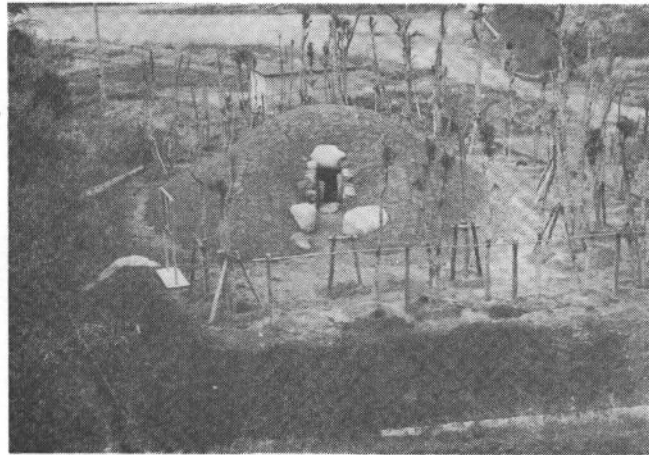
第31図 高平古墳群出土土器拓影

IV 南ヶ浦古墳群の調査

宮田町から宗像町に通ずる赤木峠付近に端を発し、南流して犬鳴川に住ぐ有木川左岸丘陵上に構築されている。地目は山林で、行政区分上は鞍手郡宮田町大字下有木南ヶ浦に属する。

当初の分布調査の時点でこの地域は窯跡の存在する可能性が考えられていた。樹木の繁茂する季節での表面観察では可能性の域を出なかったが、昭和52年の初夏には工事がこの周辺にも及び、窯跡の有無についてブルドーザーにより表土除去を行ない、調査を実施した。窯跡は存在しなかったが、帰途に周辺の分布調査を行なって4号墳を発見した。以後は、いもずる式に1～3号墳を発見し、1～4号墳の地形測量中に5号墳を、5号墳調査中に6号墳を発見した。

これらは、調査前に墳丘を破壊されたものを含めてすべて円墳である。この円墳群は谷をはさんで2つのグループに分かれ、1～4号墳をA支群、5、6号墳をB支群とする。A支群は1号墳と2～4号墳の2小支群に分かれそうである。B支群の方は工事が進行しており5・6号墳周辺は旧地形を残していなかったが、5・6号墳北側で数個の石材が転がっており、他にまだ古墳が存在していた可能性がある。



第32図 移築復原された南ヶ浦3号墳

調査は昭和52年7月1日に開始し、7月31日に無事終了した。なお、公団側の自発的好意により、3号墳が西側低地に移築され、墳丘を含めて復原保存された。(児玉)

1 南ヶ浦1号墳

1 墳丘 (図版26・27, 第33～36図)

墳丘は調査前の破壊が著しく、その詳細は明らかではないが、南側トレンチより検出された周溝の一部から推測すれば、直径13m前後の円墳であったと考えられる。なお、墳丘の高さ及び石室掘方の状況は判断できない。



第33図 南ヶ浦古墳群周辺地形図 (1/2000)

2 石室 (図版27, 第37図)

石室も破壊が著しく、わずかに右壁及び前室右壁の一部を残すという状態である。

石室は北東～南西に主軸をおき、南西に開口にする複室構造の横穴式石室である。

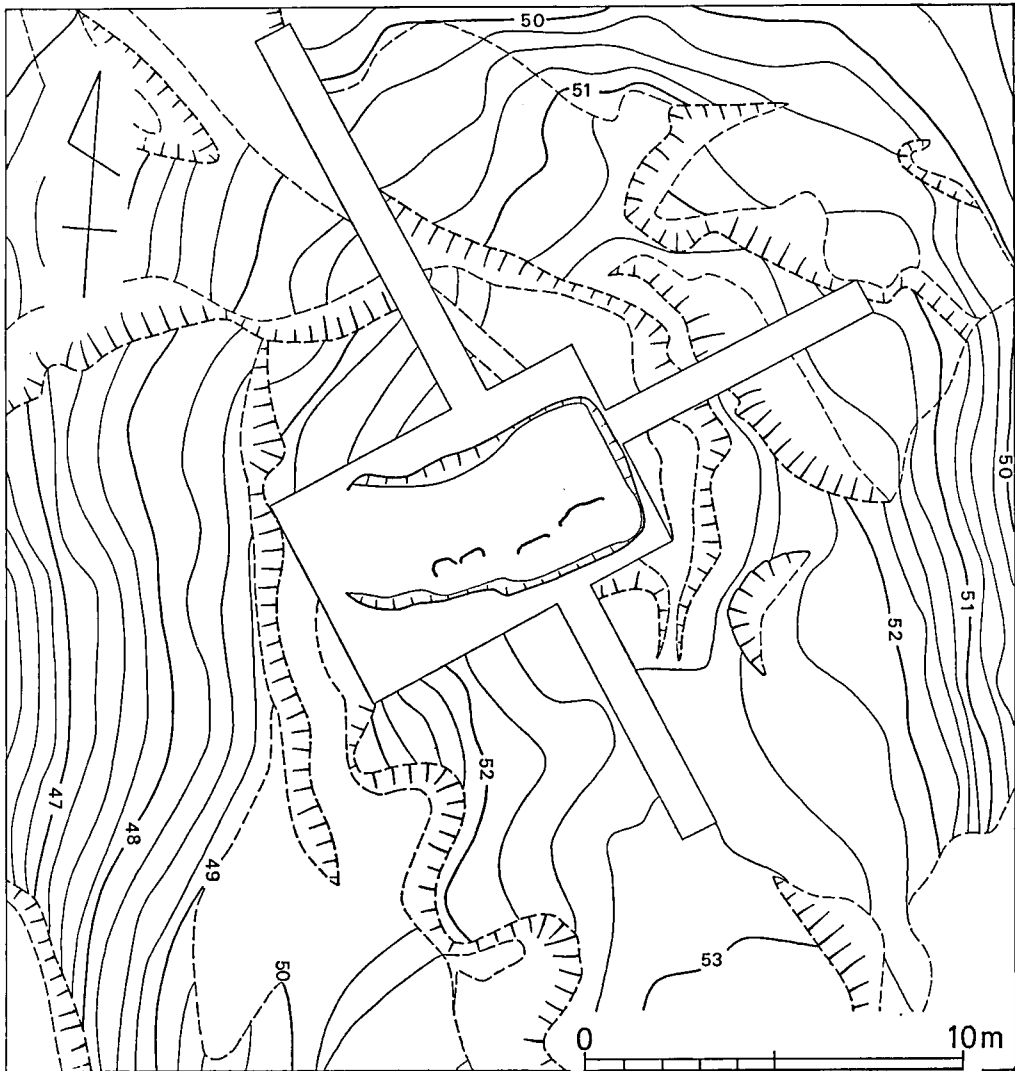
後室は長方形プランを呈するが、前室は不明であり、袖石も残存しない。床石は前室右壁側にその一部を残すのみである。

右側壁には巨大な花崗岩の石材を使用している。

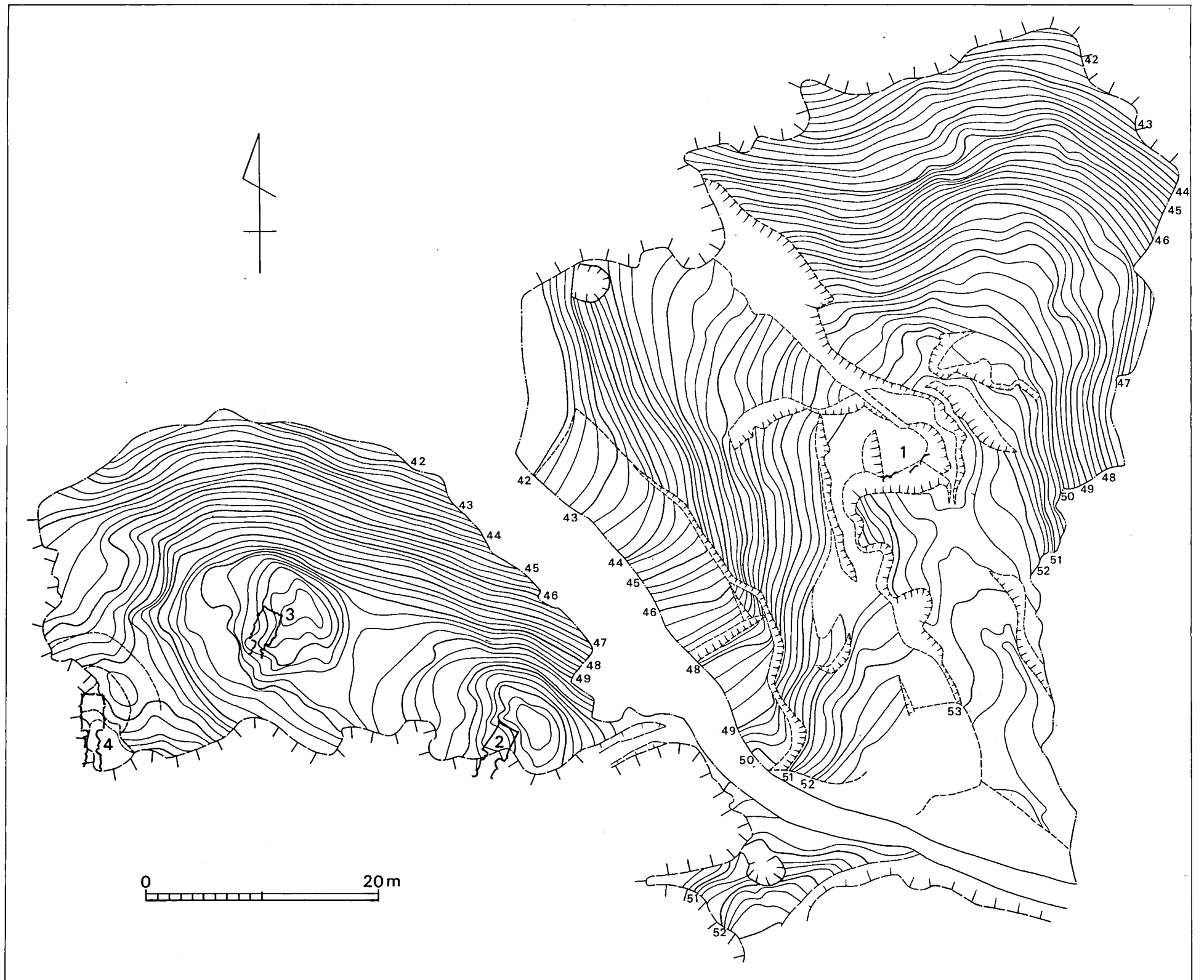
3 出土遺物

後室の北隅よりに鉄片を検出しているが、その詳細は不明である。

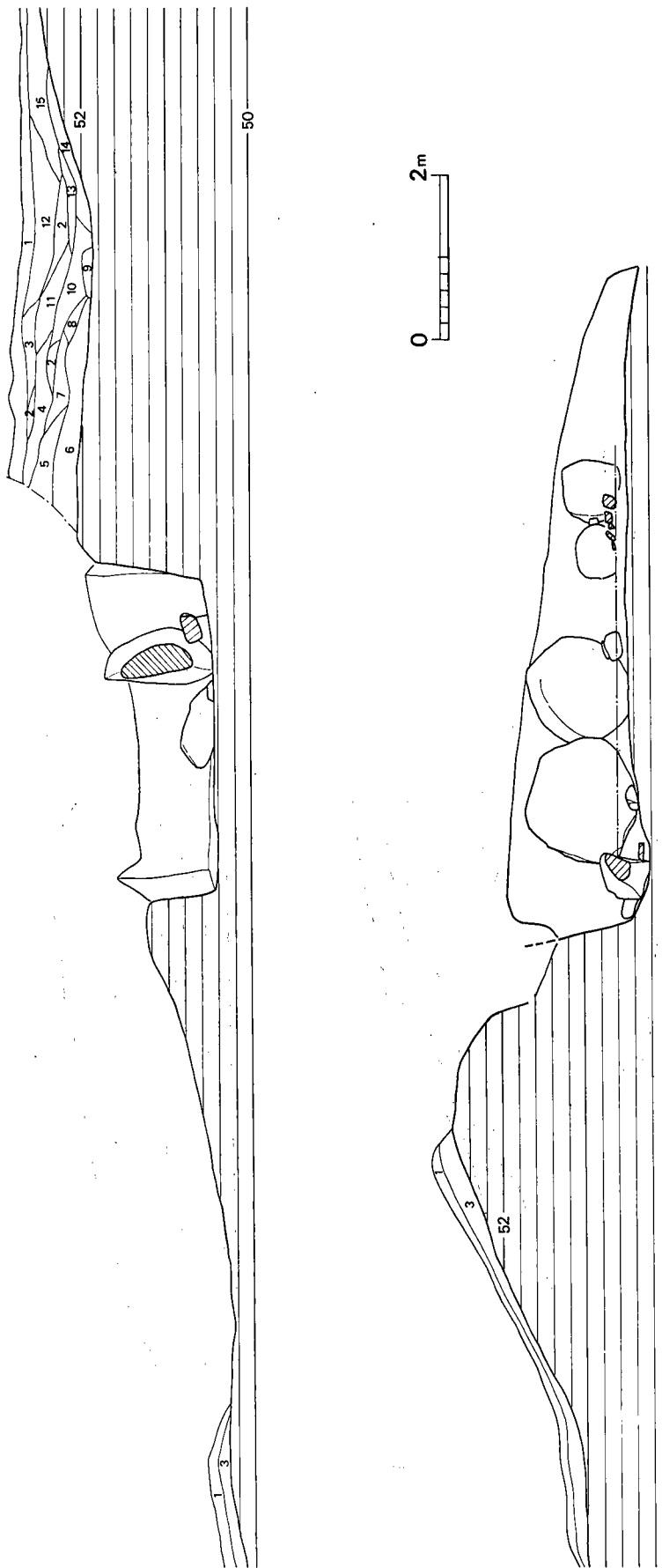
(大石 昇)



第34図 南ヶ浦1号墳全体図 (1/200)

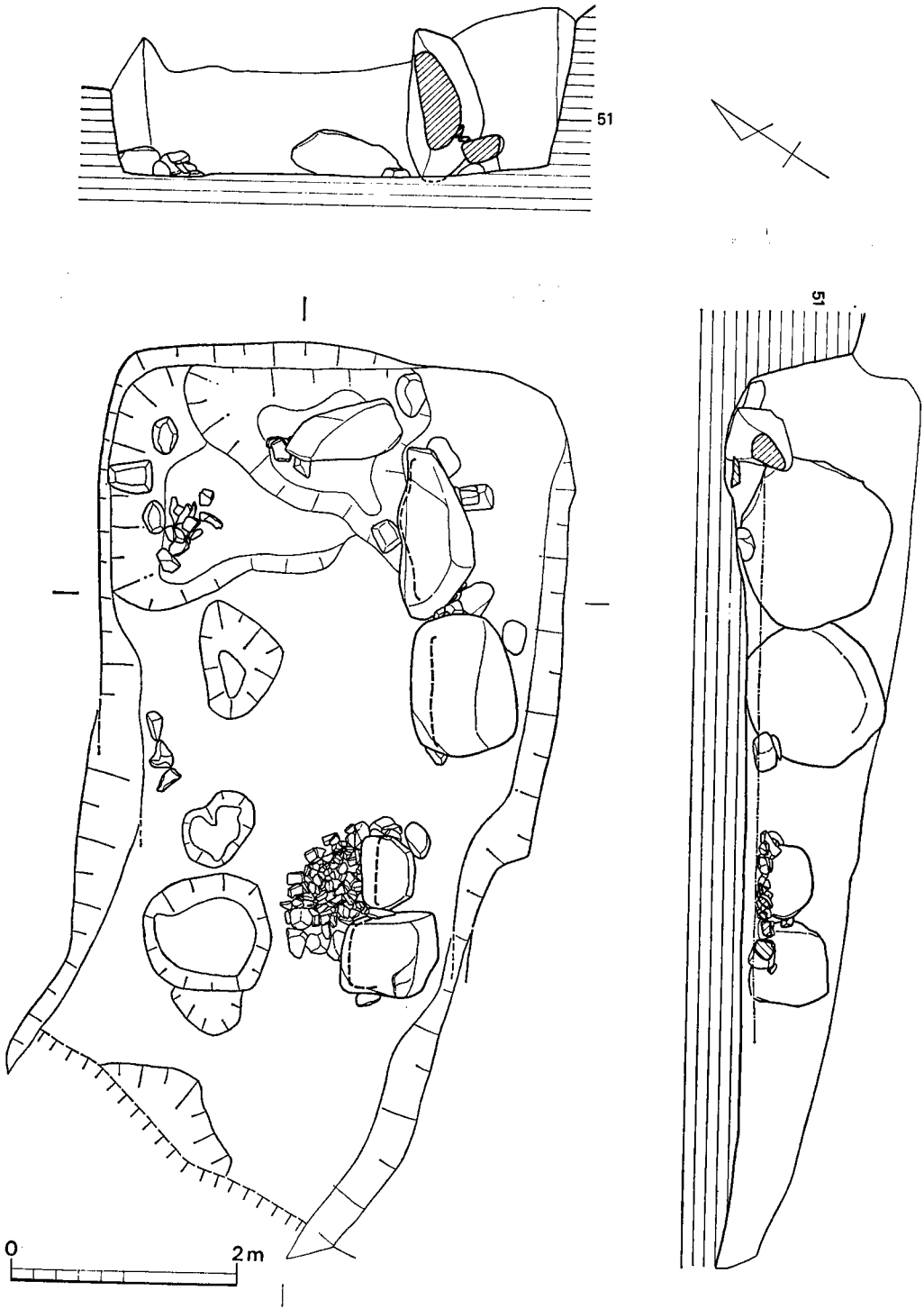


第35图 南ヶ浦A支群(1~4号墳)地形実測図(1/400)

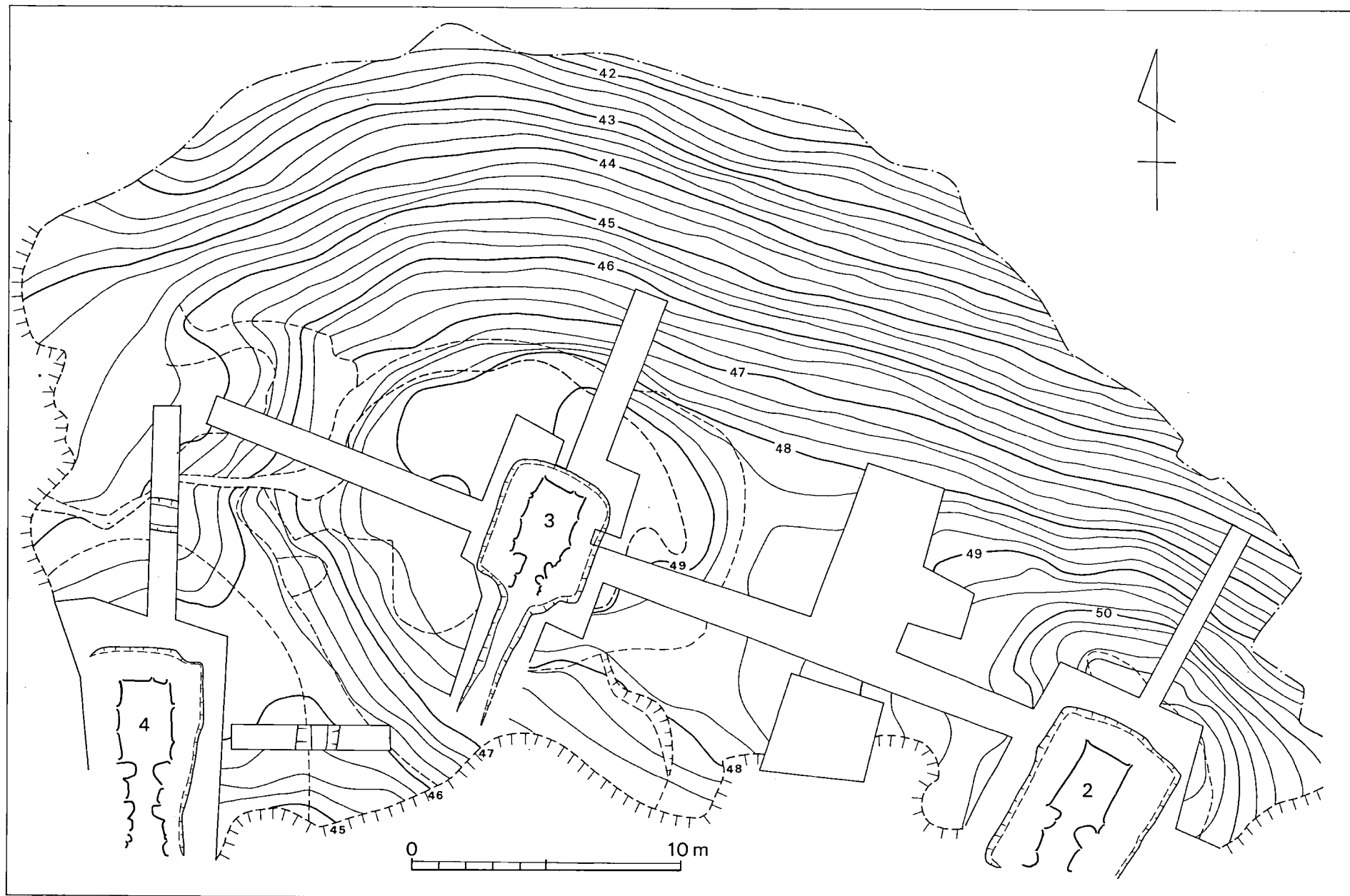


- 1 暗黒灰色褐色土(表土)
- 2 暗赤褐色粘質土
- 3 暗茶褐色粘質土
- 4 赤褐色粘質土
- 5 淡赤褐色バイラン土混入粘質土
- 6 赤褐色バイラン土混入土
- 7 赤褐色黄褐色混入粘質土
- 8 暗赤褐色粘質土
- 9 淡赤褐色バイラン土混入土
- 10 暗赤褐色バイラン土混入土
- 11 淡黒灰色赤褐色混入粘質土
- 12 淡黒灰色褐色土
- 13 暗茶褐色粘質土
- 14 赤褐色バイラン土混入土
- 15 赤褐色茶褐色混入粘質土

第36図 南ヶ浦1号墳丘断面図(1/80)



第37图 南ヶ浦1号墳石室実測图 (1/60)



第38図 南ヶ浦2～4号墳全体図 (1/200)

2 南ヶ浦 2 号 墳

1 墳 丘 (図版26, 第33・35・38・39図)

南側墳裾が削られているが、径11~13m、最も比高差のある所で高さ2.5mを測り、本古墳群中で最も墳丘の残りが良い円墳である。古墳構築に先だって石室掘方周辺では表土を除去しており、墳丘断面で旧表土層の認められるのは第Ⅱトレンチだけで、石室掘方から約2m離れた部分から墳裾に向かって厚さ15~20cmのものである。盛土は最も残りの良い所で1m弱残っている。

2 石 室 (図版27~29, 第40図)

ほぼ南に開口する複室構造の構穴式石室である。石室は、幅約5.5m、長さ7(+ α)m、深さ2.6~1.6mの大きな掘方内に前、後室とも納まっている。羨道および墓道は残っていないが、羨道部から掘方の幅は狭まるようである。

後室は幅が奥壁側でやや狭くなり、その床面プランは台形に近い形を示している。床面の敷石はその多くを失っており、右壁に沿って一部が残っている。床面は、まず20~30cm大の石を敷き、そのすき間を小円礫で目張りしたようである。壁体で使用された石材は巨大なもので、奥壁は幅2m、高さ2.4m程、厚さ0.8m程の巨大な石材を用いて鏡石とし、その上に2段程の石積が残り、この上に天井石が架構されたと考えられる。左右側壁の腰石も巨大なもので、奥壁の石材にひけをとらない。左壁腰石は一枚石だが、右側壁は寸法がやや短く、50cm程の石で補っている。壁体の石積は両壁とも残りは悪い。

前室は長方形プランを呈し、両壁の腰石は共は一石ずつである。壁体の石積の残存は良くななく天井石までの高さは推定できない。

後室入口、前室入口とも仕切石は残っていなかった。

羨道および墓道は削られて崖面になっており、その状態は不明である。 (片岡 宏二)

3 出土遺物 (図版53~55, 第41図)

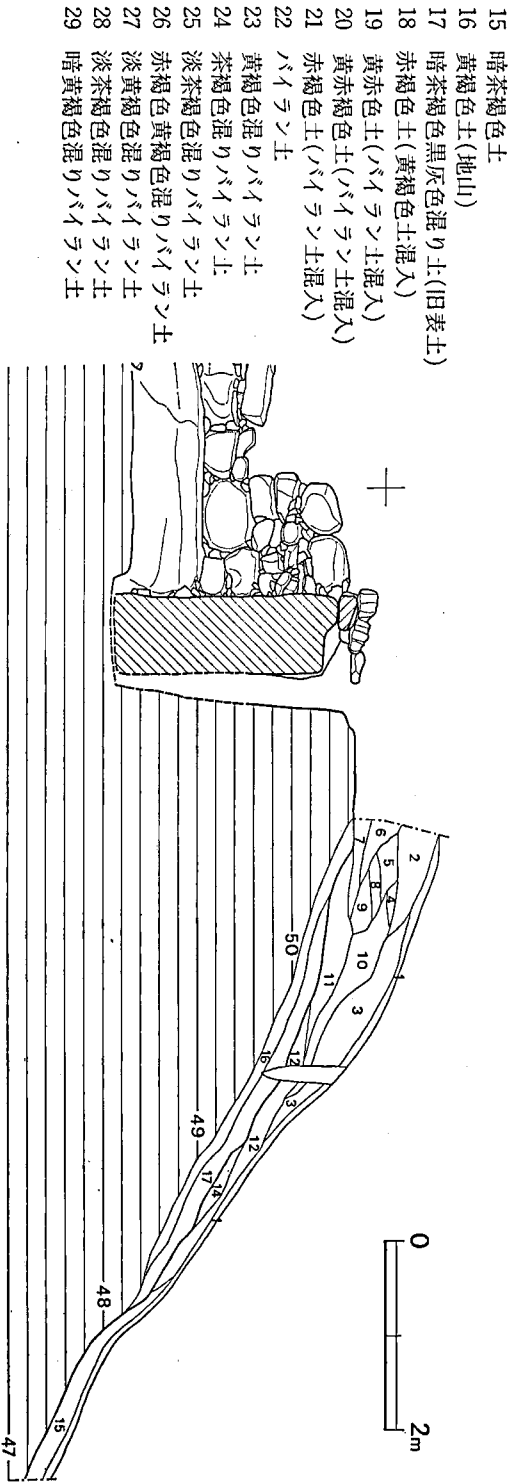
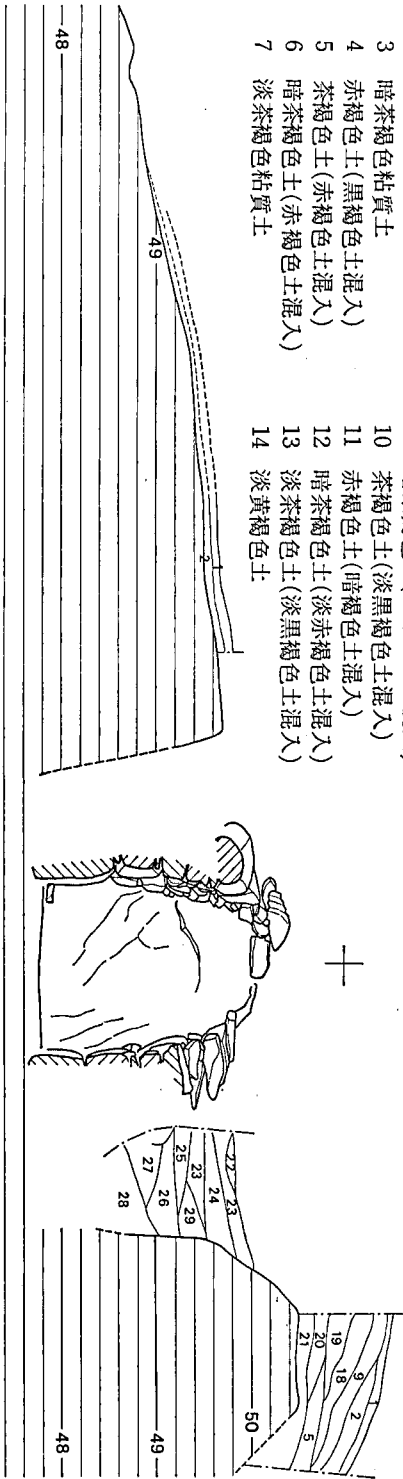
石室が荒らされていたため、副葬品はすべて原位置を移動している。出土品はその多くが鉄製品で後室入口付近を中心にその周囲で検出した。

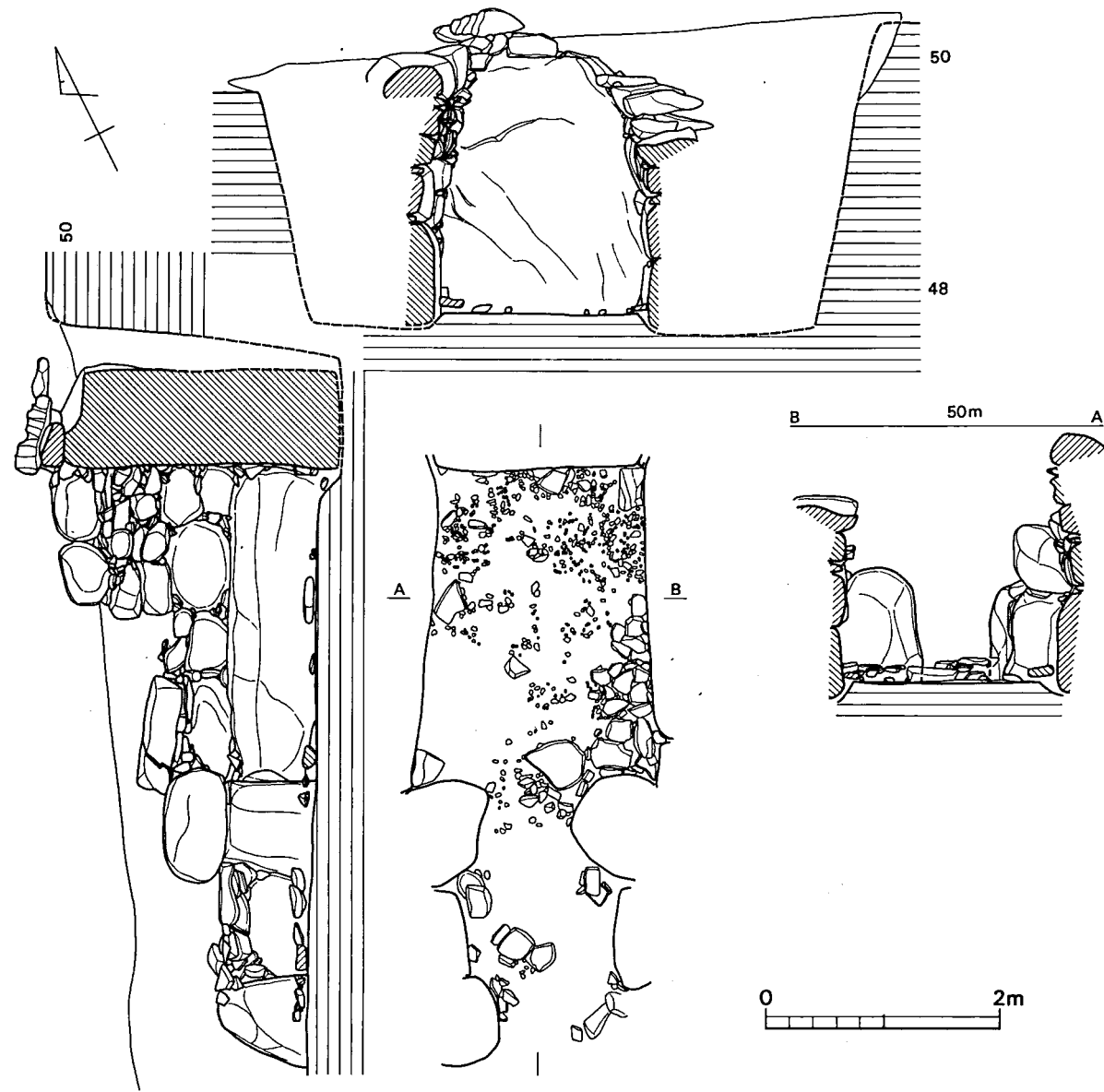
鉄 鏃 (1~40) 20・21の2点を除いてすべて細根式に属するものである。また、40のように身の表離に布片が鏝着した例がある。

刀 子 (49~51) 3点検出したが、ともに切先を欠く。49は本来は鞘に納まっていたように関部から身の部分に木質が残る。50は断面が丸味を持って厚手であり、研ぎ減りしたのかも知れない。

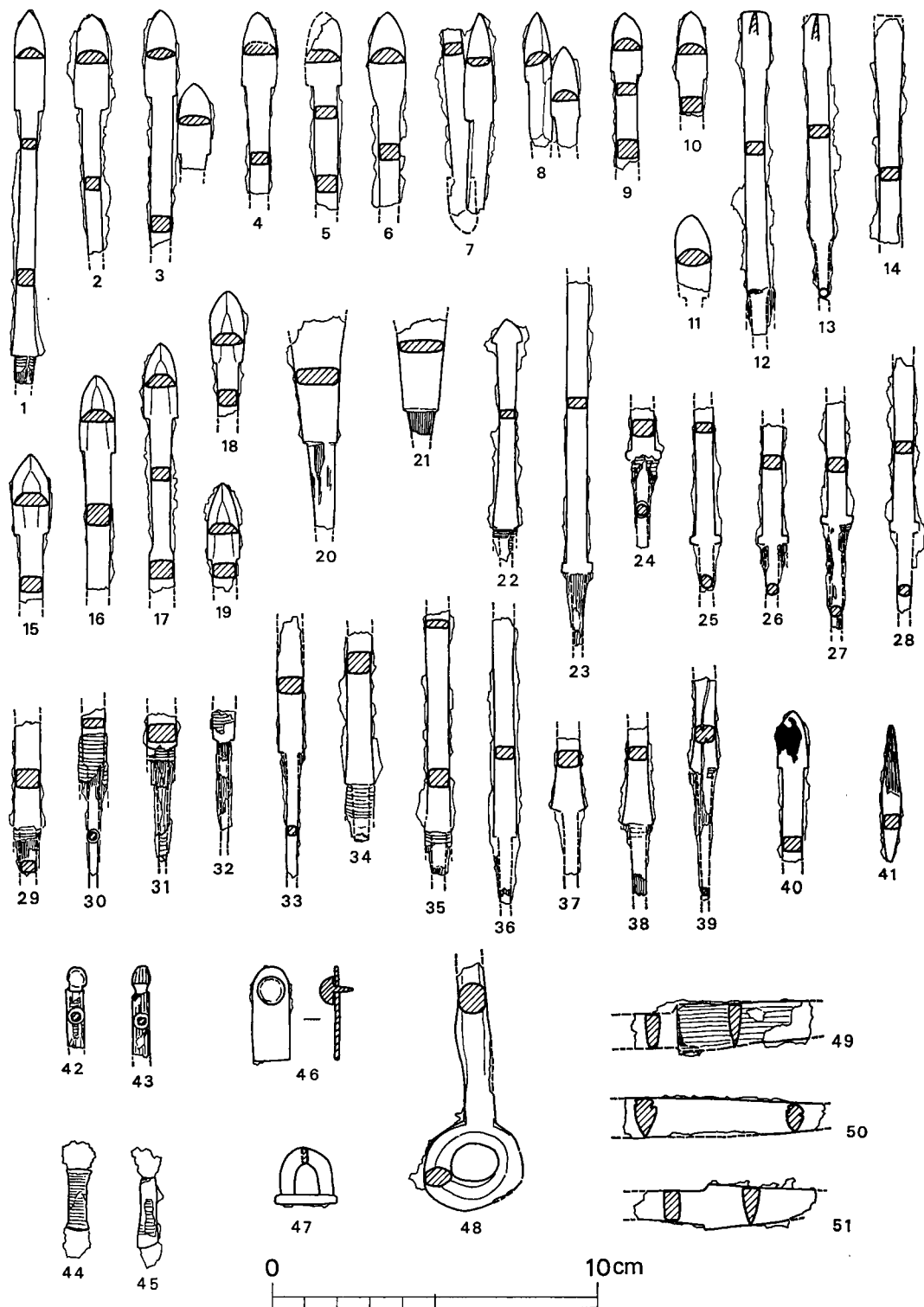
留金具 (42~45) 42・43は一端を欠くが、本来は両端に頭を有していたと思われ、中間

- 1 表土
- 2 茶褐色土
- 3 暗茶褐色粘質土
- 4 赤褐色土(黒褐色土混入)
- 5 茶褐色土(赤褐色土混入)
- 6 暗茶褐色土(赤褐色土混入)
- 7 淡茶褐色粘質土
- 8 暗茶褐色土(赤褐色土混入)
- 9 暗茶褐色土(バイラン土混入)
- 10 茶褐色土(淡黒褐色土混入)
- 11 赤褐色土(暗褐色土混入)
- 12 暗茶褐色土(淡赤褐色土混入)
- 13 淡茶褐色土(淡黒褐色土混入)
- 14 淡黄褐色土





第40图 南ヶ浦2号墳石室実測図(1/60)



第41图 南ヶ浦2号墳出土遺物实测图 (1/2)

の部分は木質が錆着している。

馬具 (48) 数点が小破片で出土したが、図示し得たのは一点のみである。引手の一部と思われる。

不明鉄製品 (41) こまの心棒のような形状をしており、断面は方形で上半部に木質が錆着している。

鉄地金銅張り製品 (46・47) 他に1点、計3点出土し、馬具の一部かと推定される。

(児玉)

3 南ヶ浦3号墳

1 墳丘 (図版26, 第35・43図)

尾根線上に立地する円墳で、南側墳丘は削られているが最も高低差のある所で高さ1mを測る。墳丘構築に先立って、西・東側は旧表土を削平して地山を出し、北側は石室掘方周辺だけ旧表土を取り除いて石室掘方を造っている。

2 石室 (図版30~32, 第42図)

内部主体は単室構造の横穴式石室で、丘陵斜面に直交して南に開口している。本石室は後に羨道部に袖石と仕切石を追加して複室化している。

床面は石室掘り方床面に厚さ10cm程度土を敷き、12cm前後の大きさの石を敷きつめている。敷石は、後世に荒らされてかなり動いている。

玄室入口寄りの主軸線上に高さ約55cm、幅約20cmの立石がある。この石は床面に土を敷き、土饅頭を作って石を立て、周囲に土を被せて倒れないようにし、その上に敷き石と同様の石を被せて化粧をし、更に奥壁側と右壁側に大きめの石をのせている。この立石は後世に古墳を祭ったものであろう。

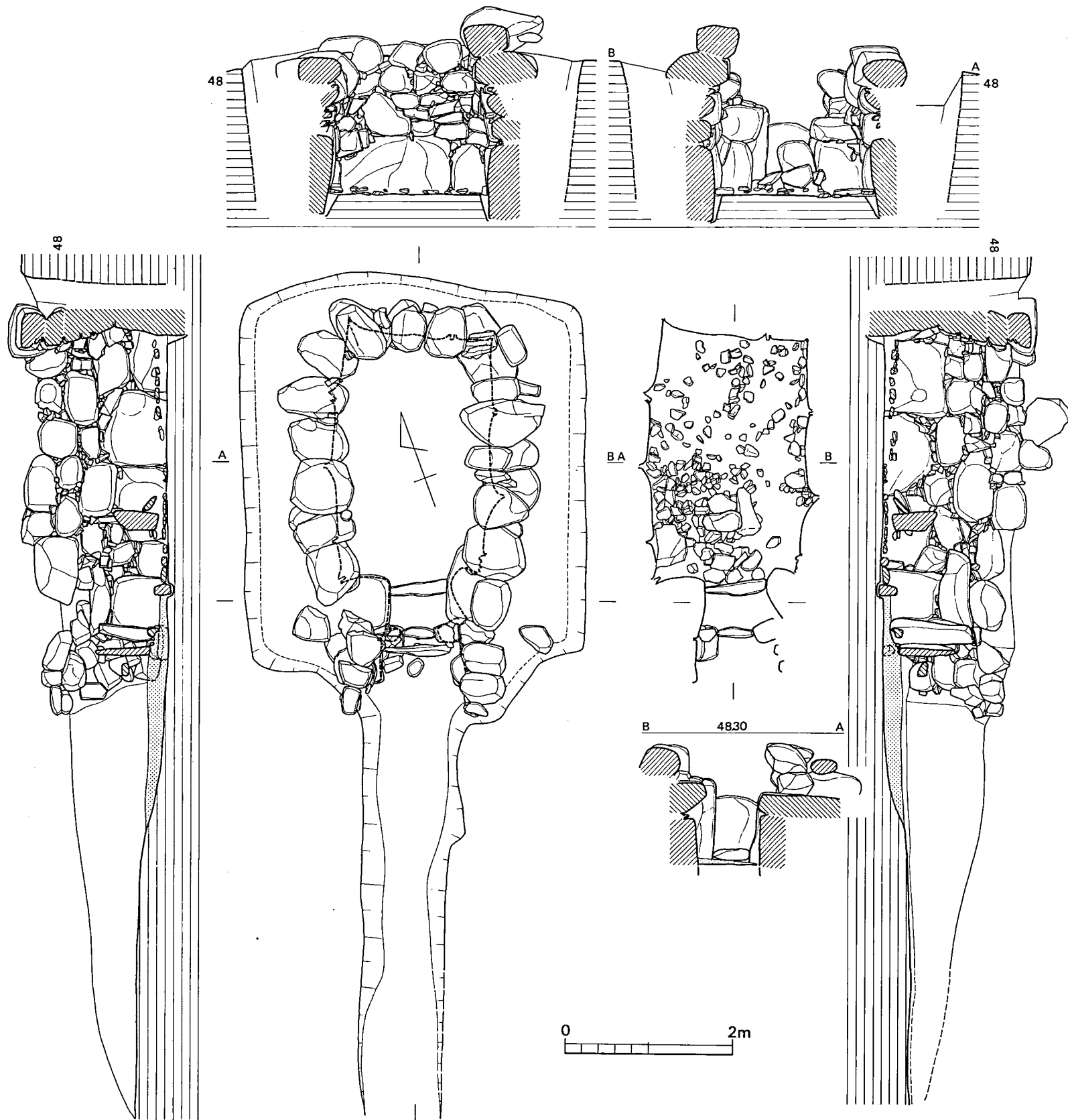
奥壁は2石の腰石で、左側が大きく右側は小さな石材を用いている。二段目より持ち送り気味に角の取れた丸味を帯びた石を小口積みし、隙間には間詰めしている。二段目左側は大きい石を用いているので右側は4段目でほぼ同レベルになっている。

左壁は4石の腰石を横長に据えてあり、袖石側と奥壁側の腰石はレベルが低く、1段積んで他の腰石と高さを合せている。二段目の石積からは奥壁よりも大きめの石材を用いて持送りに積んでいる。

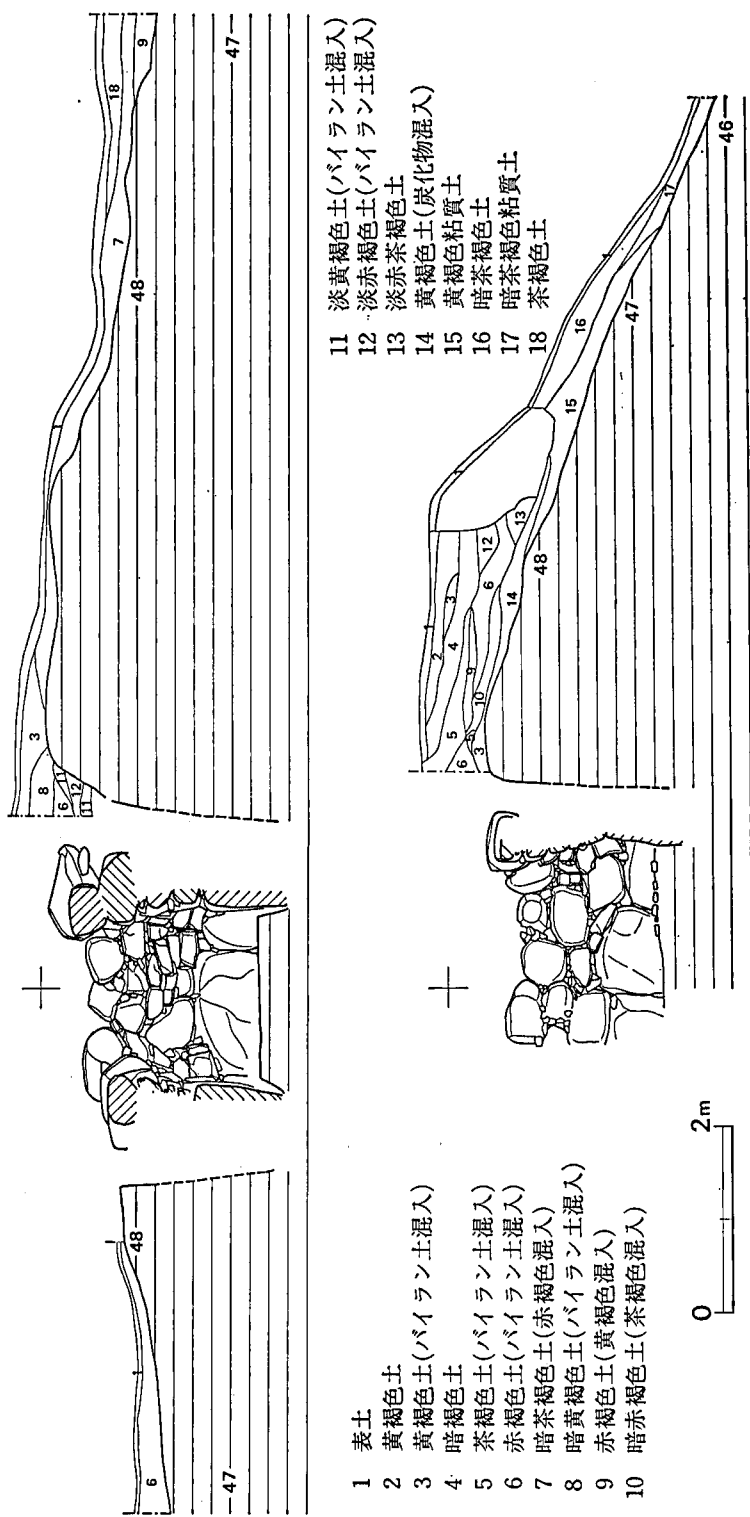
右壁は3石の腰石を据え、二段目の石積からは左壁と同様である。壁面は5段目まで残存し、床面から約2mを計る。

袖石は玄室腰石と同様な石材で間に74cmの仕切石がある。

本墳の石室掘方は羽子板に近い平面形をし、石室は幅4m、長さ4.8mの掘方内にすっぽり



第42図 南ヶ浦3号墳石室実測図 (1/60)



- 11 淡黄褐色土(バイラン土混入)
- 12 淡赤褐色土(バイラン土混入)
- 13 黄褐色土
- 14 黄褐色土(炭化物混入)
- 15 黄褐色粘質土
- 16 暗茶褐色土
- 17 暗茶褐色粘質土
- 18 茶褐色土

- 1 表土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土(バイラン土混入)
- 4 暗褐色土
- 5 茶褐色土(バイラン土混入)
- 6 赤褐色土(バイラン土混入)
- 7 暗茶褐色土(赤褐色混入)
- 8 暗黄褐色土(バイラン土混入)
- 9 赤褐色土(黄褐色混入)
- 10 暗赤褐色土(茶褐色混入)

第13図 南ヶ浦3号填丘断面図 (1/80)

と納まり、羽子板の柄にあたる部分が墓道に対応する。墓道は第42図に示す様に、当初の玄門仕切石から墓道側へ2.7mの部分と他の部分とで最高35cmの高低差を有する。この低い部分に花崗岩パイラン土を搬入して底面の高さを整えてから、玄門前面両側に細い石材を立てて袖石とし、袖石間に長さ40cmの石材を設置して仕切石として、玄門の部分の前室化している。そして、新たに設置した袖石の部分で一枚の平石により閉塞している。この前室を付加した時期は明確ではない。墓道は上端で幅1.2m程度、長さ約5mで墳裾部まで続く。(日高)

3 出土遺物 (図版55~58, 第44・45図)

玄室より原位置を移動した状態で金銅製耳輪2点、鉄鏃14点以上、刀子6点、鋸子2点、土玉3点、須恵器片が出土した。

須恵器 形状の判明したのは玄室から検出した2点(3・4)だけである。7世紀代の土器で追葬時のものである。

鉄 鏃 (1~14) 広根式は図示した五型式5点だけで、他はすべて細根式に属するものである。

刀 子 (15~20) 15・17・18は鹿角装の柄である。刀身は細身(15・17・20)と幅広のものがある。17・18の刃部には研ぎ減りした痕があり、生前、身につけていた品を副葬したものであると思われる。

鋸 子 (2・22) 21は全長11cm、幅は頭部で0.5cm、脚端に向かって広くなり0.8cmを測る。先端部は錆で明確にしがたいが片刃のようである。遊環はない。22は21と側面観が異なりやや小形品である。頭部で幅0.4cm、中程で0.8cmを測り、脚端部に向って細くなる。

耳 環 (23) 2点検出したが、調査中に不注意で一点紛失した。本品は鉄地金銅張りで、細身のものである。

土製玉 玄室から3点出土している。

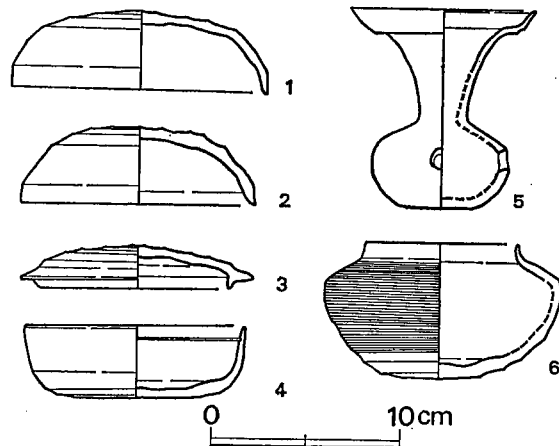
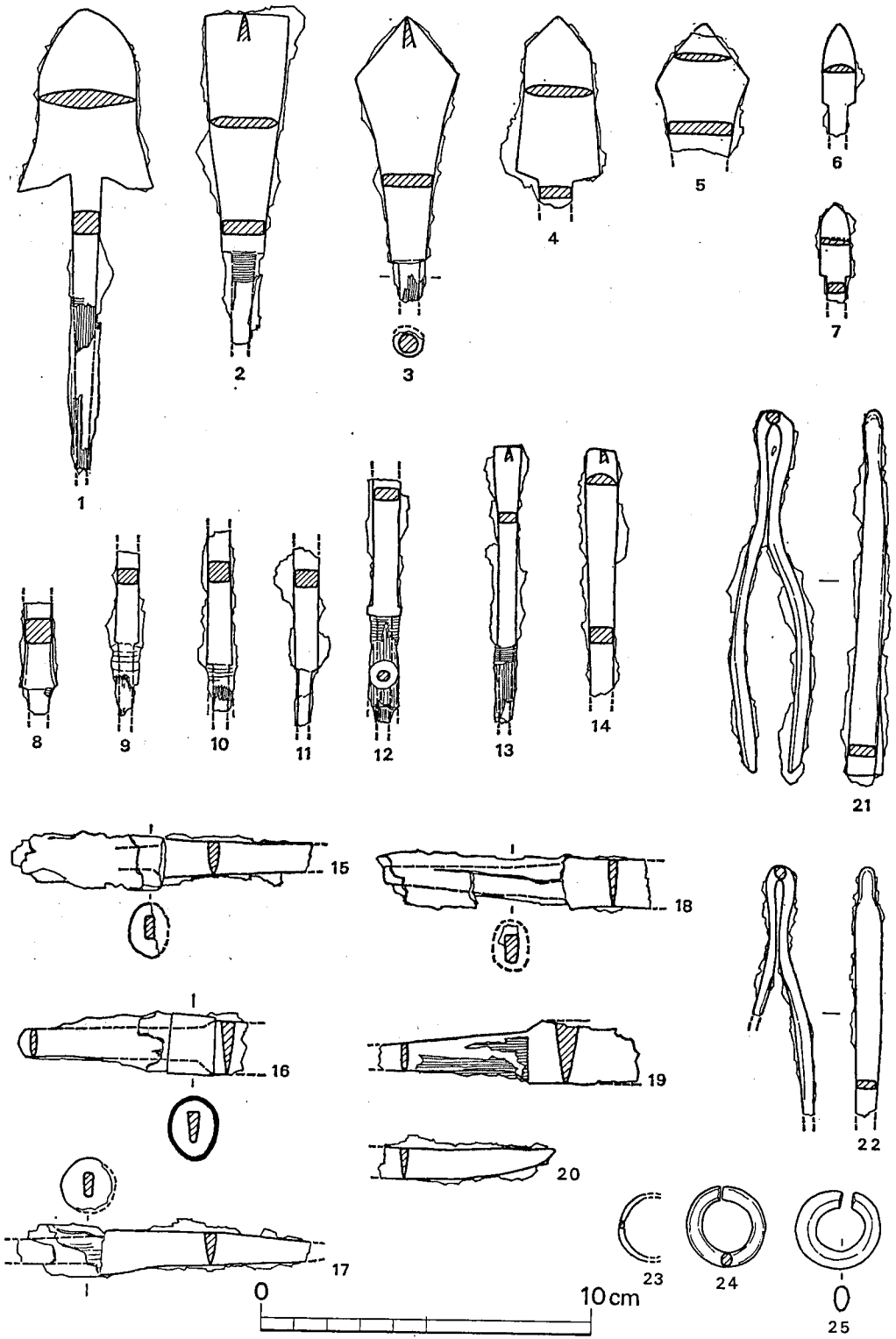


図44図 南ヶ浦3・4号墳出土土器実測図

(1/4, 3・4は3号墳出土)



第45图 南ヶ浦3号填出土遺物実測図(1/2)

4 南ヶ浦4号墳

1 墳丘（図版26，第35・47図）

調査前に墳丘の過半が破壊されていたので詳細は明らかではないが、2本の墳丘断面観察用トレンチに検出した周溝（弧状溝）より、本来は直径12～3mの円墳であったと考えられる。また、墳丘の高さは2m程度であったろう。なお、墳丘構築に先だって旧表土層を除去しており、墳丘中心部では石室掘方は地山面から切り込んでいる。

2 石室（図版33～35，第46図）

「コ」字形の掘方内に構築された複室構造の横穴式石室で、南北に主軸をおき南に開口している。石室掘方は旧表土層を除去して地山面（花崗岩パイラン土）から切り込んでおり、最深部で2mを測る。

後室は長方形プランで床石を敷いている。奥壁から60～70cmの範囲の床石は非花崗岩質の石材であるのに対して他の部分は花崗岩の割石を使っている。屍床の可能性もある。

前室は略正方形プランで床石の一部が残っている。

前室入口に1.1mの羨道が続き、以下墓道に至る。

閉塞は前室入口で行なわれている。閉塞石群のうち、羨道寄りの60cm×70cmの大きめの石は他の閉塞石との間に約20cm程の厚さの土があり、また床面から30cm程浮いた状態であることから、この石は羨道部が土砂で30cm程埋まった頃の追葬に伴うものと考えられる。

壁体は花崗岩により構築され、積石間のすき間は小石でパッキングしている。壁体の内傾度はさほど顕著ではない。

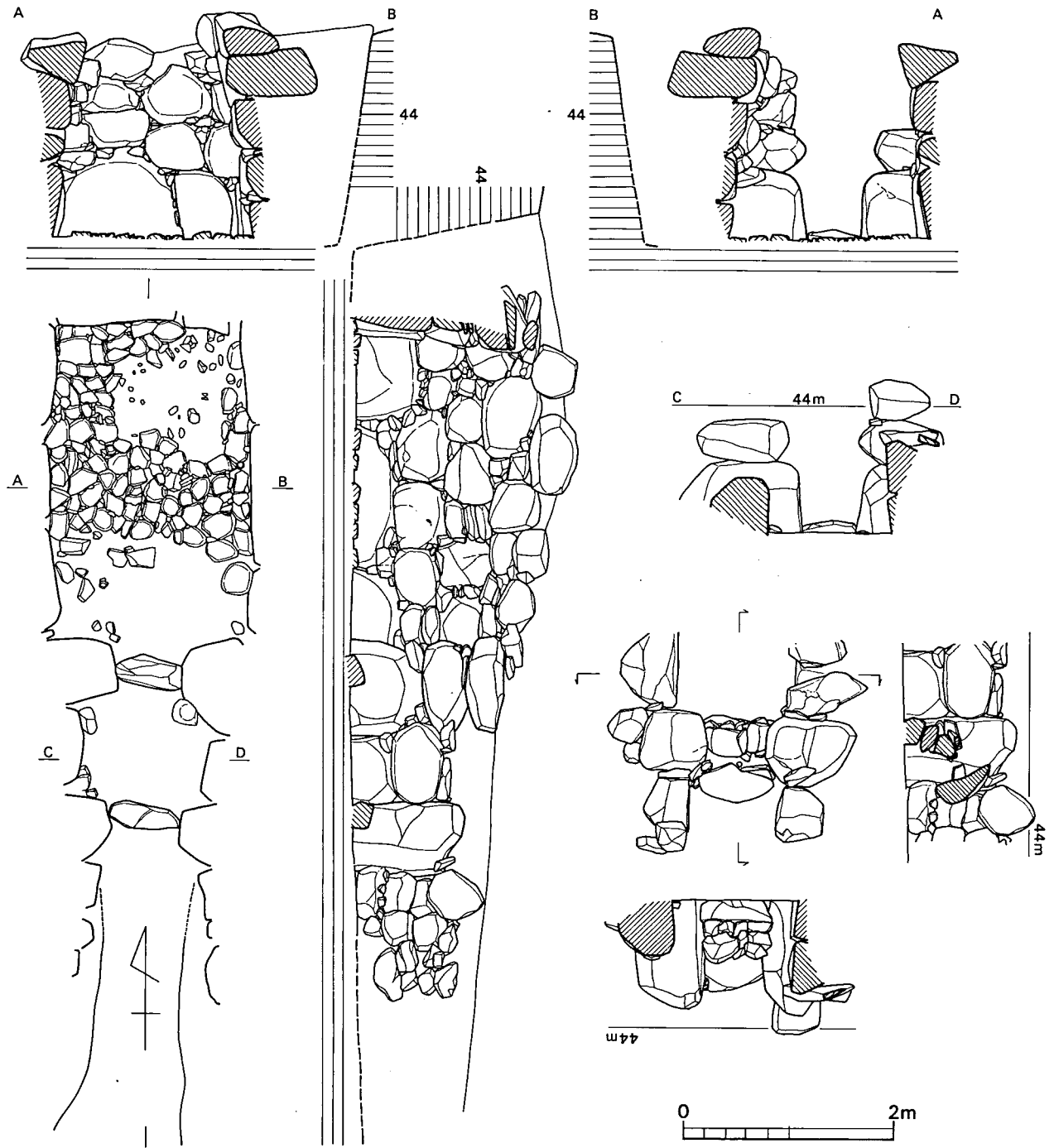
3 出土遺物（図版55，第44・45図）

後室から原位置を移動した状態で耳環・鉄製品・須恵器が、周溝から須恵器が出土した。

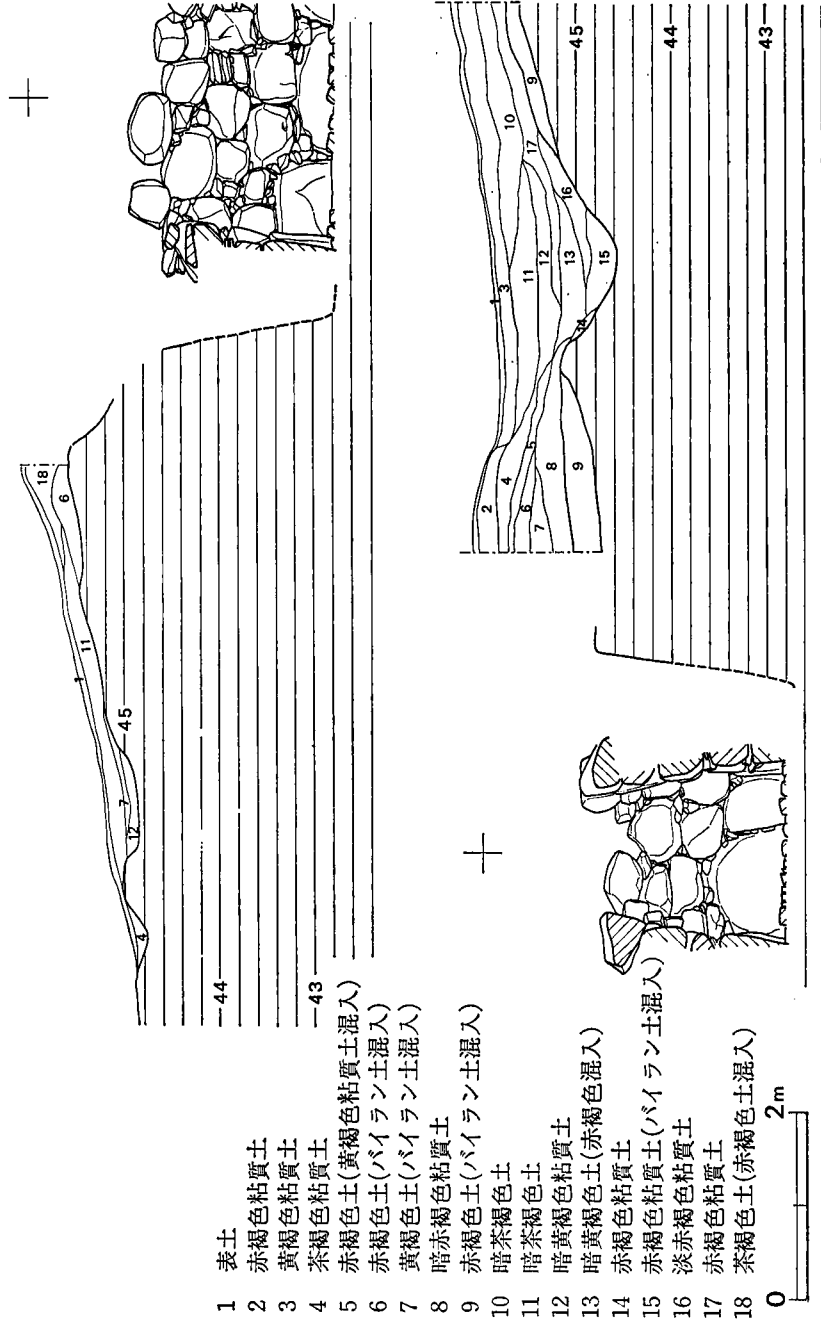
耳環（24・25） 後室床面から原位置を移動した状態で検出した。24は中実で25は中空である。前者は鉄地に金銅張り、後者は金銅製である。

須恵器（1・2・5・6） 1・2は第1トレンチ周溝埋土から、5、6は玄室で検出した。詳細は後の土器観察表を参照されたい。

なお、鉄製品についてはその形状の知れるものはなく図示し得なかった。（児玉）



第46图 南ヶ浦4号墳石室実測図 (1/60)



第47図 南ヶ浦4号墳填丘断面図(1/80)

5 南ヶ浦 5 号墳

1 墳丘 (図版26, 第48図)

調査前に墳丘の殆どが破壊を受け、その詳細は不明である。

2 石室 (図版36, 第49図)

奥壁・右壁の一部及び床石を残すこの石室は東西に主軸をおき、西に開口する横穴式石室であるが、開口部を道路によって破壊されているために、単室か複室かの判別できない。

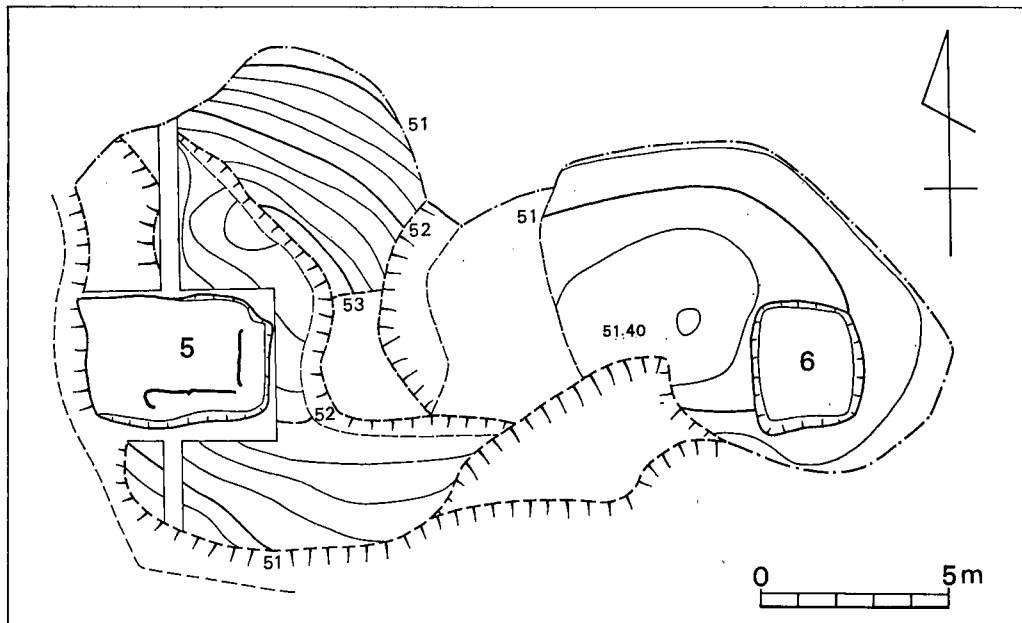
石室の形状は長方形プランを呈し、奥壁及び右側壁は、やや内傾気味に立つ。石材には巨大な花崗岩を使用している。

床石には大小二種類の石を用いており、まず20×30cm程の大きい石材を敷きつめ、その隙間を埋める様に小石を使用している。

3 出土遺物 (図版58・59, 第50図)

石室中央付近より原位置を移動した状態で鉄鏃・鉄刀・刀子等を検出している。また床石の小石に混って碧玉製管玉、ガラス玉、土玉等々を検出している。 (大石)

鉄 鏃 (1~17) 広根式と細根式が存在する。東になって錆びついたもの等、図示し得ないものがある。量的には細根式が圧倒的に多く出土している。



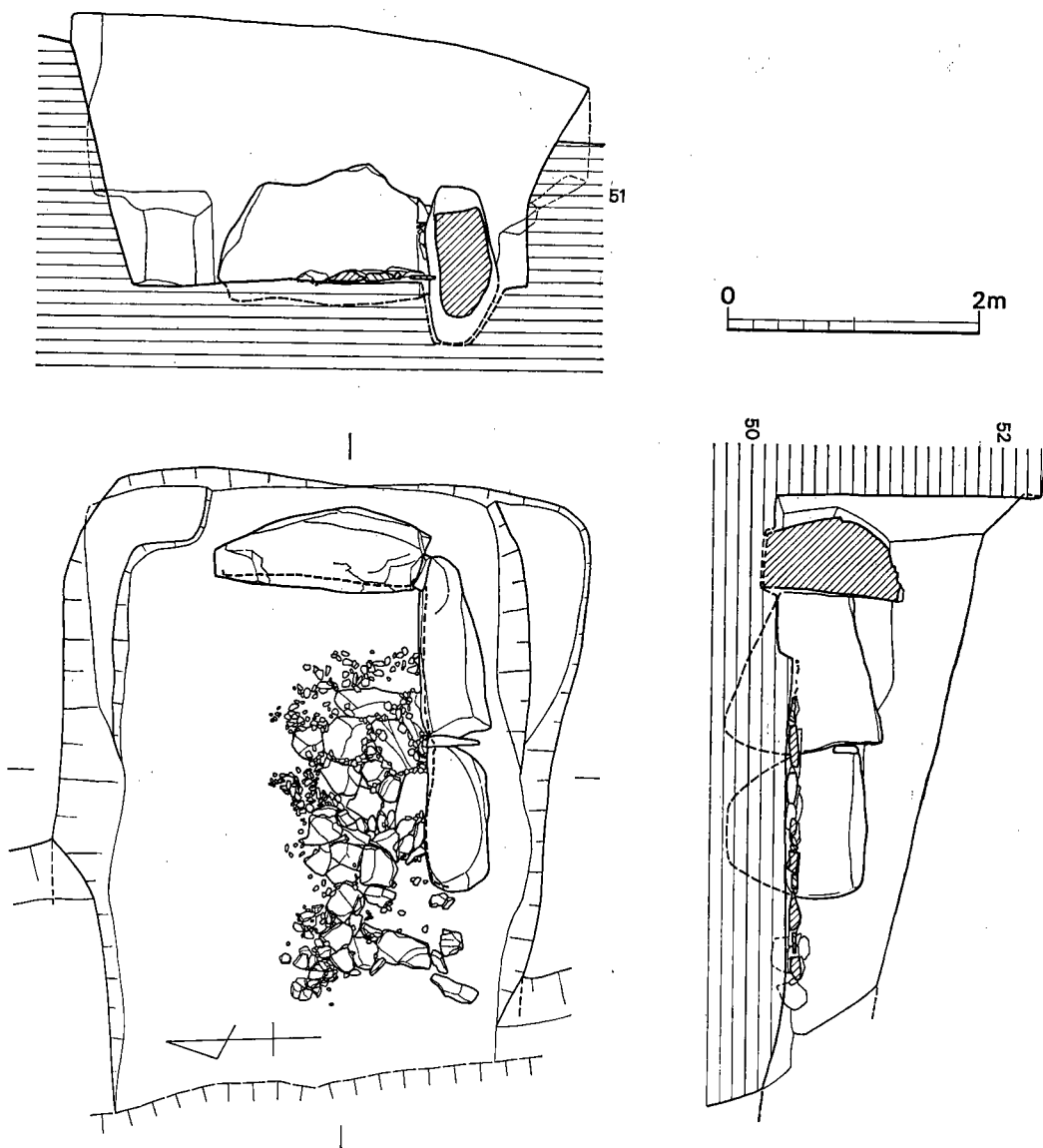
第48図 南ヶ浦5・6号墳 (B支群) 全体図 (1/200)

鉢 (18) 一応鉢としたが、鉄鉢の可能性もある。

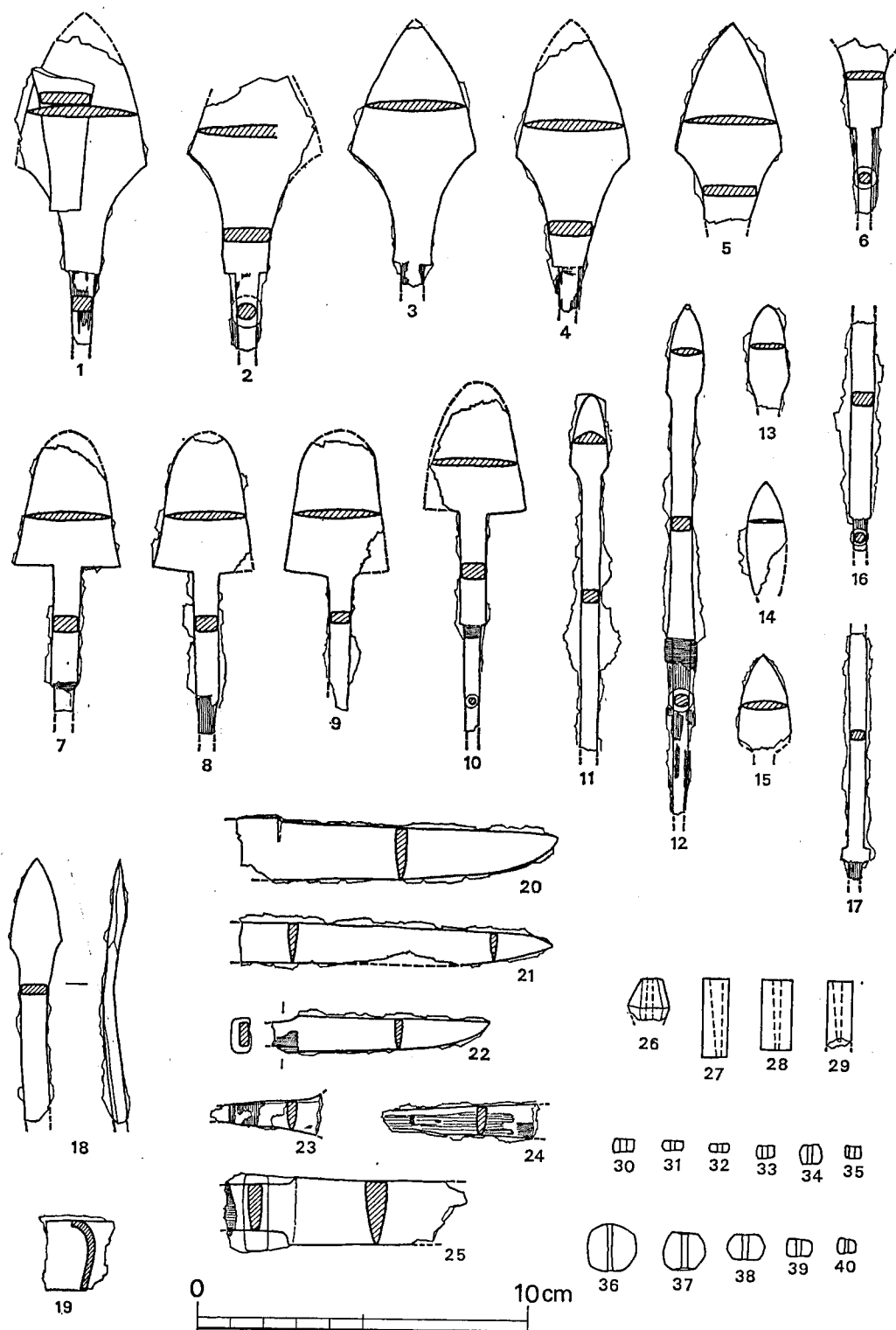
刀子 (20~25) 25は他と比べて大きく刀とした方が良くも知れない。22は研ぎ減りしている。

刀装具 (19) 鞘金具の一部であろう。

玉類 (26~40) 水晶製切小玉, 碧玉製管玉, ガラス製小玉, 土玉が出土している。ガラス製小玉 (30~35) は, 径3~7.5ミリ, 厚さ3~6ミリで色調は紺系統である。土玉は大小とりまぜて40個以上は出しているが, 欠損したものが多く正確な数は分らない。(児玉)



第49図 南ヶ浦5号墳石室実測図 (1/60)

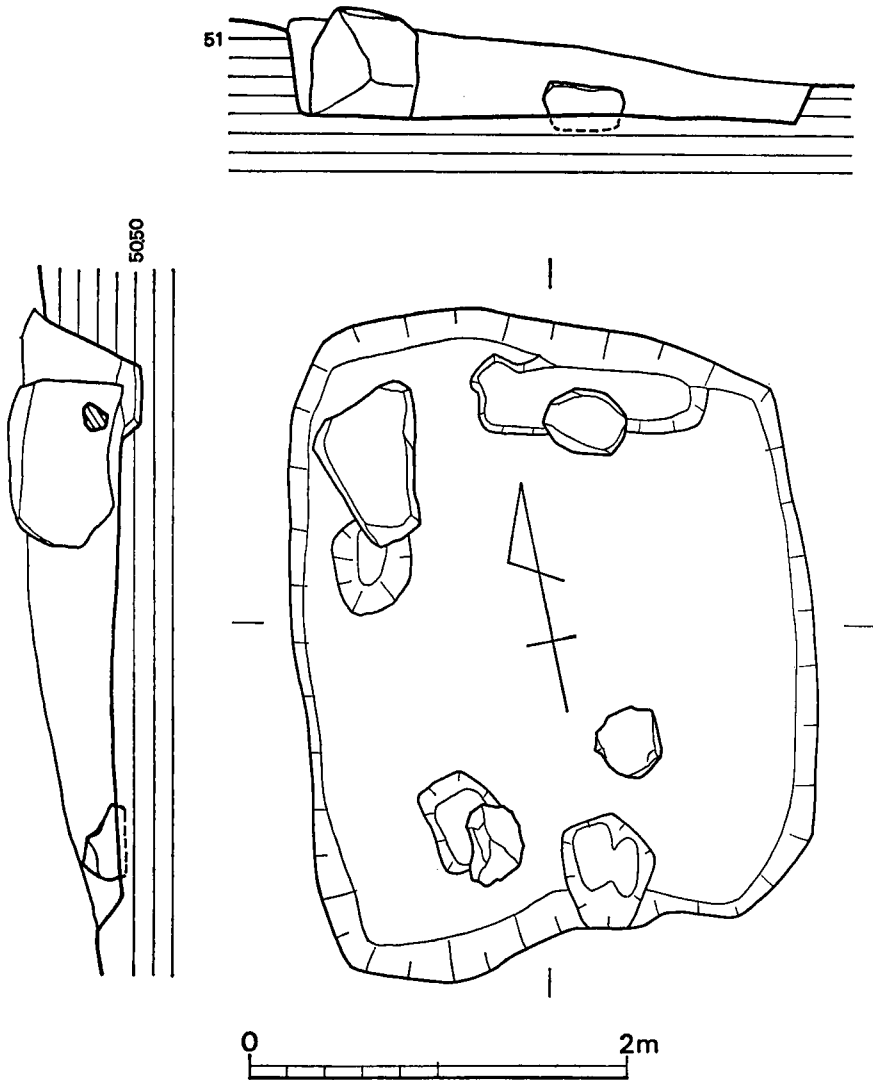


第50图 南ヶ浦5号填出土遺物実測図 (1/2)

6 第 6 号 墳

1 墳 丘 (図版26, 第48図)

尾根の頂部付近に立置し、墳丘は完全に削平されている。A支群とは谷を隔て北側約 150 m に位置し、西側に 5号墳がある。



第51図 南ヶ浦6号墳石室実測図 (1/40)

2 石室（図版36，第51図）

削平され長方形の石室掘方と若干の石材が原位置を動いた状態で残っていた。北側に約1.1m×約0.3m，深さ15cmの腰石据付痕と，南側に2ヶ所，西側に1ヶ所10～15cmの浅い腰石据付痕がみられた。石室構造は不明である。遺物は皆無であった。

7 小 結

B支群では石室構造は明確に知り得なかったが，A支群の石室は，後に複室化した3号墳を別にして他は複室構造のものであった。石室掘方は地山深く切り込まれ，石室の雄大きさに比して墳丘は余り目立たない。各古墳について，構築時期を示す資料を得ることはできなかったが，占地と石室構造の問題から，3号墳が他に先行して構築された可能性がある。

3号墳の石室は本古墳群中では特異な構造を示しており，当初は単室で短い羨道の続く石室であったが，後に玄門前面に新たに袖石と仕切り石を付加して複室化を行なっている。また，玄室には後世に作られたと考えられる立石構造がある。両遺構の付加および設置時期は土器型式の上からは明確にし難いが，玄室から出土している第V型式に降ると考えられる土器の副葬された時期には複室化は終了していたと考える。また，2号・4号墳等の複室構造の横穴式石室の構築と深い関係があると思われる。積極的な根拠を欠くが，複室化の時期は上述の時期より降ることはないと考え。立石遺構については，本石室が完存していた時期の所産であろうが，特に新しい出土品もこの付近から見つかっておらず，羨道部における閉塞構造もほぼ完存しており，設置時期や性格について不可解な点がある。

本古墳群の特質は，鉄製品が多量に副葬されていることにその一端が求められ，特に2号墳からは馬具片が出土し，石室構造の豪壮さと相俟って被葬者の性格の一端を伺わせる。

3号墳から出土した2点の鍬子は，石室内が見事に攪乱されており，当初の配置状況が不明であったのは，その用途を明確に知る上から惜しまれる。

（児玉）

第2表 墳丘および石室計測表

墳丘 (m) 径 × 高	主体部	開口方向	掘り方		玄室 (m) 左 中央長 × 中幅 × 高 右	前室 (m) 左 中央長 × 中幅 × 高 右	表道 (m) 奥幅 × 高 長 × 前	墓道 長さ	石室全長	備考	
			方向	長 × 幅 × 深							
汐井掛古墳群											
16	18×1.75~3.75	単室横穴式石室	N65° W	斜面平行	4.5×3.2×0.9	2.65 1.54 2.65 × 1.87 × 2.05 (+) 1.58	—	0.75 × 1.2 × 1.05 1.3	2.4 (+)	3.86	閉塞石に赤色顔料 がついている。
17	(10) × 1.75	壙穴系横穴式石室	N52° W	斜面平行	4.7 × 2.1 × 1.4	2.30 0.9 2.30 × 0.85 × 1.45 2.15 0.65	—	0.6~0.8 × 0.9 (+)	—	3.2	
高平古墳群											
1	18 × 1.5	複室横穴式石室	N73° E	斜面平行	—	—	1.15 0.5 1.10 × — × 1.05 (+) 1.10	0.55 × 0.8 × 1.0 0.85 × 1.0	15.5	—	断層で墓道が陥没 している。
2	—	横穴式小石室	N65° E	斜面斜交	1.9 × 1.25 × 0.4	1.23 0.42 1.15 0.46	—	—	1.47	2.46	
3	7 × 1	単室横穴式石室	N57° E	斜面斜交	(3.6) × 1.64 × 0.9	(1.85) 0.9 (1.82) × 0.79 × 0.70 (0.65)	—	1.55 × (0.65) × — 0.63	2.7	3.10	築造時期が漸層で 陥没している。
南ヶ浦古墳群											
1	—	複室横穴式石室	S57° W	斜面直交	8 (+) × 4.1 × 1.7 (+)	約2.75 × — × — 約2.7	— × — × — — × — × —	—	—	—	
2	11~13 × 2.5	複室横穴式石室	S27° W	斜面直交	6.9 (+) × 5.2 × 2.6	2.7 1.85 2.65 × 1.85 × 2.4 2.7 2.1	0.75 1.4 0.85 × 1.3 × 0.75 (+) 0.9 1.3	—	—	—	
3	13 × 1	単室横穴式石室	S20° W	斜面直交	5.2 × 4.1 × 1.65	3.05 1.75 3.0 × 1.9 × 1.75 (+) 2.75 1.68	—	1 × 0.75 × 1.25 1	4.6	4.06	後に複室化 玄室内に立石遺構
4	12~13 × 1	複室横穴式石室	SN	斜面斜行	7.6 (+) × 4.1 × 1.8	3 2 3 × 1.05 × 2.15 (+) 2.9 1.8	0.9 1.2 1.0 × 0.95 (+) 1.0 1.2	1.65 × 0.7 × 1.25 1.2	1.4 (+)	6.40	
5	—	横穴式石室	S2° W	斜面直行	4.7 (+) × 4 × 2	— × — × — — × — × —	—	—	—	—	
6	—	—	—	—	3.25 × 2.8 × 0.5 (+)	—	—	—	—	—	

※ 汐井掛17号墳・前庭部のデータは都合により表道の項に記した。

※ 数値のうち () 内のは推定復原値である。

※ 掘り方の方向の項で「斜面平行」とは等高線に平行という意味である。

第3表 土器観察表

(①口径②器高③受け部径④立上り高
⑤脚幅径⑥胴部最大径⑦つまみ径⑧つまみ高)

番号	器種	出土位置	法量 cm	ヘラ 記号	ロクロ 回転方向	調整および特徴
汐井掛16号墳						
1	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①14.1②3.7	無	×	天井部はヘラ削りを行う。 灰色～黒灰色。焼成良
2	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①15②4.2	無	×	天井部はヘラ削りを行う。 灰白色で焼成不良。モロイ
3	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①13.7②4.5	無	×	天井部はヘラ削りを行う。焼成不良。4とセット
4	杯身	第Ⅲ区墳丘内	①12②4.4③14.1④1.1	無	×	底部はヘラ削り。内面は全てヨコナデ。 3とセット
5	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①13.3②3.2	無	×	天井部は全面にヘラ削りを行う。6とセット
6	杯身	第Ⅲ区墳丘内	①12.1②4.5③14.3④1.1	無	×	底部中心は静止ヘラ削り。5とセット
7	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①13.5②3.8	無	×	天井部はヘラ削り。8とセット
8	杯身	第Ⅲ区墳丘内	①11.6②4③13.9④1.2	無	×	底部はヘラ削り。一部静止ヘラ削り。7とセット
9	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①13.5②4.2	無	×	天井部はヘラ削り。10とセット
10	杯身	第Ⅲ区墳丘内	①12.7②3.9③14.8④1.2	無	?	静止ヘラ削り。9とセット
11	杯蓋	第Ⅲ区墳丘内	①13.8②3.8	無	×	天井部ヘラ削りは中心と外周とから2度行う。 12とセット
12	杯身	第Ⅲ区墳丘内	①12.4②3.9③15.1④1.7	無	×	底部はヘラ削り。11とセット
13	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.6②5	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
14	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14②4.4	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整
15	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15.5②4.8	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
16	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.3②4.4	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
17	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.6②4.8	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整
18	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②5.1	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
19	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②5.2	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
20	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.8②4.7	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
21	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.7②4.7	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
22	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②4.6	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
23	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①4.5②4.1	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
24	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.7②4.6	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
25	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.3②4	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
26	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14②3.9	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
27	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.1②4.3	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
28	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.4②4.3	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
29	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②4.3	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
30	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②5	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
31	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.2②4.0	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
32	杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15.1②4.2	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。

(①口径②器高③受け部径④立上り高
⑤脚裾径⑥胴部最大径⑦つまみ径⑧つまみ高)

番号	器種	出土位置	法 量 cm	ヘラ 記号	ロクロ 回転方向	調 整 お よ び 特 徴
33	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②4.7	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
34	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②4.7	有	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 天井内面に同心円のタタキ痕がある。
35	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②5.0	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
36	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②4.1	無	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
37	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①13.3②4.9	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
38	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①14.4②4.0	無	?	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
39	杯 蓋	第Ⅳ区墳裾	①15.3②4.0	有	○	天井部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
40	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.6②5.0③15.1④1.5	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
41	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13②5.0③14.9④1.4	有	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
42	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.1②4.7③15.6④1.0	無	?	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
43	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.9②4.9③15.5④1.0	有	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
44	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.9②4.9(+)③15.4④1.3	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
45	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.8②4.8③16.2④1.2	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
46	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13②4.8③15.5④1.1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
47	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.5②5.0③15.7④1.2	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
48	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.2②4.9③15.1④1.2	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
49	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.5②4.7③15.5④1.1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
50	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.2②4.8③15.3④1.2	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
51	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.4②4.7③15④1.2	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
52	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.2②4.7③15.7④1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
53	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.1②4.5③15.7④1.1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
54	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.6②4.6③15.8④1	無	?	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
55	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13②3.8③15④1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
56	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①14.2②4.2③14.7④1.1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
57	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.6②4③15.1④1.2	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
58	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.8②4.8③14.9④1.0	有	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
59	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.7②4.1③15.1④1.1	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
60	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.9②4.4③15.3④1.0	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
61	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.3②3.9③14.7④0.8	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
62	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13.2②4.3③15.3④0.9	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
63	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.7②3.8(+)③15④0.8	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。
64	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.3②4.4③14.8④0.9	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。 底部内面に同心円のタタキ痕がある。
65	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①13②3.9(+)③15.3④0.8	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ, ナデ調整。

(①口径②器高③受け部径④立上り高
⑤脚径⑥胴部最大径⑦つまみ径⑧つまみ高)

番号	器種	出土位置	法 量 cm	ヘラ 記号	ロク 回転方向	調 整 お よ び 特 徴
66	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.7②4.1③15④0.9	無	×	底部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。 内底面に同心円のタタキ痕がある。
67	杯 身	第Ⅳ区墳裾	①12.2②3.5+2③14.7④0.9	無	○	底部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
68	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①12.4②18⑤10.2	無	—	杯部外面に波状紋。3ヶ所に2段透しがいり、 透し孔は面取りされている。
69	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①9.7②12.6⑤8.8	無	—	杯部外面は櫛歯で施文。 3ヶ所に2段透しがいり。
70	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①10.2②13.6⑤8.9	無	—	杯部外面にカキ目。 脚部には3ヶ所に2段透しがいり。
71	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①13.9②15.2③16.4④1.2⑤13.4	無	—	脚部に3本の凹線がめぐり。カキ目調整を施す。
72	高 杯	第Ⅳ区墳裾	②13(+)⑤15.1	無	—	脚部に4本の凹線がめぐり。カキ目調整を施す。
73	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①14.7②17.8③17④1 ⑤14	無	—	杯部内底面にタタキ痕。長方形直角三角形の透し が、3ヶ所にはいる。カキ目調整。
74	高 杯	第Ⅳ区墳裾	②15(+)⑤14.5	無	—	杯部内底面にタタキ痕。長方形、二等辺三角形の 二段透しが3ヶ所にはいる。カキ目調整。
75	高 杯	第Ⅳ区墳裾	②14(+)⑤13.5	無	—	長方形、二等辺三角形透し3ヶ所にはいる。 カキ目調整。
76	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①12.8②5(+)③1.3	無	—	内底面にタタキ。
77	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①12.9②17③15.7④1.2⑤12.6	無	—	2段透しが3ヶ所にはいるが、上段は長方形、下 段は2個が長方形、1個は台形である。
78	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①12.6②18.2③16.3④1 ⑤13.3	無	—	上、下段とも長方形の透しが、3ヶ所にはいる。
79	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①14.5②17.7③15.5④1.0⑤13.3	無	—	上、下段とも長方形の透しが、3ヶ所にはいる。
80	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①14.1②17.5③16.7④1.3⑤12.5	無	—	上段に長方形透し4、下段に長三角形透し5個が めぐり。
81	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①12.7②16.1③15.5④1.1⑤12.1	無	—	内底面タタキ 長方形、三角形の透しが3ヶ所には いる。
82	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15②6.7⑦4 ⑧0.7	無	×	肩に一条の沈線。71、72に胎土、色調、焼成が似 る。
83	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15.1②5.7⑦5 ⑧1.4	無	×	肩に一条の沈線。71、72に胎土、色調、焼成が似 る。
84	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①17②6.3⑦3 ⑧0.9	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
85	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①16.5②5.8⑦3 ⑧1	無	×	内天井にタタキ。天井部はヘラ削り。ヨコナデ、 ナデ調整。
86	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①16.5②6.5⑦3.5⑧1	無	×	内天井にタタキ。天井部はヘラ削り。ヨコナデ、 ナデ調整。
87	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①15.7②5.9⑦3 ⑧0.9	無	×	内天井にタタキ。天井部はヘラ削り。ヨコナデ、 ナデ調整。
88	高杯蓋	第Ⅳ区墳裾	①17②5.6⑦3.5⑧1	無	×	内天井にタタキ。天井部はヘラ削り。ヨコナデ、 ナデ調整。
89	蓋	第Ⅳ区墳裾	①13.3②6.7⑦3.6⑧2.2	無	×	天井部はヘラ削り。ヨコナデ、ナデ調整。
90	蓋	第Ⅳ区墳裾	①7.4②4.4③10.7⑦2.6⑧0.8	無	○	天井外面は全面にヘラケズリを行う。
91	埴	第Ⅳ区墳裾	①6.8②6.9⑥13	無	×	体部上半部はカキ目調整。
92	埴	第Ⅳ区墳裾	①6.6②5.7⑥11.3	無	×	体部上半部はカキ目調整。
93	埴	第Ⅳ区墳裾	①7.5②6.9⑥12.1	無	—	静止ヘラケズリ。 体部上半部はカキ目調整。重ね焼き痕あり。
94	甗	第Ⅳ区墳裾	①11②13⑥7.1	無	—	櫛歯状器具による施文がみられる。
95	台付 長頸壺	第Ⅱ区周溝内 第Ⅳ区墳裾	①6.5②31⑤13.3⑥18	無	—	長方形2段透しが3ヶ所にはいる。
96	壺	墓 道	①8.6②21.5⑥23.6	無	—	胴部中位以下内外面ともタタキ。 中位以上はカキ目、ヨコナデ調整。
97	器 台	第Ⅳ区墳裾	①31②48⑤31	無	—	波状紋による装飾。鉢部内面は同心円タタキ、外面は格子目 タタキ、長方形、三角形の五段透しが3ヶ所にはいる。
98	高 杯	第Ⅳ区墳裾	①22②21⑤15	無	—	杯部内面反転部に櫛目調整痕がのこる。

(①口径②器高③受け部径④立上り高
⑤脚径⑥胴部最大径⑦つまみ径⑧つまみ高)

番号	器種	出土位置	法量 cm	へら記号	ロク回転方向	調整および特
99	高杯	第Ⅲ区周溝	①22.0②7.8(+)	無	—	全体に器形が歪み、器面が荒れている。
100	高杯	第Ⅳ区墳裾	①19.7②10.1(+)	無	—	器面が荒れ調整不明。
101	高杯	第Ⅳ区墳裾	②13(+)	無	—	杯部外面はへらナデ、あるいはミガキ調整。
102	高杯	第Ⅳ区墳裾	①20.3②4.8(+)	無	—	内外面ともへらミガキ調整。
103	高杯	第Ⅳ区墳裾	①18.1②10.6(+)	無	—	杯部は内外面ともへらミガキ。脚部はへらケズリ。
104	高杯	16号南側斜面	②15.5(+) ⑤17.2	無	—	透しが4ヶ所、土拵墓等に伴う可能性強い。
105	高杯	第Ⅲ区周溝	②16(+) ⑤14.7	無	—	器表が荒れており脚部がへらケズリされている以外の調整は不明。
106	高杯	第Ⅳ区墳裾	⑤15.2	無	—	ナデ、ミガキ調整が行われているようだが、器面の荒れではっきりしない。
107	摺鉢	表探	①26.5②12.5	無	—	口縁部下5cm内のみ櫛目、外底面に板目状圧痕。
汐井掛17号墳						
108	杯蓋	第Ⅲ区墳裾	①14.3②4.5	無	○	肩部上ににぶい沈線がめぐり、天井部は全面へらケズリ。焼成良。
109	深鉢	石室内	①12②9	無	—	底部は静止へらケズリ。口縁部下は荒らい櫛目あり、手づくねの土器である。
110	甕	第Ⅲ区墳裾	①22.9②43.5③44.4	無	—	内面に同心円タタキ、外面は格子目タタキ。
高平1号墳						
1	杯蓋	第Ⅳ区墳裾表土	①12②3.9	無	○	焼成良好、不硬質。外面に灰をかぶる。天井部はへら削り。
2	杯蓋	第Ⅳ区表土下	①12.2②4.2	無	○	ネゾミ〜アヅキ色 焼成良 天井部はへら削り。
3	杯蓋	第Ⅳ区墳裾表土下	①11②4.1	無	○	暗灰色〜黒灰色 焼成良。天井部はへら削り。
4	杯蓋	墓道埋土	①11.3②3.7	有	?	天井内面にへら記号。静止へらケズリ。天井部はへら削り。
5	杯蓋	墓道埋土	①10.7②3.8	無	○	灰白色、焼成良好で硬質。天井部はへら削り。
6	杯蓋	墓道埋土	①10.2②3.5	無	?	淡原色、焼成不良で軟質。天井部はへら削り。
7	杯蓋	前室床面	①10②3	有	○	器形のゆがみがひどい、暗灰色で硬質。天井部はへら削り。
8	杯身	第Ⅳ区墳裾表土	①12②4③14④1	無	○	底部はへら削り。
9	杯身	墓土埋土下墳丘表土	①11.2②3.9③13.7④1.2	無	○	内底面にへら記号。底部はへら削り。
10	杯身	墳裾	①10②3.5③12.4④1	無	○	底部はへら削り。
11	杯身	第Ⅳ区墳裾表土	①10.2②4.3③12.4④1	無	○	底部はへら削り。
12	杯身	第Ⅳ区墳裾表土	①11.1②3.8③11.9④1	無	○	底部はへら削り。
13	杯身	第Ⅳ区墳裾表土	①10②3.7③12④0.9	有	○	内底面にへら記号。底部はへら削り。
14	杯身	第Ⅳ区墳裾表土	①10②3.3③12.2④1	有	○	内底面にへら記号。底部はへら削り。
15	杯身	墓道埋土	①11②2.4③12.5④0.8	無	○	底部はへら削り。
16	皿	第Ⅳ区墳裾表土	①11.4②2.2	無	—	淡茶灰色で硬質。ナデ、ヨコナデによる調整。
17	高杯	墓道埋土	①8.3②9.7⑤8.2	有	—	杯部内底面、脚部内側にへら記号がある。
18	高杯	墓道埋土	①11.3②12.5⑤9.3	無	—	小さな方形の2段透しが5ヶ所にはいる。
19	高杯	墓道埋土	①11.5②16.6⑤12	無	—	杯部底面の一部にカキ目のはいる。

(①口径②器高③受け部径④立上り高
⑤脚裾径⑥胴部最大径⑦つまみ径⑧つまみ高)

番号	器種	出土位置	法 量 cm	へら 記号	ロクロ 回転方向	調整 および 特徴
20	蓋	墓道埋土	①7.4②4.8③10.8④2.5⑤1.2	無	—	器面の損傷がひどい。黒灰色、焼成良。
21	埴蓋	墓道埋土	①8②3.7	有	—	内天井にへら記号有り。22とセット
22	埴	墓道埋土	①6.2②7.7③11.2	有	—	肩部外面にへら記号有り。灰色～暗灰色、焼成良 21とセット
23	埴	第Ⅳ区墳 表土下	①8②6.5③12.3	無	—	カキ目による調整。よごれた灰色、焼成良く硬質。
24	甕	墓道埋土	①12.5②12.2③9	無	×	焼成良く硬質。黒灰色で部分的に灰をかぶる。
25	甕	崖面	①12.9②14.6③8.9	無	○	部分的に灰をかぶる。焼成良く硬質。
26	高杯	墓道埋土	①14.3②10.3③12.2	無	—	杯部内外面はへら磨き。 脚部はへら削り、およびヨコナデ調整。
27	高杯	墓道埋土	①13.7②10.1③11.5	無	—	杯部内面はへら磨き、 脚部はへら削り、およびヨコナデ調整。
28	高杯	第Ⅳ区1群	②7(+)⑤11.2	無	—	脚部はへら削り、およびヨコナデ調整。
29	高杯	第Ⅳ区1群	②6.7(+)⑤11.2	無	—	脚部はへら削り、およびヨコナデ調整。
30	提瓶	墓道	①8②18.4③15	有	—	体部にへら記号がある。 全体にカキ目を施す。焼成良。
31	提瓶	前室床面	①10.6②22.4③17.6	無	—	カキ目を施す。焼成良。
32	平瓶	第Ⅳ区墳 表土	①8②6.5③12.3	無	—	体部上半にカキ目施す。砂粒を多く含む。
33	平瓶	前室床面	①6.6②15.7③17.5	有	—	底部、体部側面、同上面、頸部に同形のへら記号 がある。
34	台付壺	前室床面	①8.2②24③15.6④18.6	無	—	口縁部をのぞいて全体にカキ目を施す。 壺の肩に2条の沈線とへらによる施文がある。
35	甕	第Ⅳ区墳丘内	①48.5②94.4	無	—	2群土器。 頸部に4条の沈線と波状文、内面は同心円タタキ
36	甕	第Ⅳ区墳丘内	①22.6②49.7	無	—	3群土器。 外面は平行タタキ目、内面は同心円タタキ
37	甕	第Ⅳ区墳丘内	①27.5②47.7③46.3	無	—	1群土器。頸部に2段に波状文。胴外面と内外面 下半は平行タタキ目、内面上半は同心円タタキ。
高平3号墳						
38	杯蓋	墳裾	①11.8②3.8	無	×	天井部へら削りを施す。焼成不良。
39	提瓶	羨道	①9②19.4③15	無	—	全体にカキ目を施す。焼成良。
40	甕	Ⅲ区墳裾外	①25.0②51.2③47.2	無	—	胴部内面は同心円タタキを施した後ナデ 外面は平行タタキ目。
南ヶ浦3・4号墳						
1	杯蓋	4号周溝	①13.5②4.2	無	○	天井はへら削りを行う。
2	杯蓋	4号周溝	①12.5②4.2	有	○	天井外面にへら記号がある。
3	杯蓋	3号玄室	①10②2.3③12.6	無	○	天井部はへら削りを行う。
4	杯身	3号玄室	①11.8②3.9	無	—	内面の口辺部下に一条の沈線がめぐる。
5	甕	4号玄室	①11.7②4③7.2	無	—	全体に灰をかぶり、調整等はよく分らない。
6	埴	4号玄室	①8②7③12.8	無	—	内底面にへら記号がある。 底部はへら削りをし、体部はカキ目を施す。
※ ロクロの回転は、時計方向の回転を○、逆時計方向を×で示した。						

圖 版



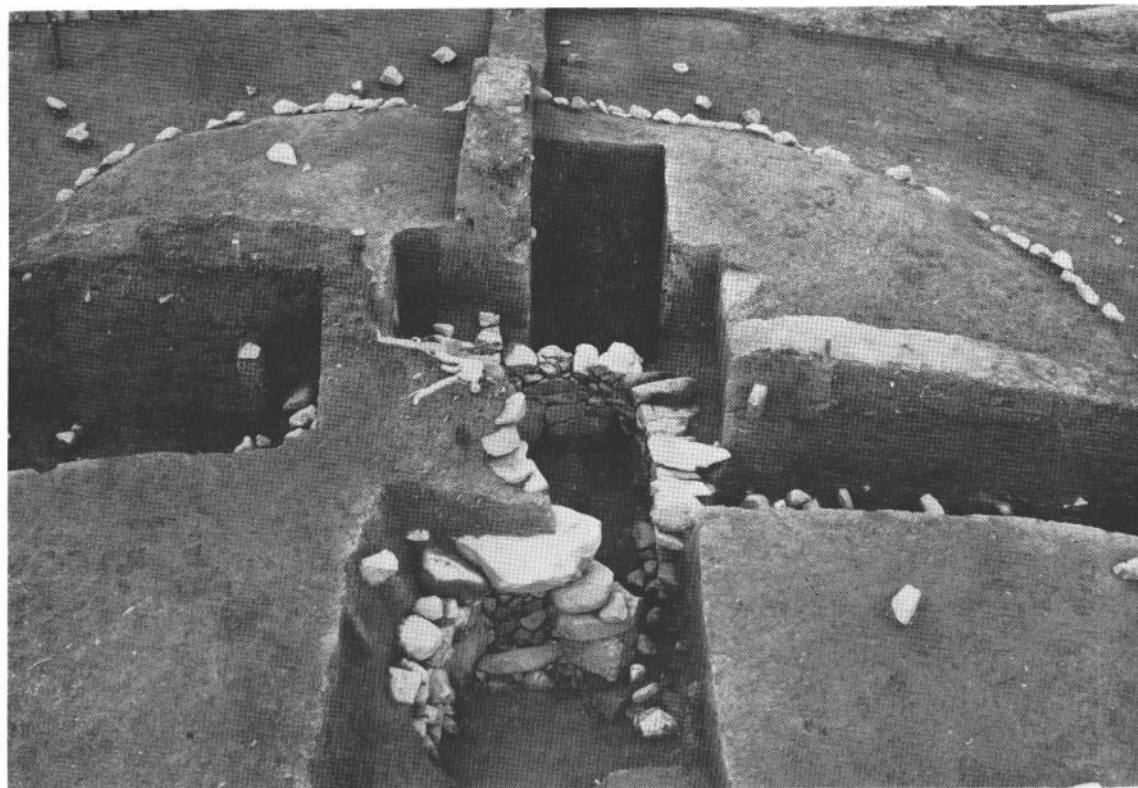
汐井掛古墳群（右）高平古墳群遠景（北から）



汐井掛古墳群B支群（東から 数字は古墳番号を示す）



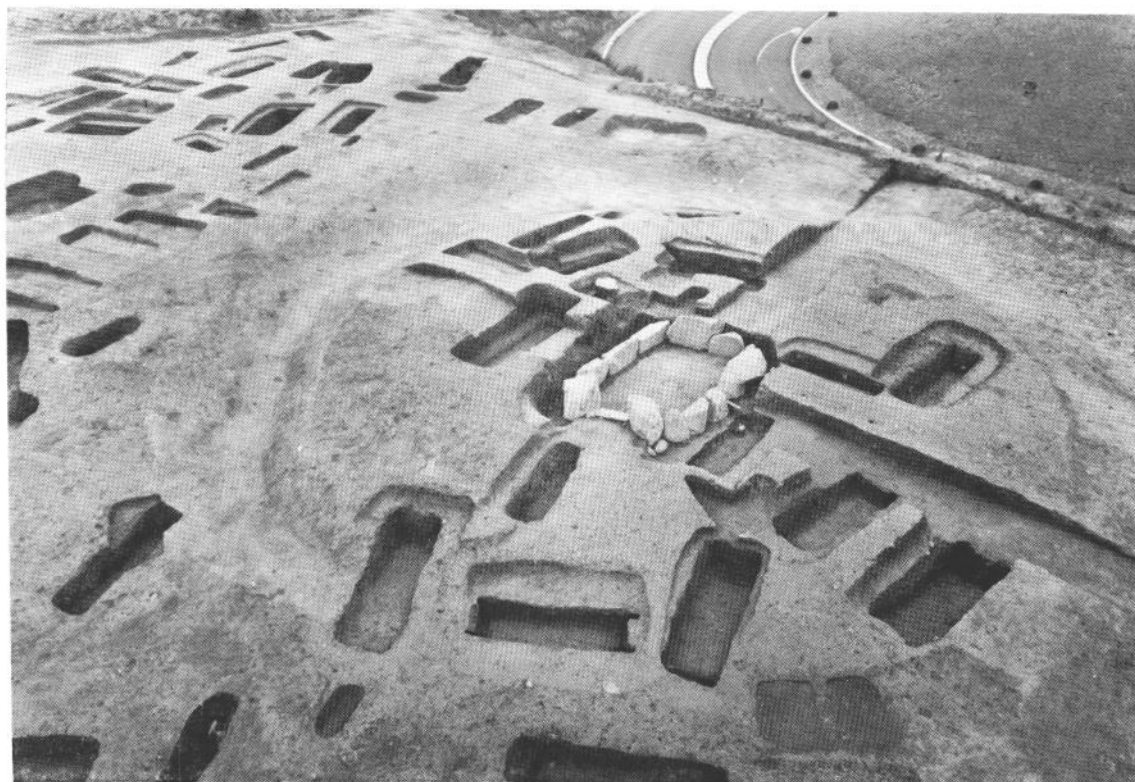
汐井掛16号墳全景（北西から）



汐井掛16号墳墳丘肩部列石（北西から）



汐井掛16号墳石室掘方切込面の全景（石組みは木棺墓・土壘墓の標石 北西から）



汐井掛16号墳地山面の全景（西から）

汐井掛16号墳石室全景
(南東から)

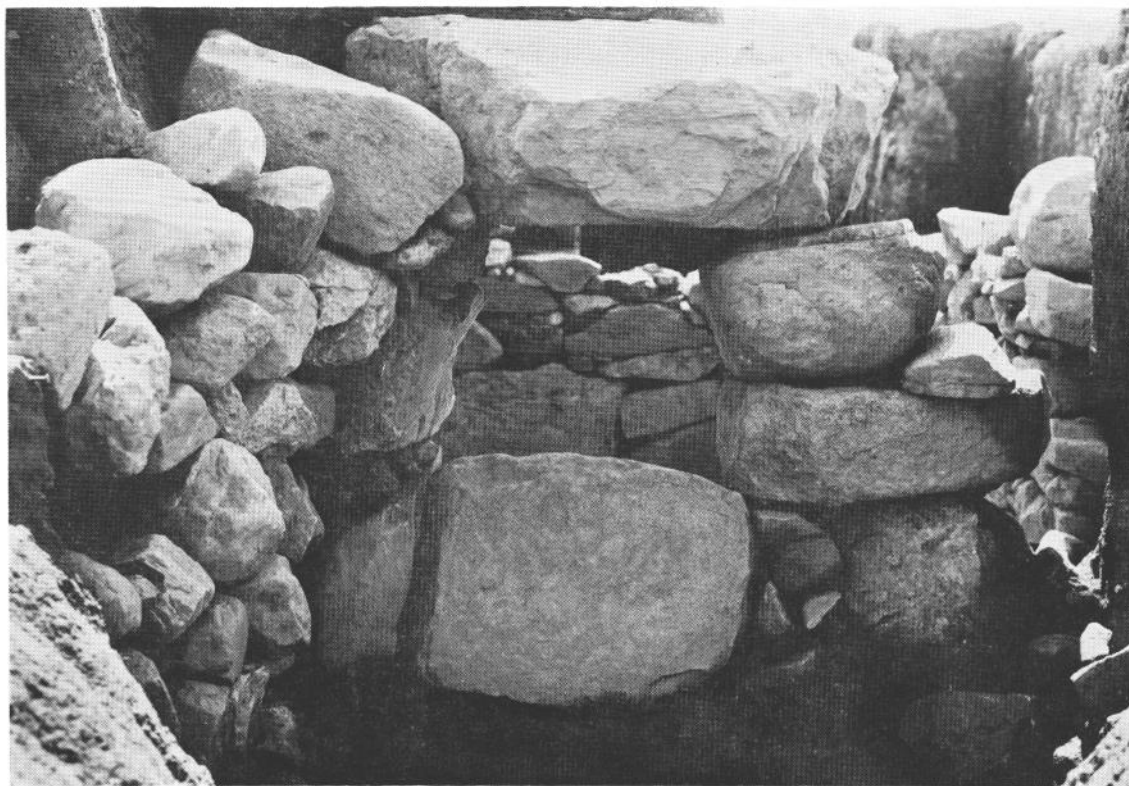


同右側壁石積状態





汐井掛16号墳左側壁石積および玄門閉塞状態



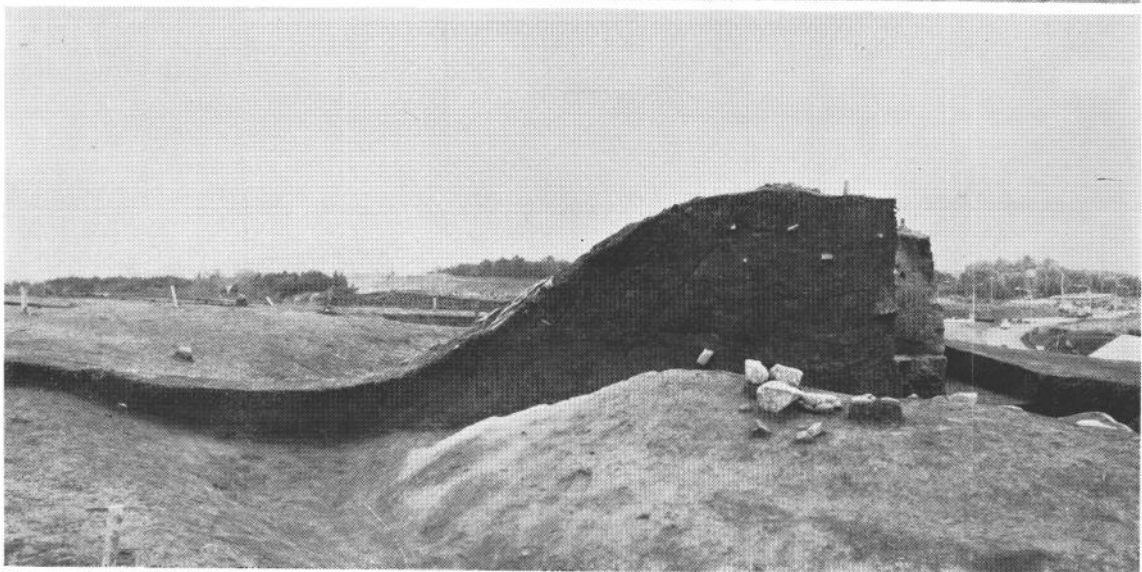
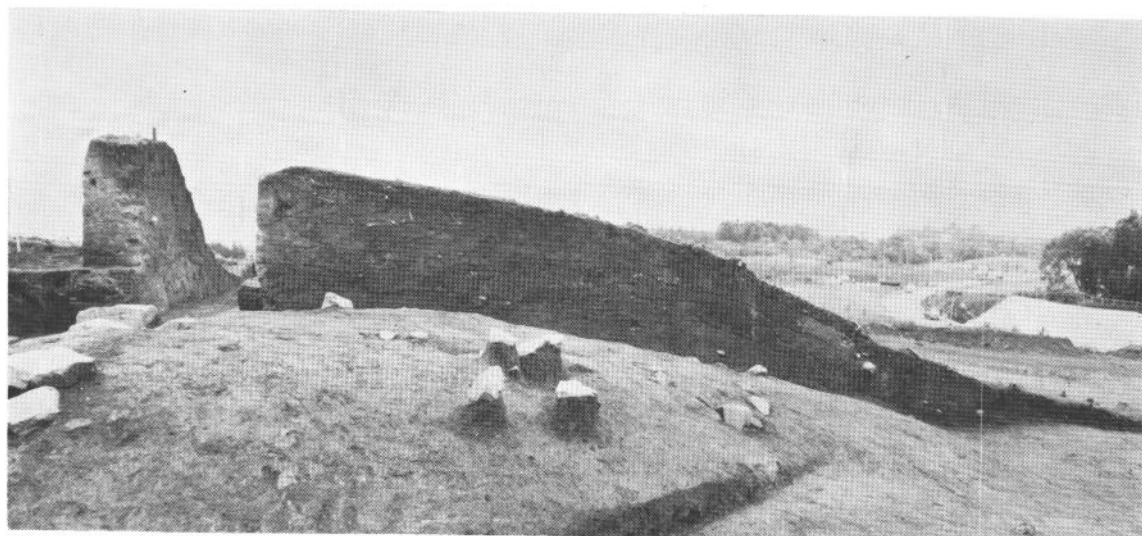
同玄門閉塞状態（前庭部から）



汐井掛16号墳第Ⅰ区列石



同第Ⅱ区列石



汐井掛16号墳墳丘盛土断面（上から第1トレンチ～第Ⅲトレンチ）



汐井掛16号墳第Ⅲ区墳丘内土器出土状態



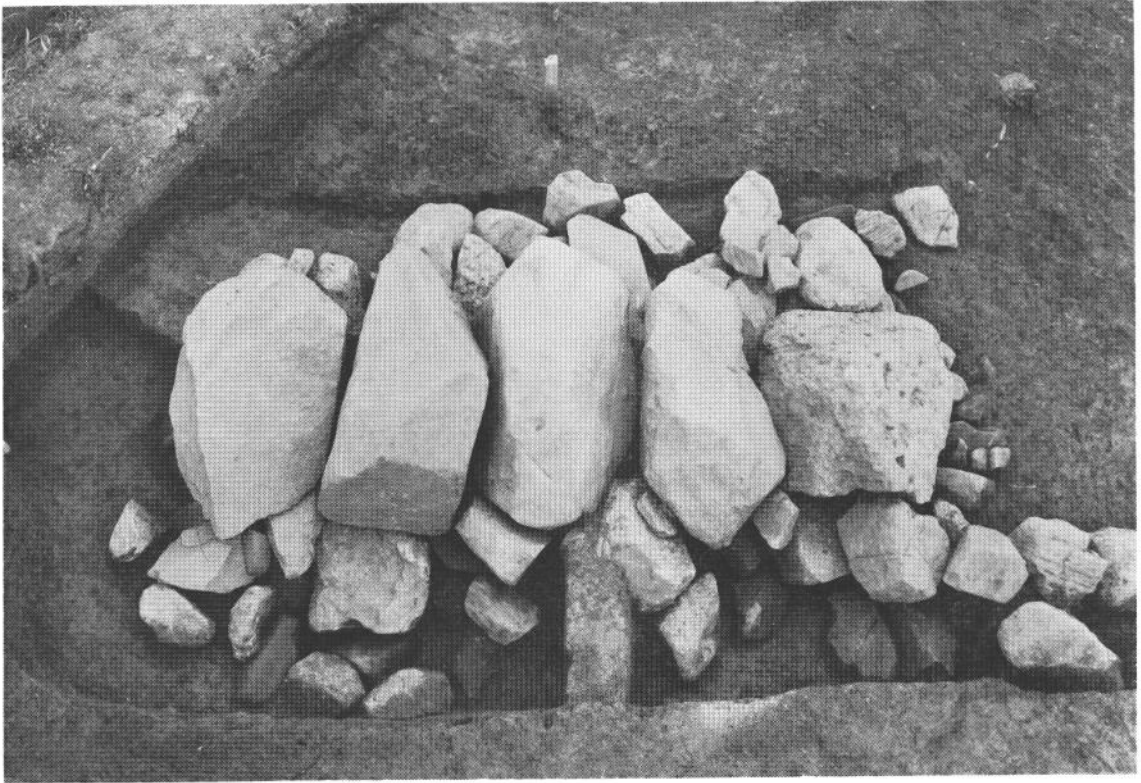
同石除去後



汐井掛16号墳第Ⅳ区墳裾部土器出土状態全景（北から）



同器台等出土状態（西から）



汐井掛17号墳石室全景（北東から）



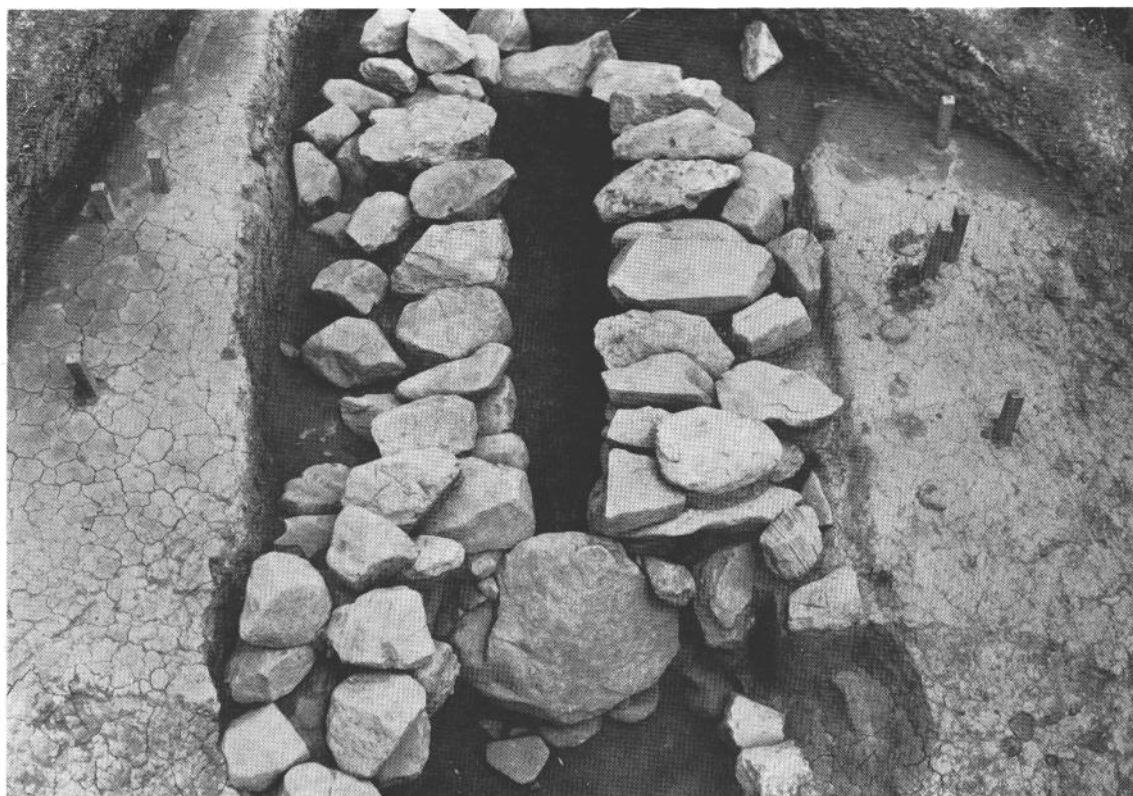
同天井石除去後（北東から）



汐井掛17号奥壁



同横口閉塞状態



同石室全景



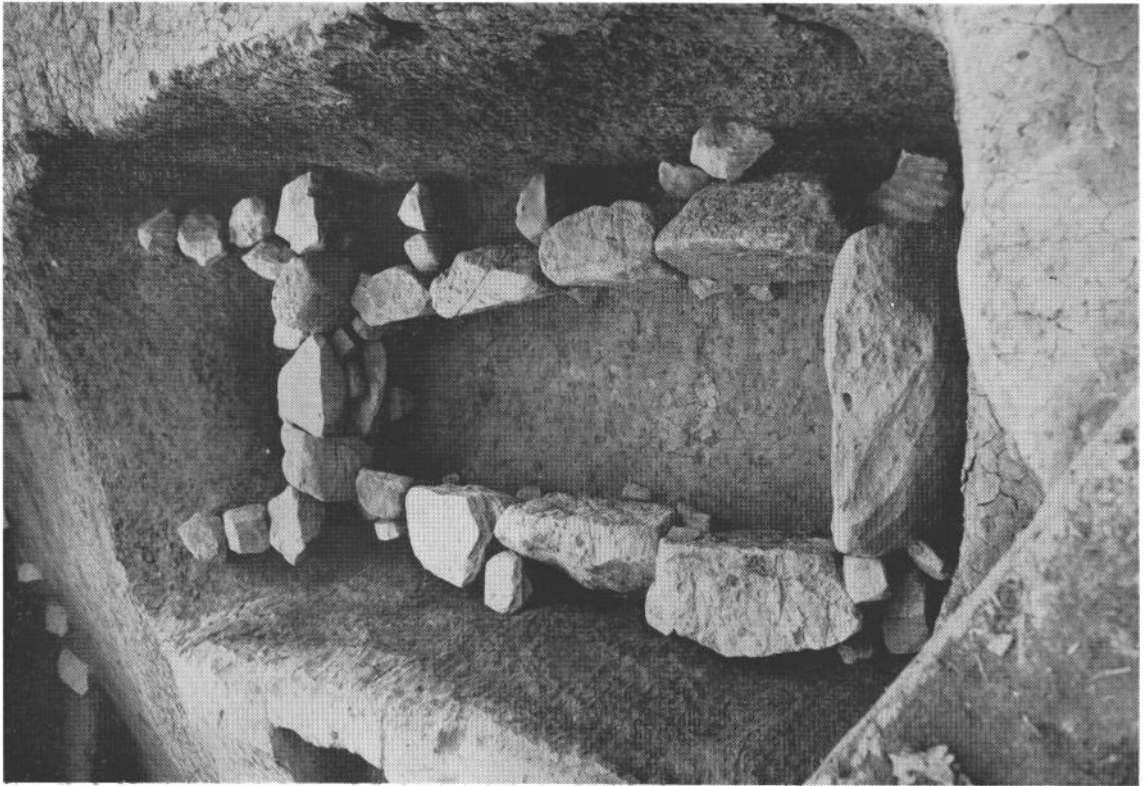
汐井掛17号墳横口部と閉塞石



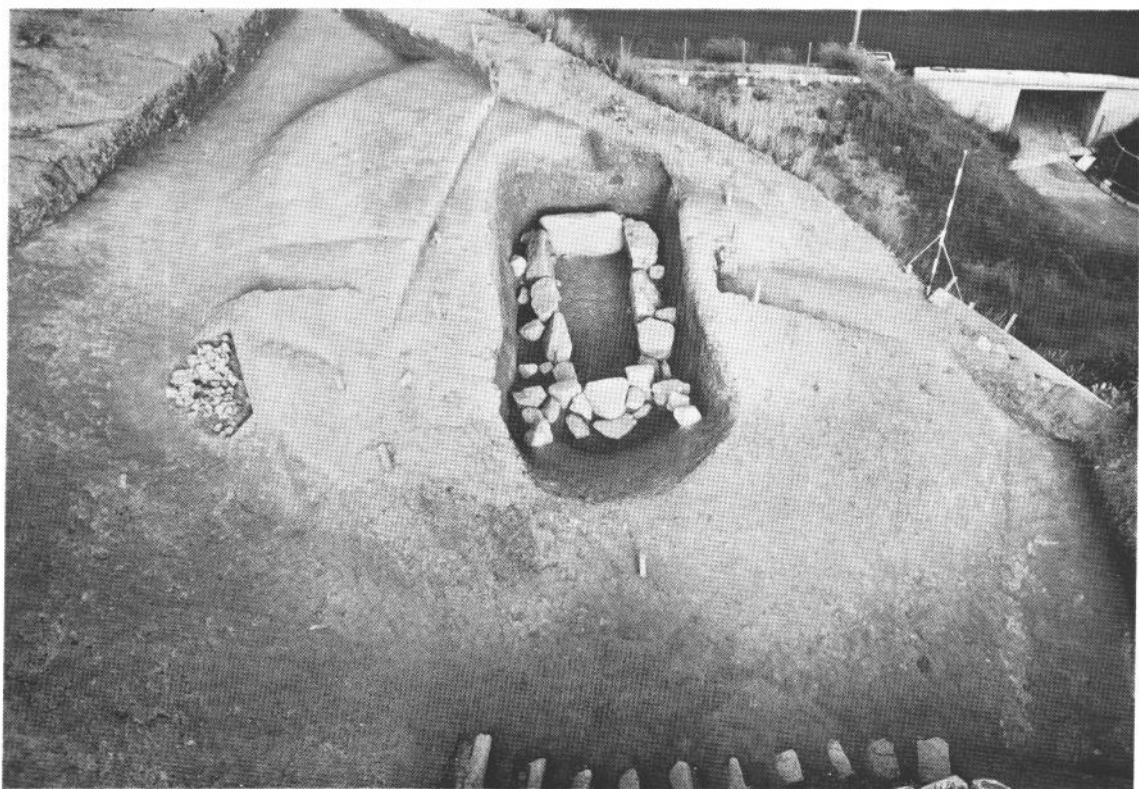
同前庭部土層断面



汐井掛17号墳床面



同石室掘方と石室構築の初期段階



汐井掛17号墳発掘後全景（北西から）



同Ⅲ区土器出土状態（北東から）



汐井掛16, 17号墳および汐井掛遺跡発掘後全景（北東上空から 毎日新聞社提供）



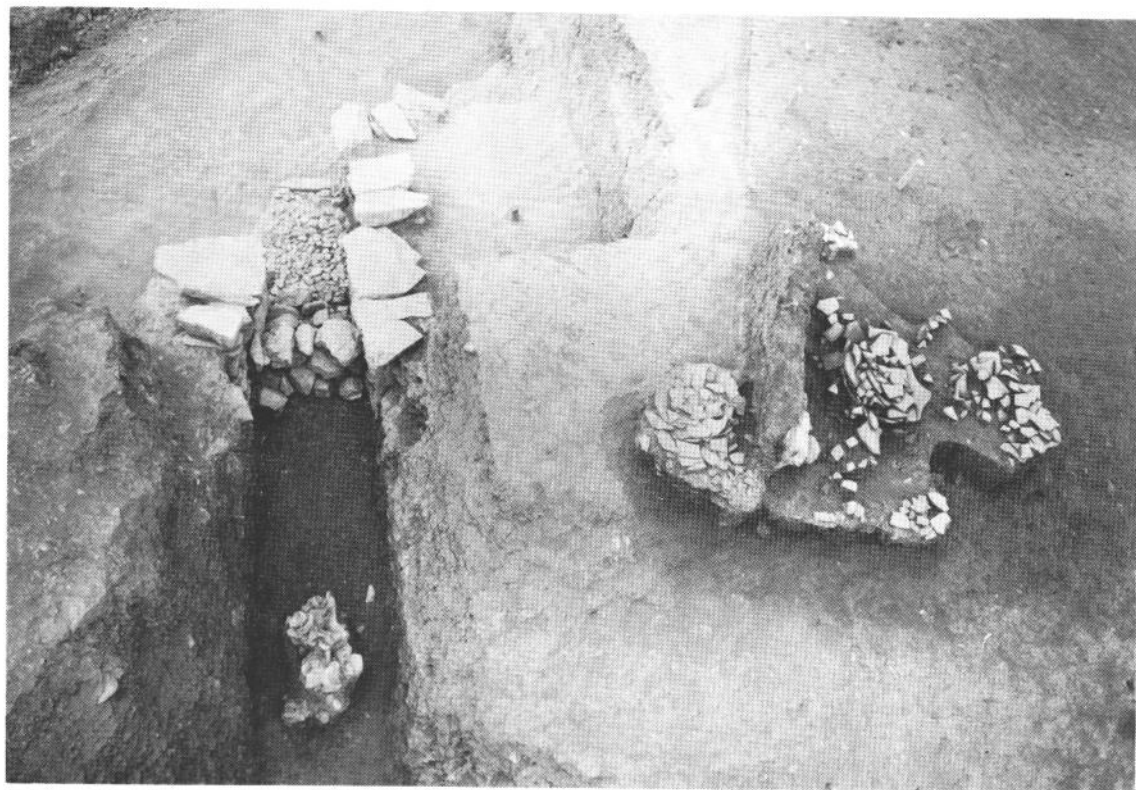
高平古墳群全景（北東から 数字は古墳番号を示す）



高平1号墳全景（東から）



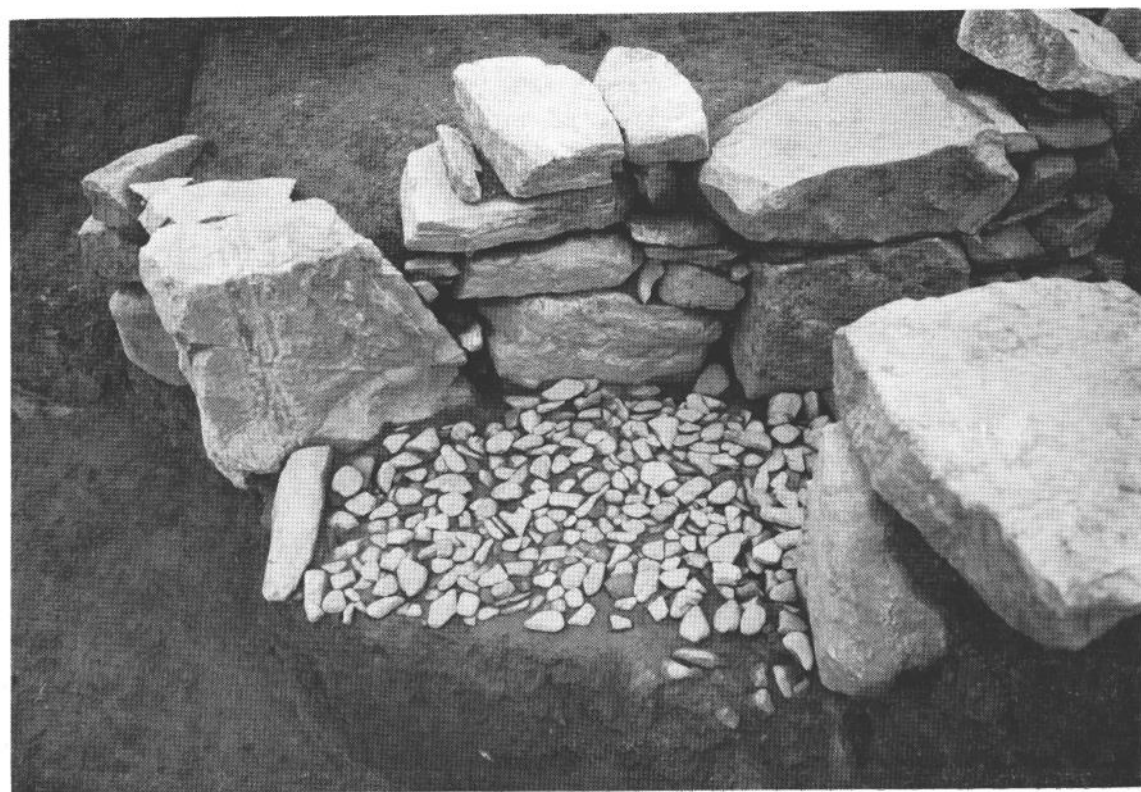
高平1号墳全景（北東から）



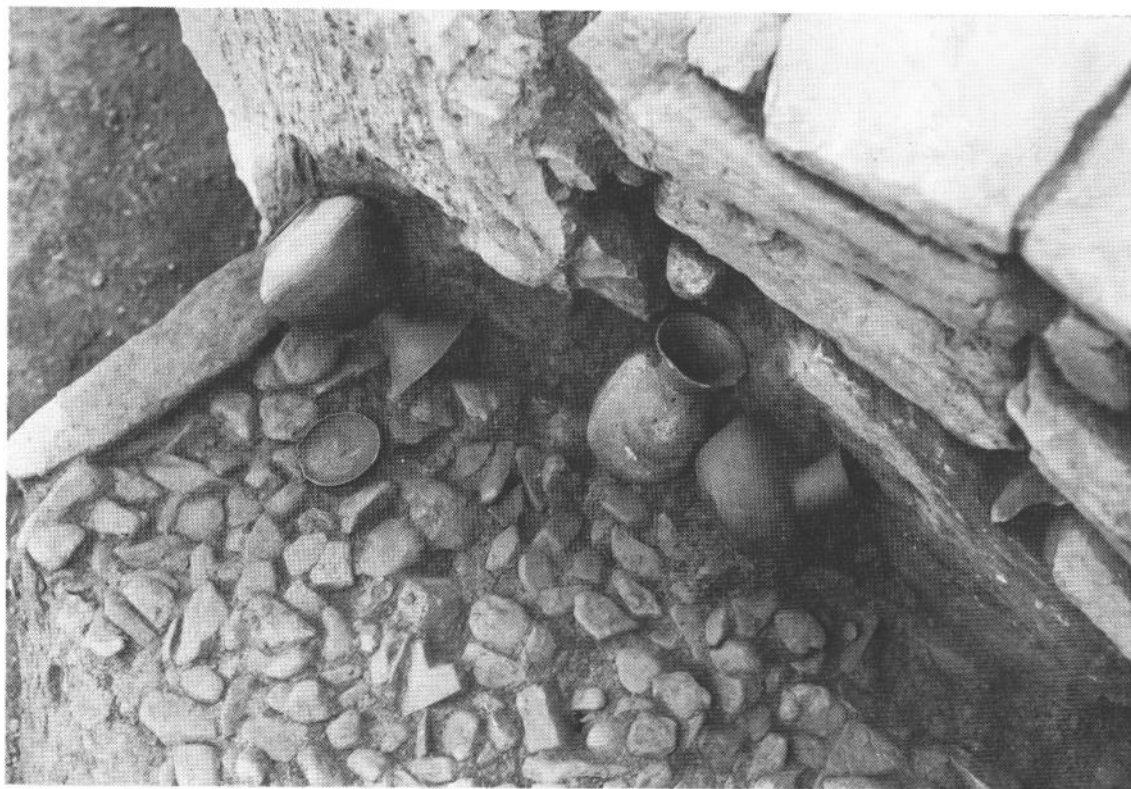
同石室全景および土器出土状態（北東から）



高平1号墳石室全景（北東から）



同前室全景（南東から）



高平1号墳前室土器出土状態



同前室入り口閉塞状態



高平 1 号墓道内土器出土状态



同上



高平1号IV区墳丘内土器出土状態（西から 右から1群・2群・3群）



同上（東から 左から1～3群）



高平1号墳Ⅳ区出土土器群と墳丘盛土との関係（北から）



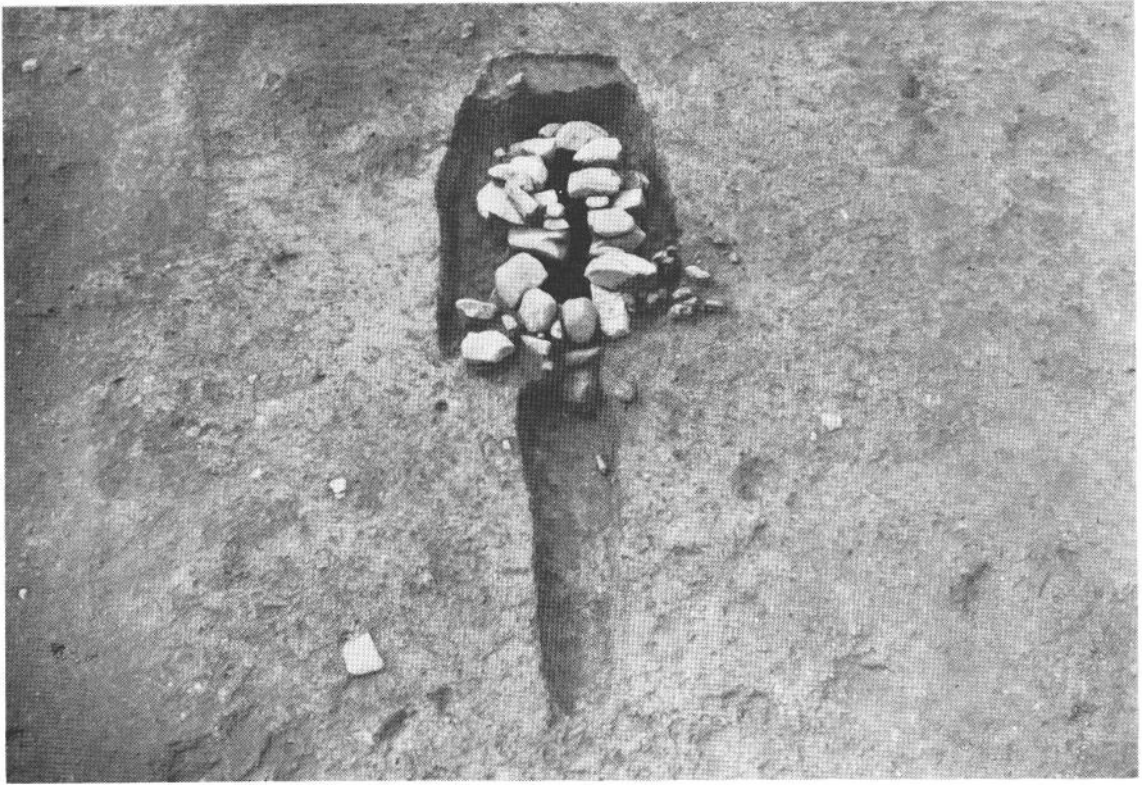
同1群土器出土状態（東から）



同2群土器出土状態（東から）



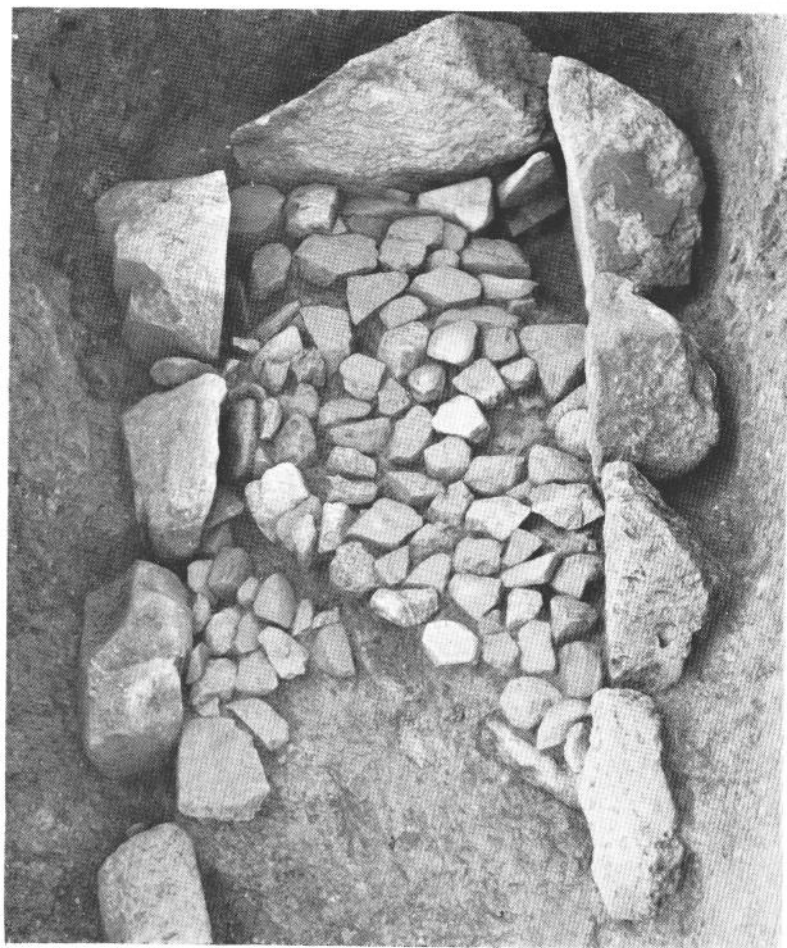
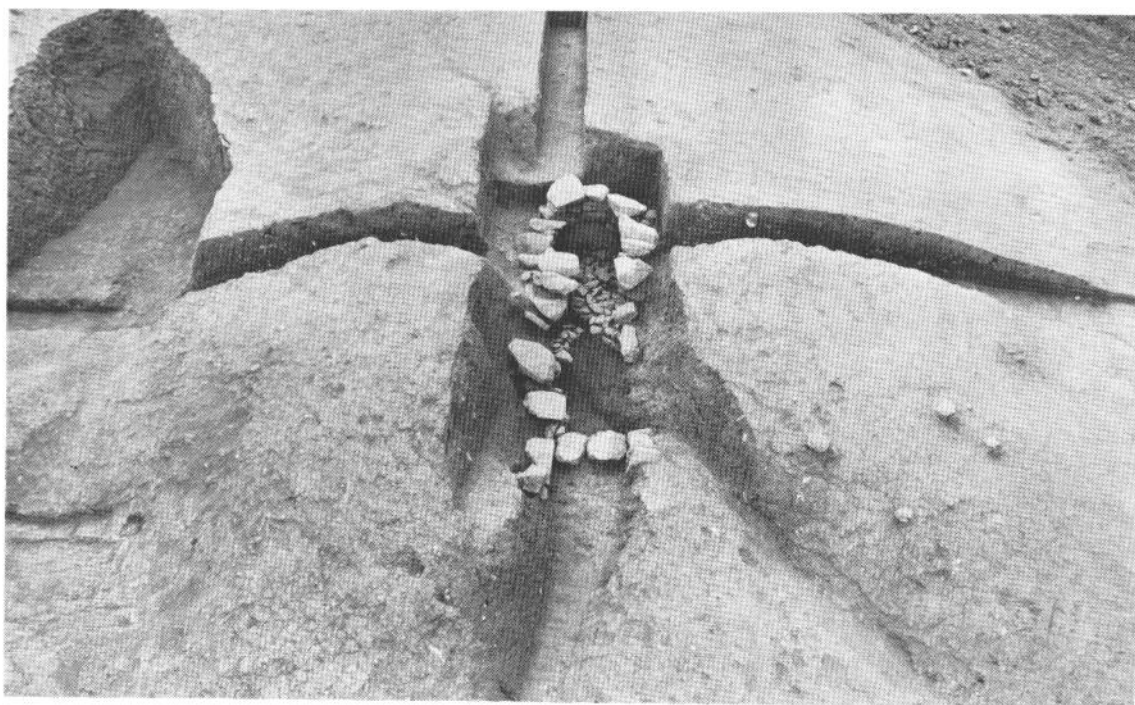
同3群土器出土状態（北から）



高平2号墳全景（北東から）



同床面および閉塞石（北東から）



上 高平3号墳全景
(北東から)

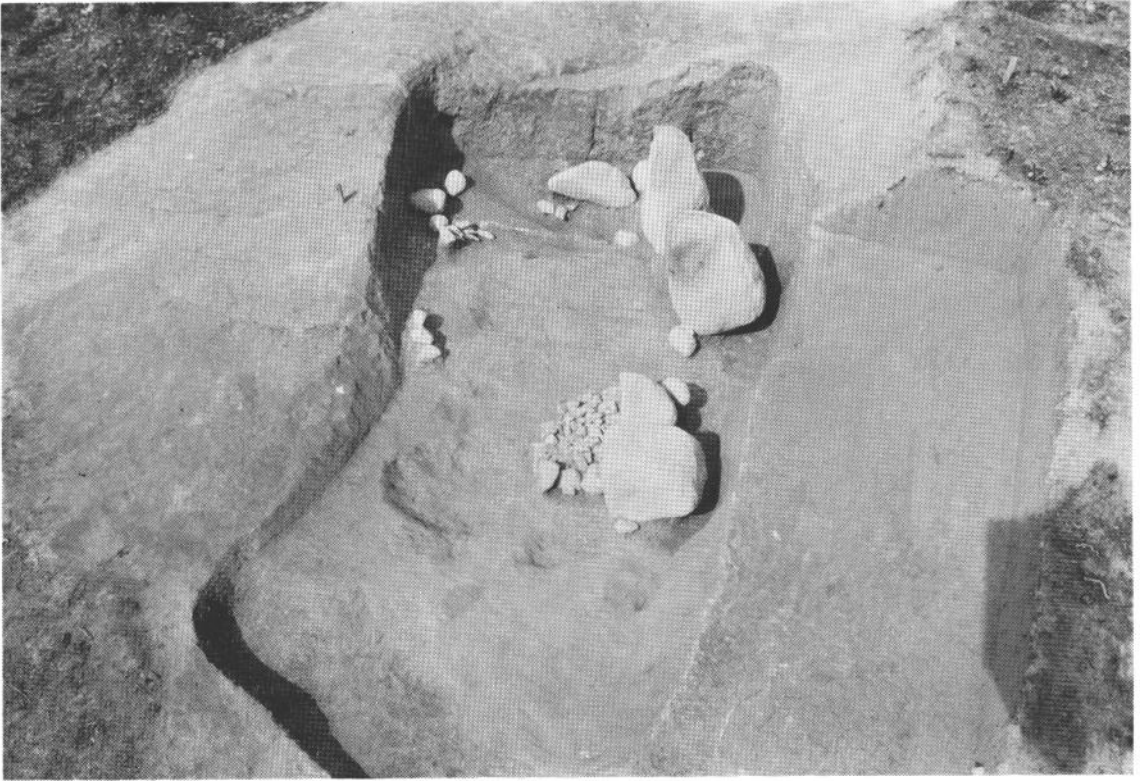
下 同玄室床面全景(同上)



南ヶ浦1～4号墳遠景（5号墳から）



南ヶ浦5・6号墳遠景（1号墳から）



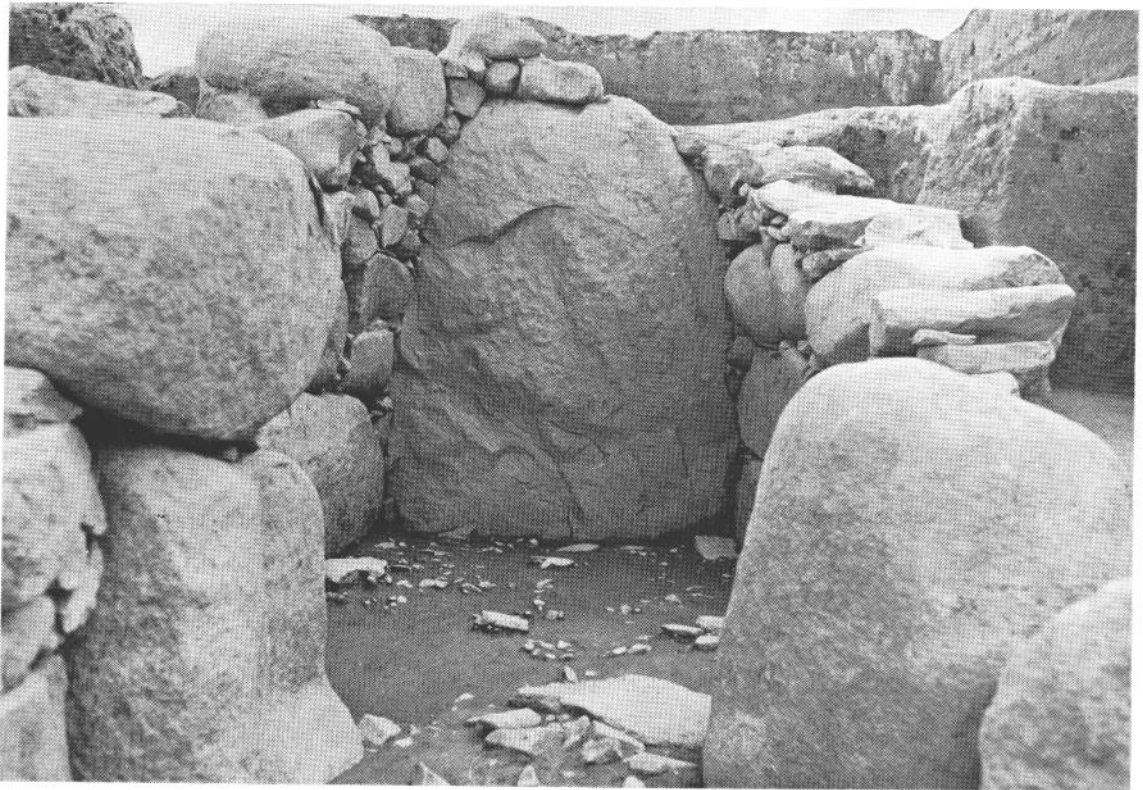
南ヶ浦1号墳石室全景（南西から）



南ヶ浦2号墳石室全景（南から）



南ヶ浦2号墳石室全景（東から）



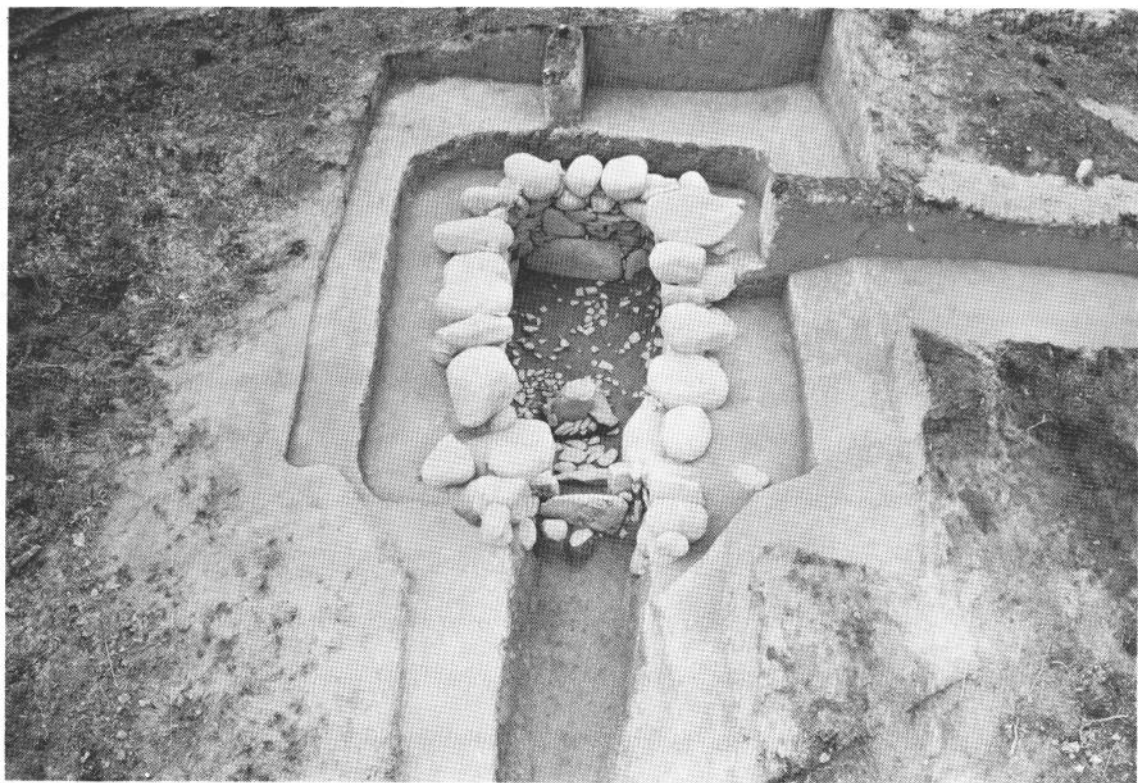
同奥壁（南から）



南ヶ浦2号墳後室左側壁石積状態



同後室右側壁石積状態



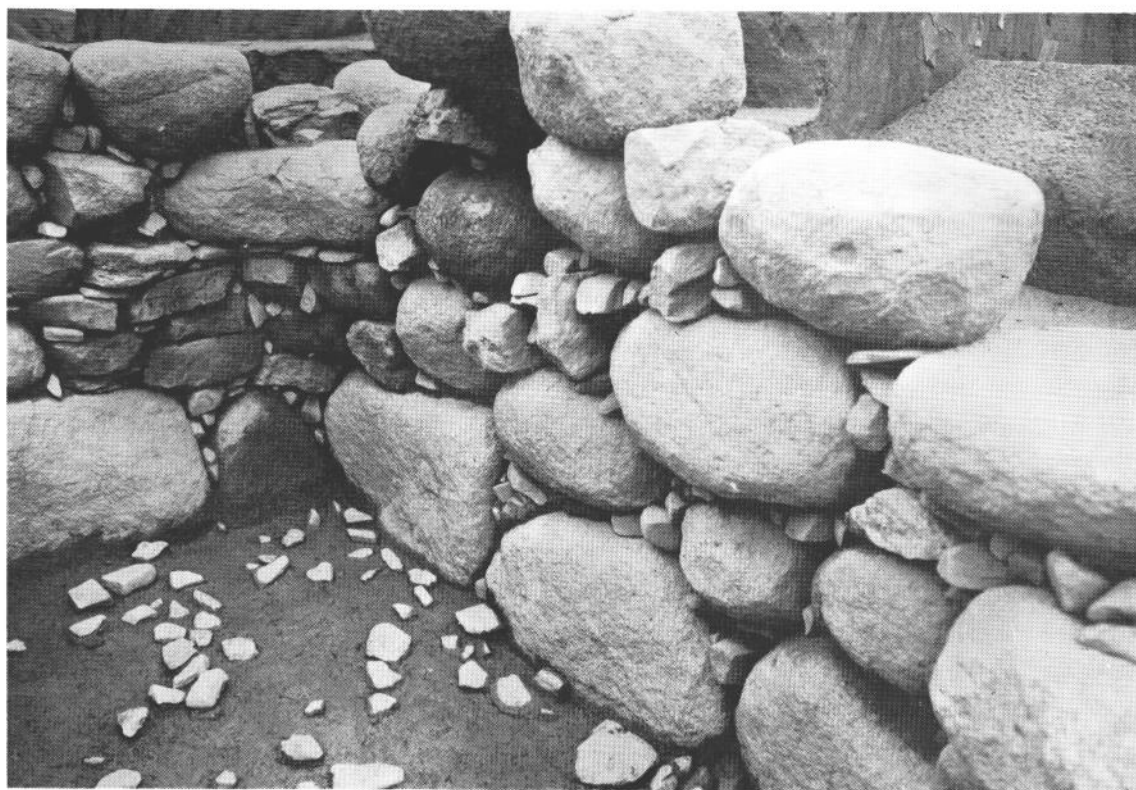
南ヶ浦3号墳石室全景（南から）



同奥壁および後室床面



南ヶ浦3号墳後室左側壁石積状態



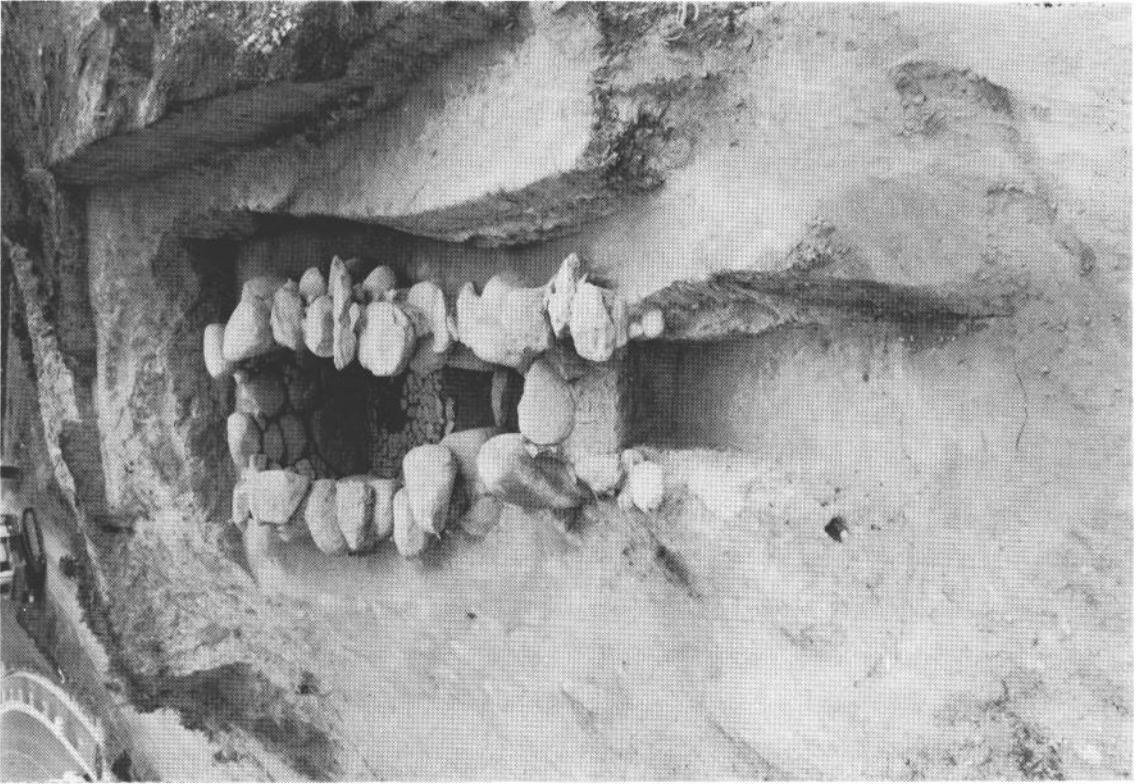
同後室右側壁石積状態



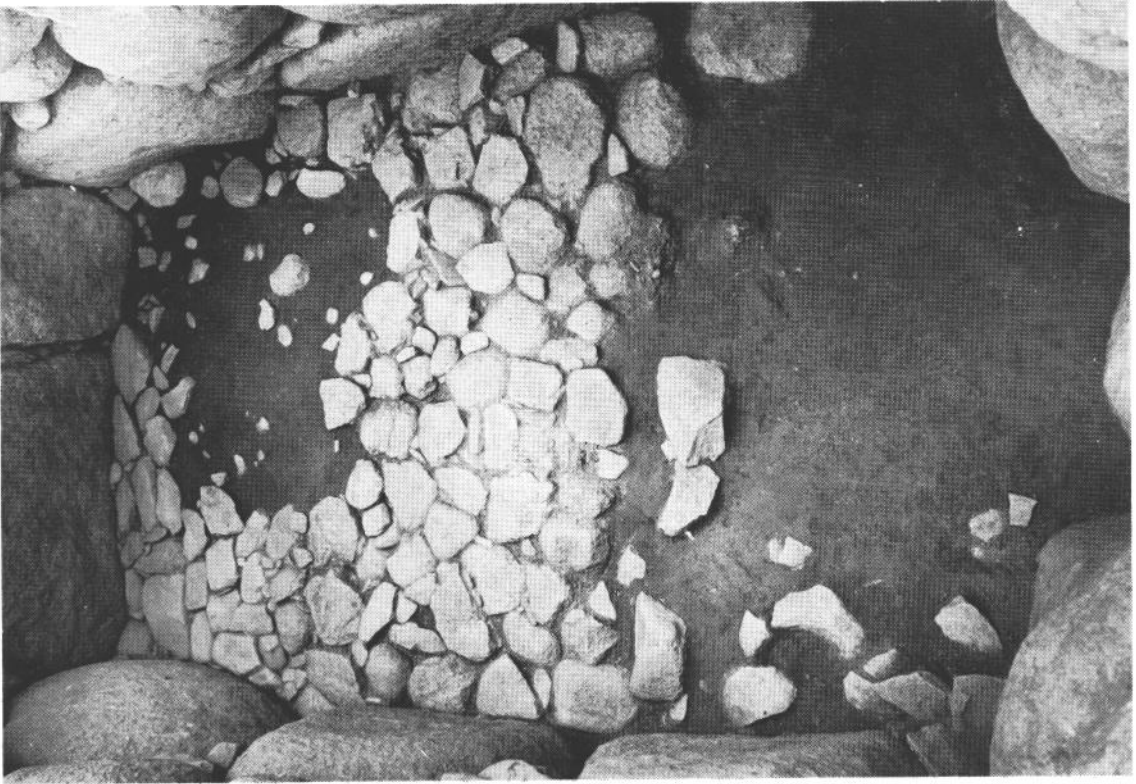
南ヶ浦 3号墳前室と閉室状態



同後室の立石遺構



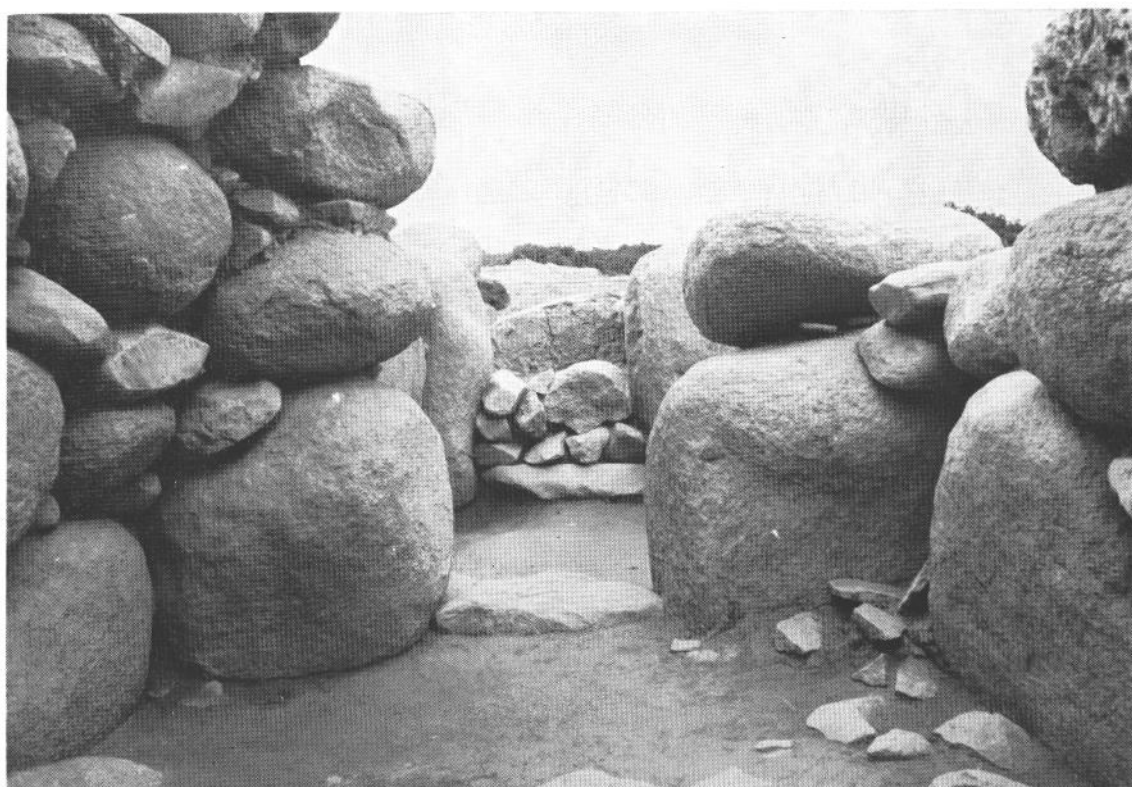
南ヶ浦4号墳全景（南から）



同床面（前室から）



南ヶ浦4号墳奥壁と後室入口（南から）



同前室入口での閉塞状態



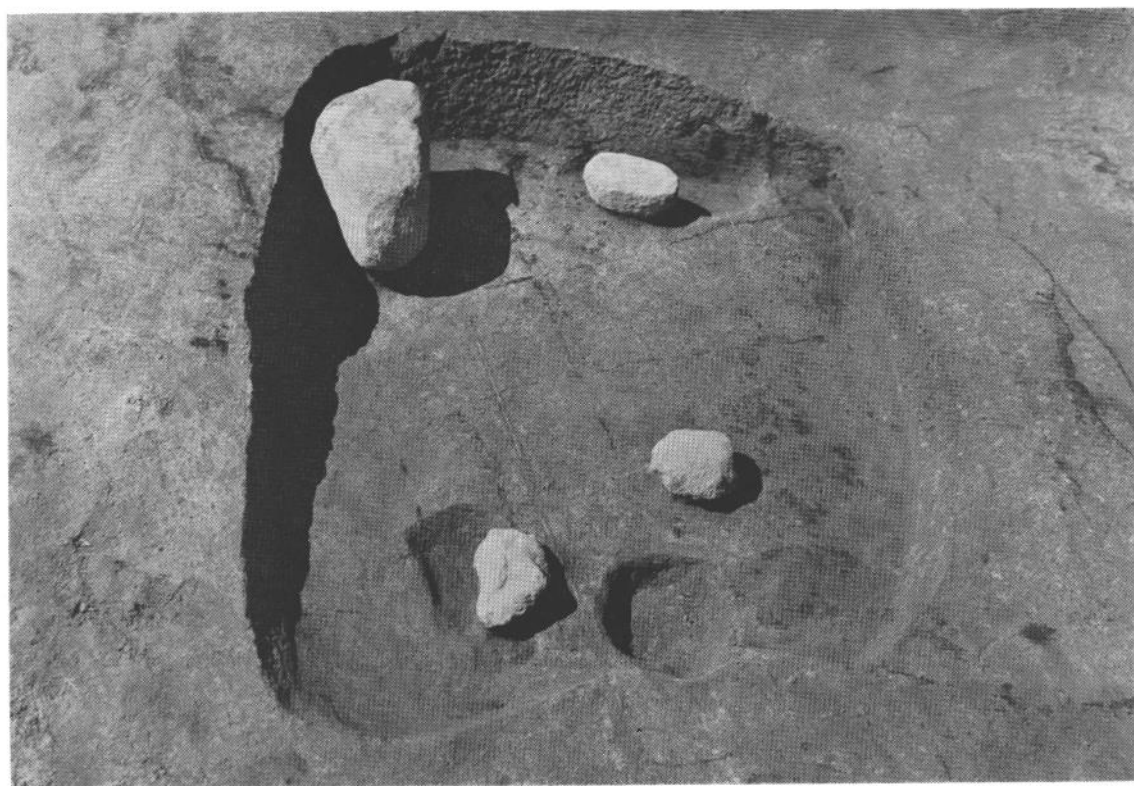
南ヶ浦 4 号墳後室左側壁石積状態



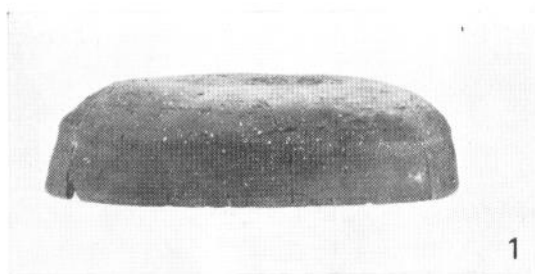
同後室右側壁石積状態



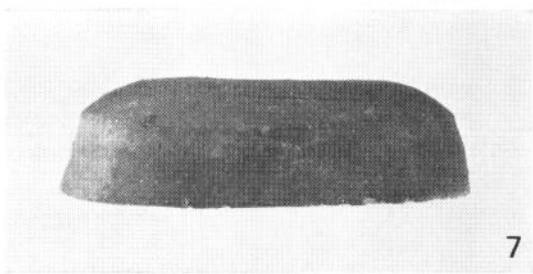
南ヶ浦5号墳石室全景（西から）



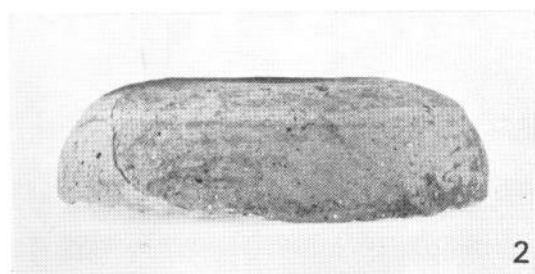
南ヶ浦6号墳石室全景（南から）



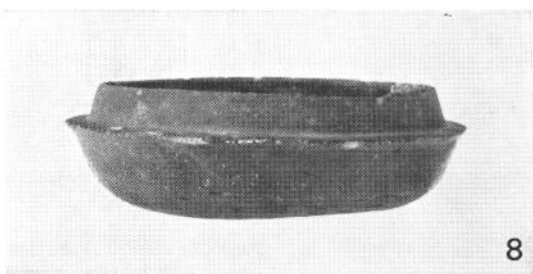
1



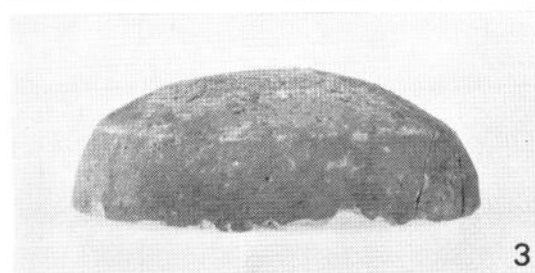
7



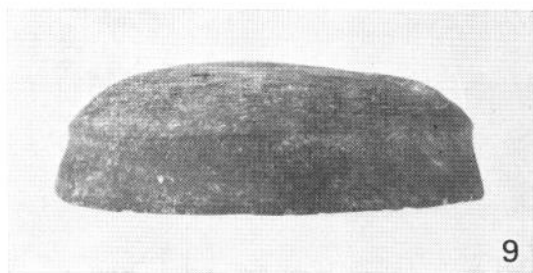
2



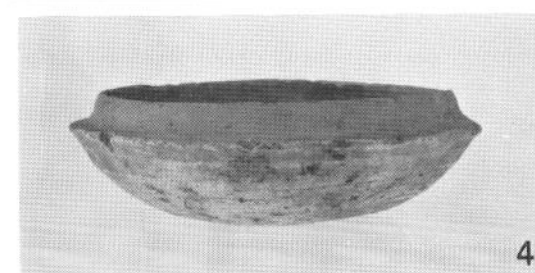
8



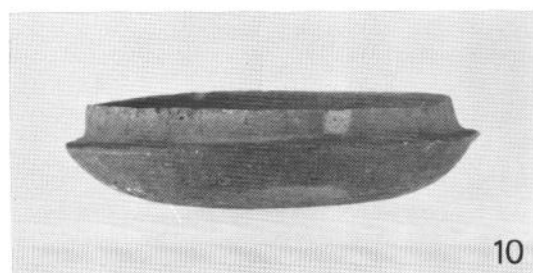
3



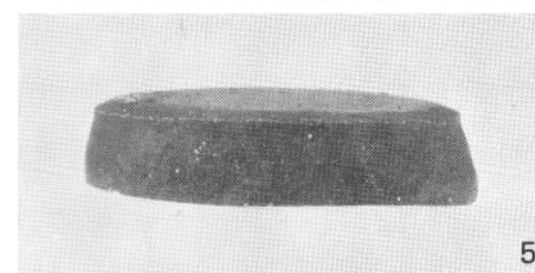
9



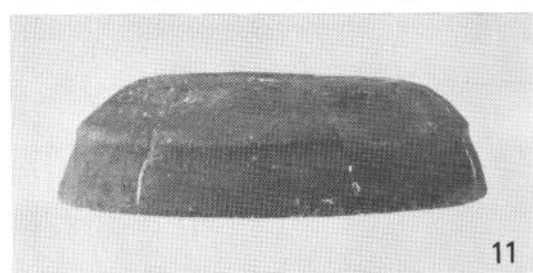
4



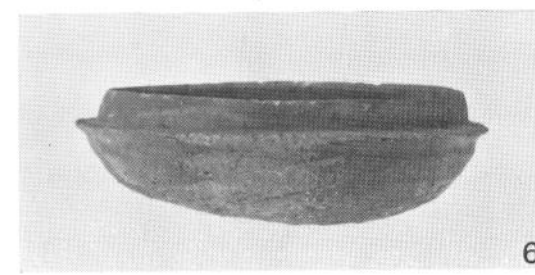
10



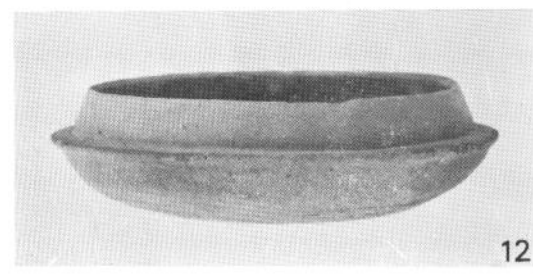
5



11

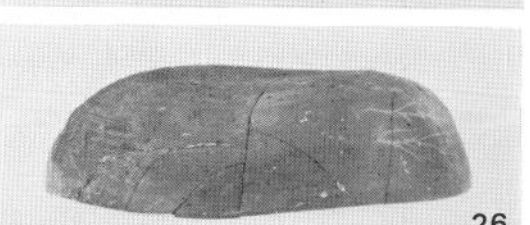
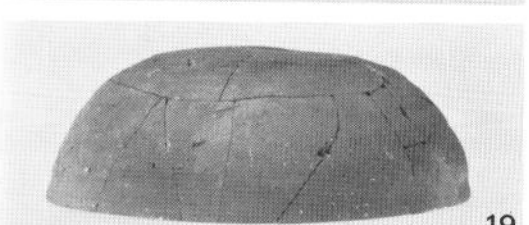
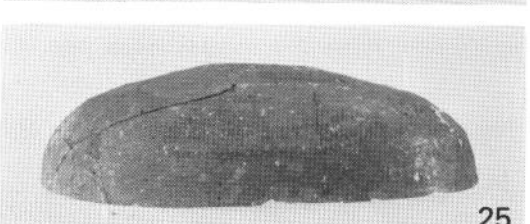
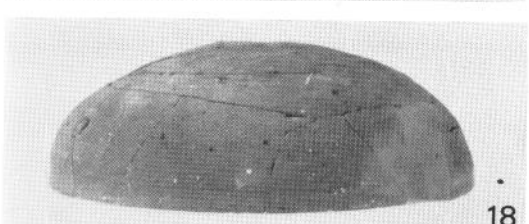
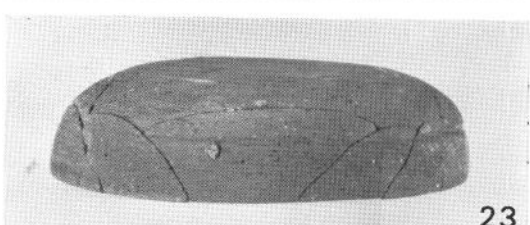
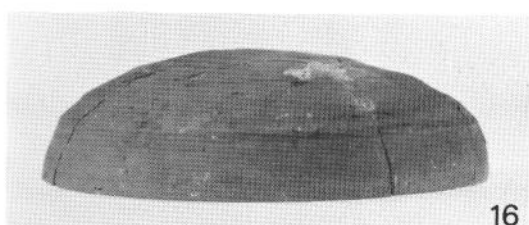
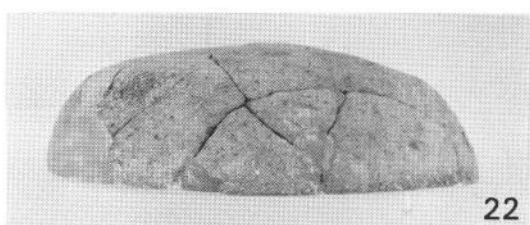
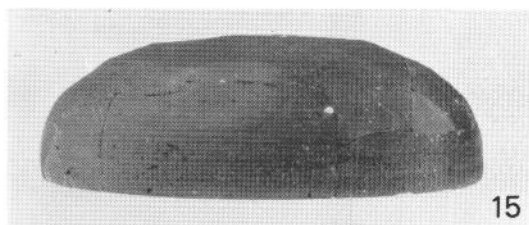
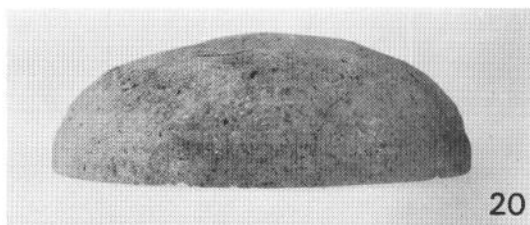
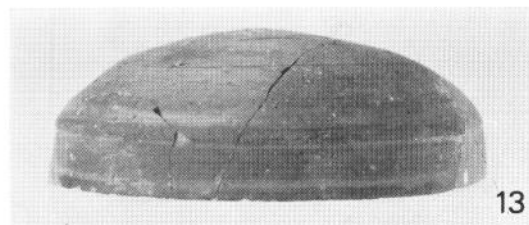


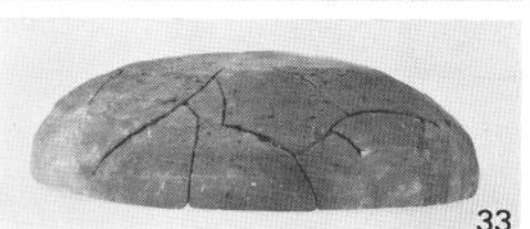
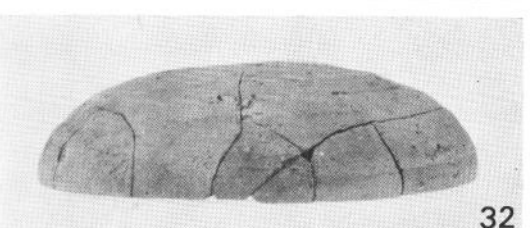
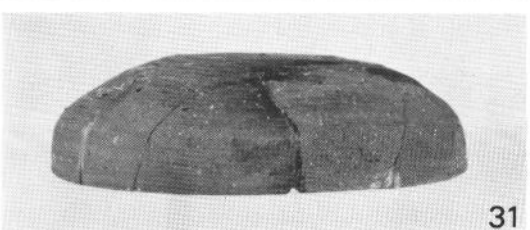
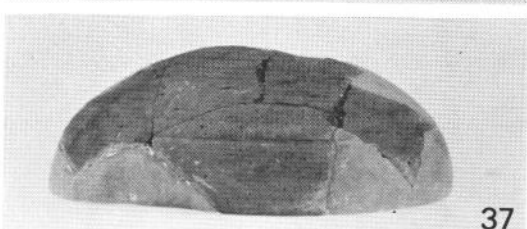
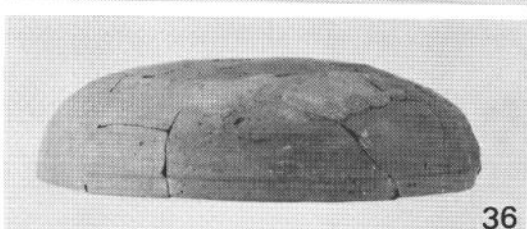
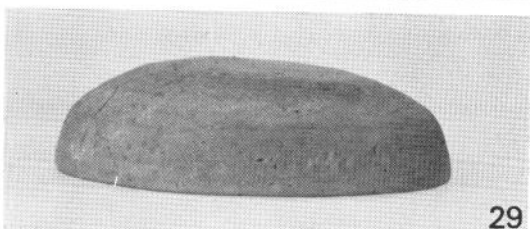
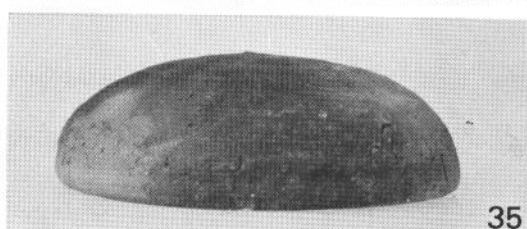
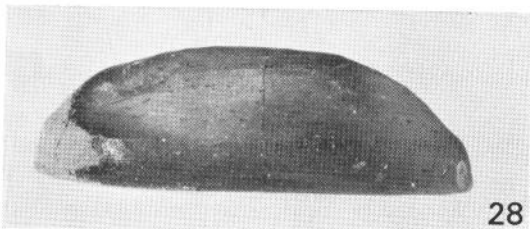
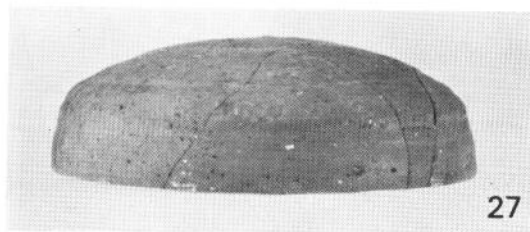
6

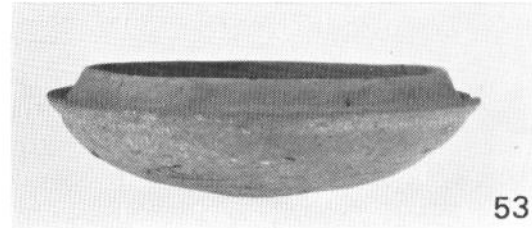
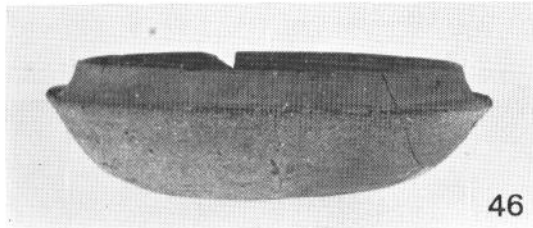
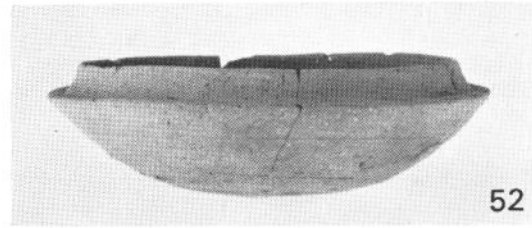
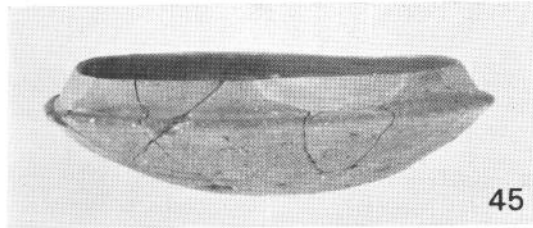
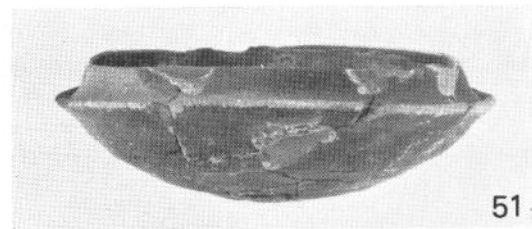
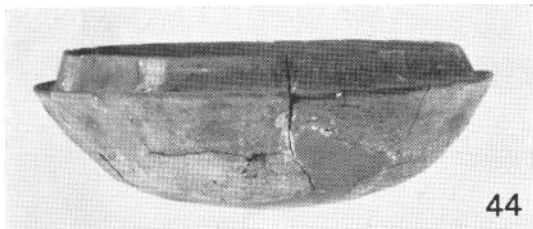
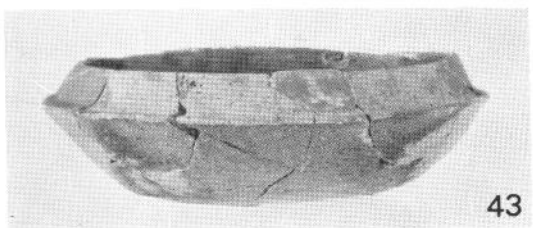
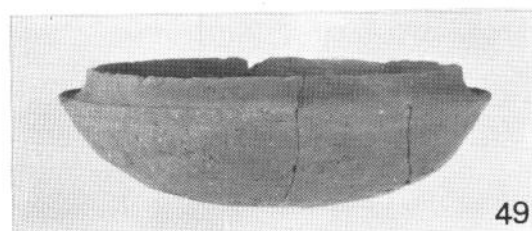
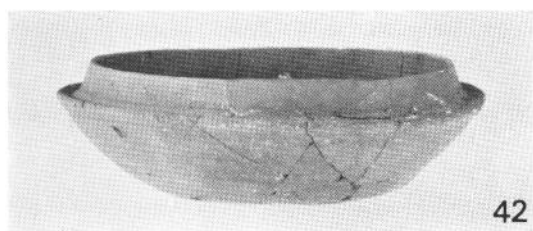
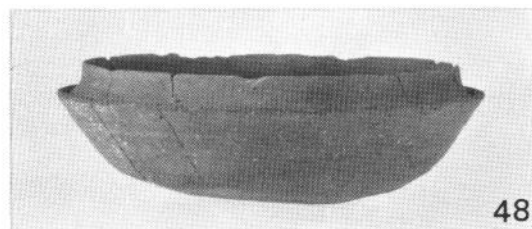
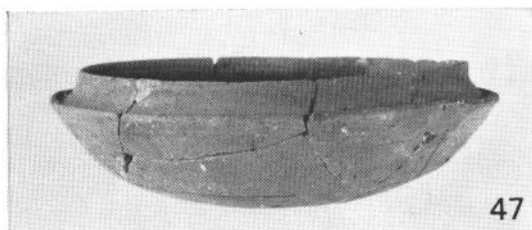
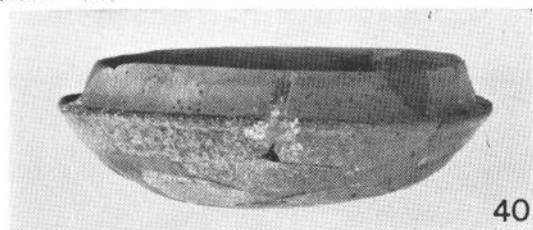


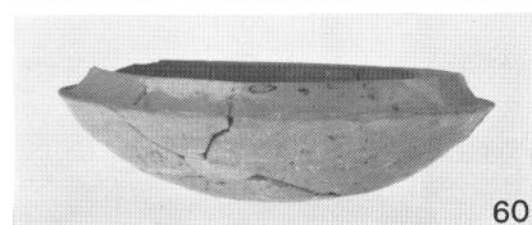
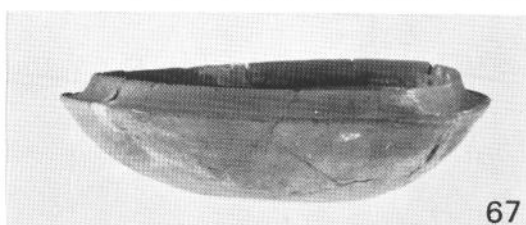
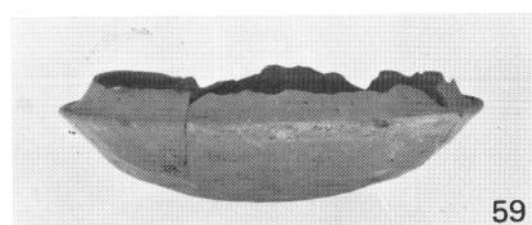
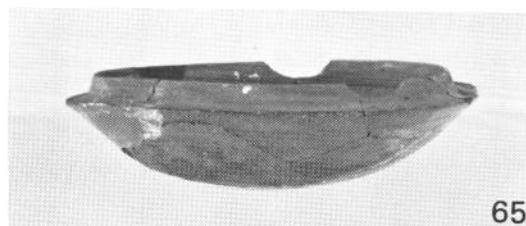
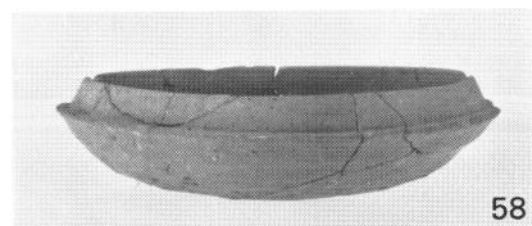
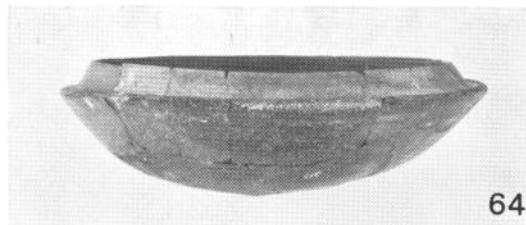
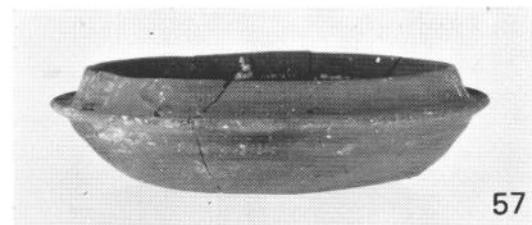
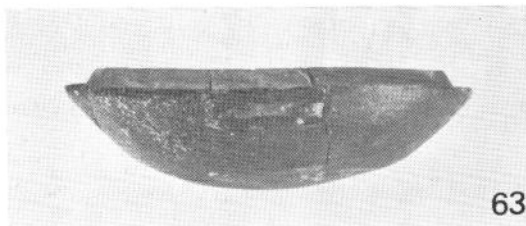
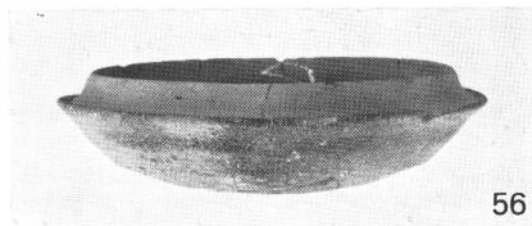
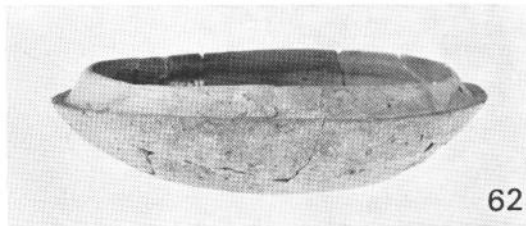
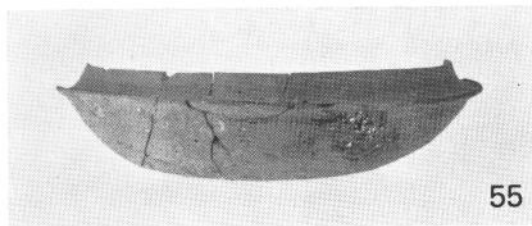
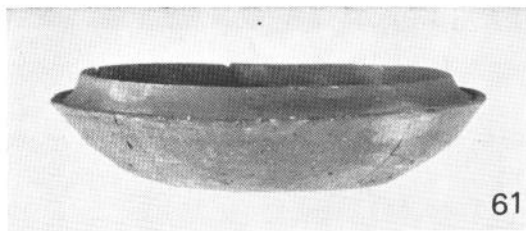
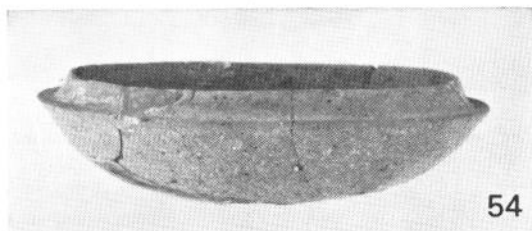
12

汐井掛16号墳Ⅲ区墳丘内出土一括土器（3以下はおのおのセットをなす）

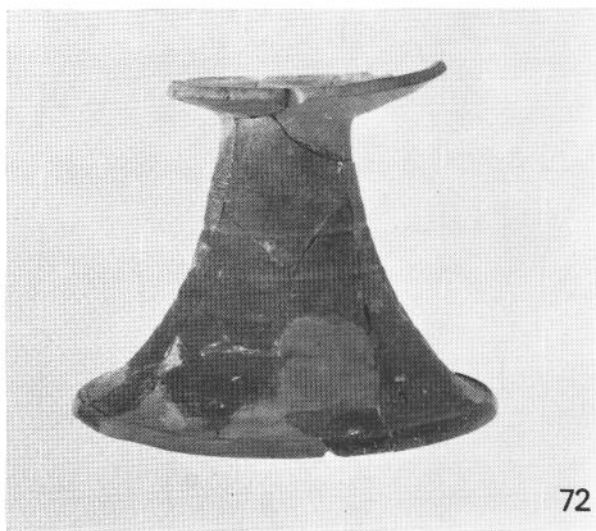




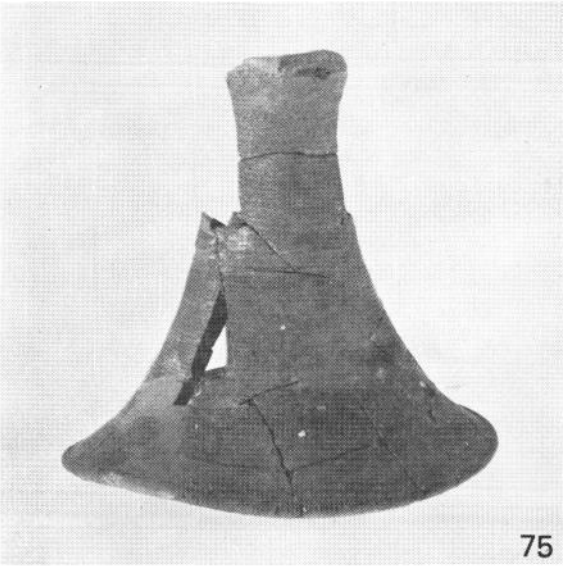
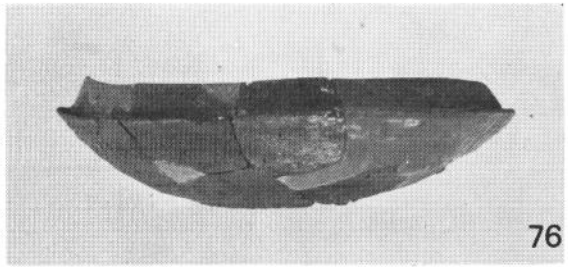




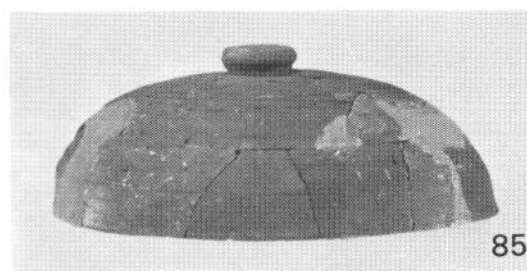
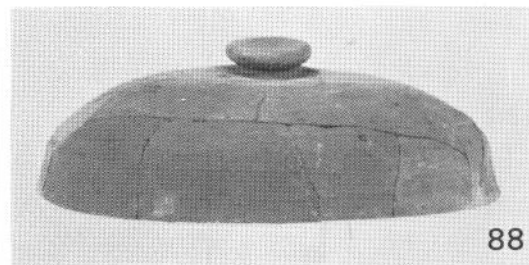
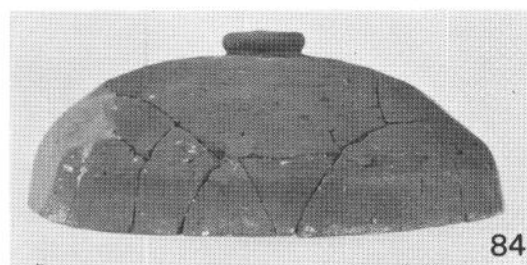
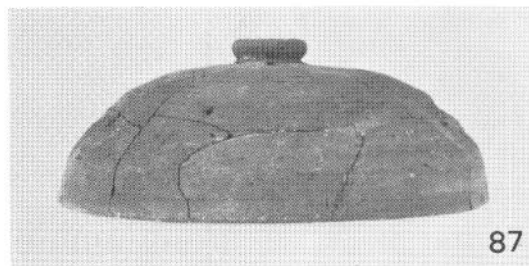
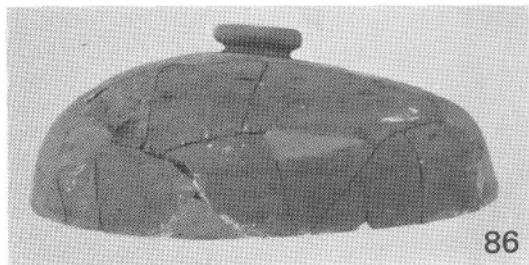
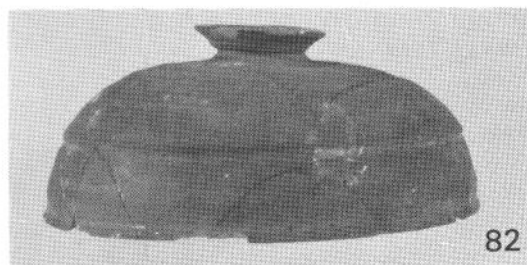
汐井掛16号墳出土土器



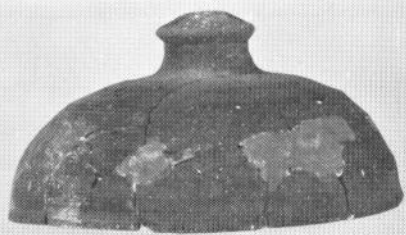
汐井掛16号墳出土土器



汐井掛16号墳出土土器



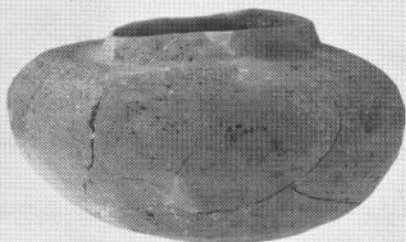
汐井掛16号墳出土土器



89



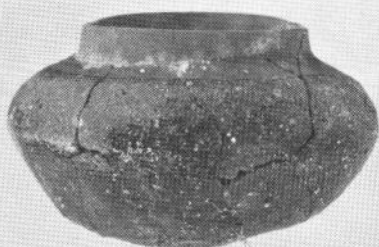
90



91



92



93



96

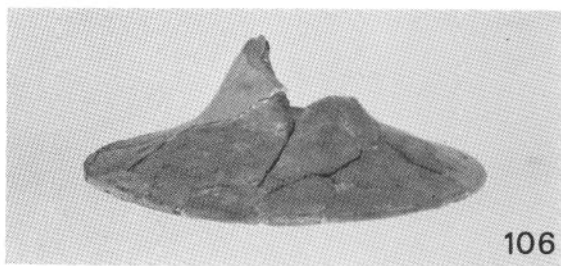
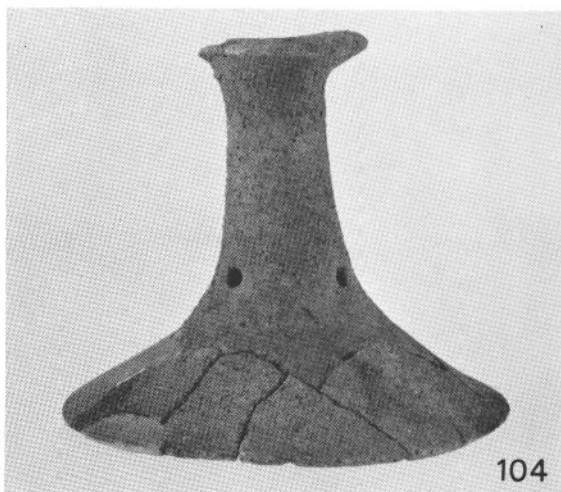
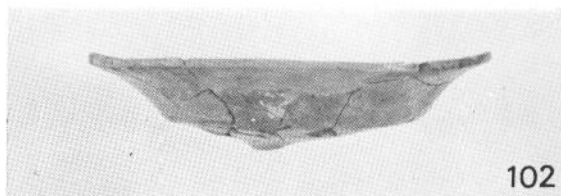
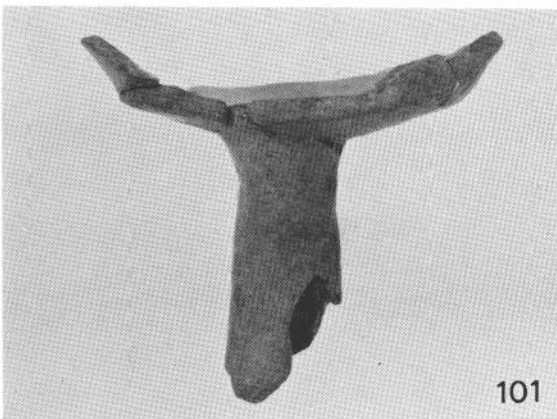
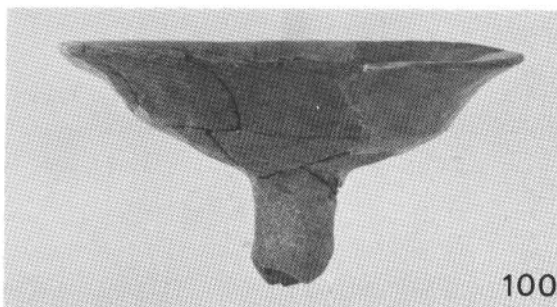


95

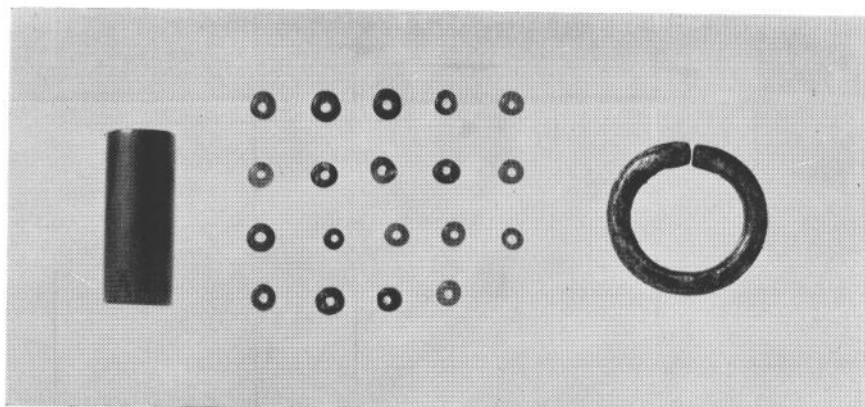


97

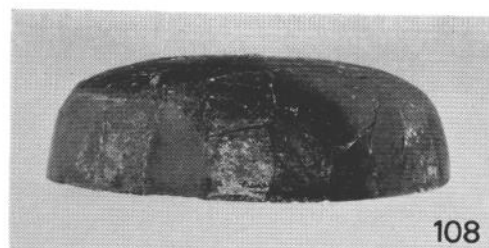
汐井掛16号墳出土土器



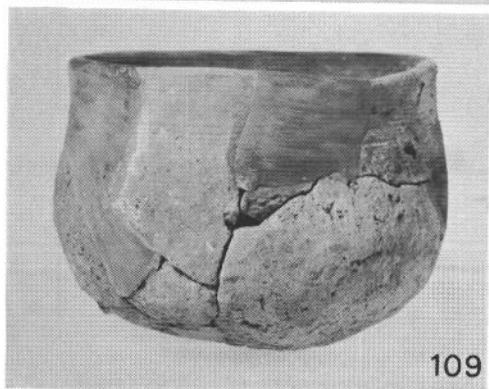
汐井掛16号墳出土土器



汐井掛16号墳出土遺物



108

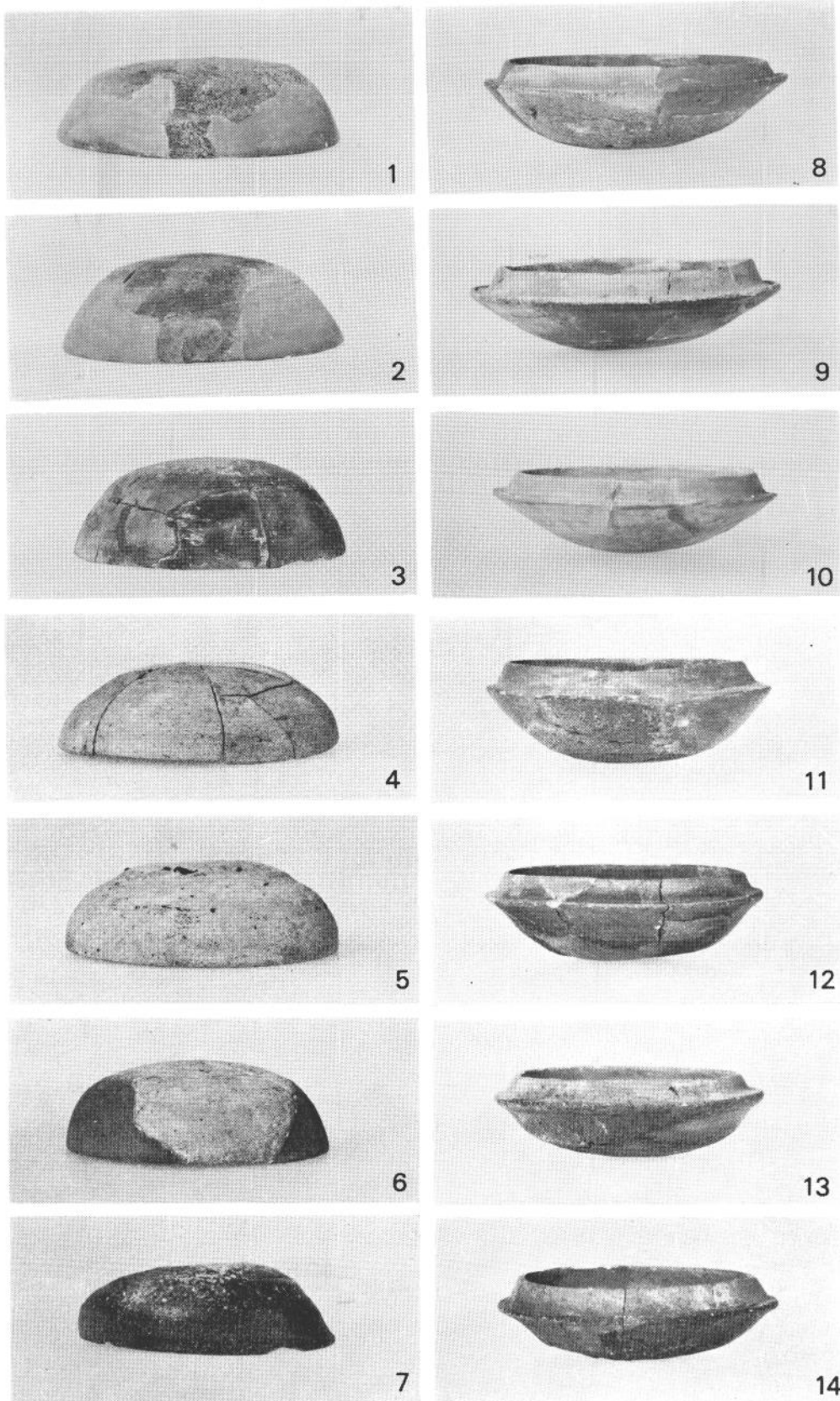


109

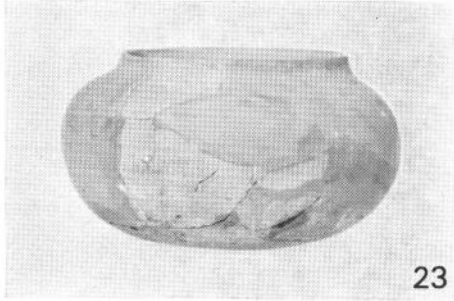
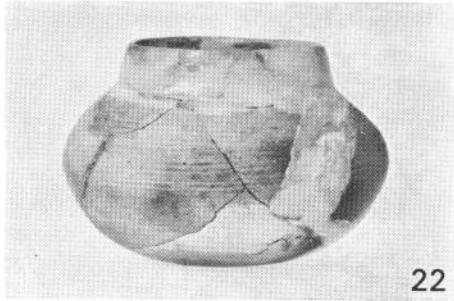
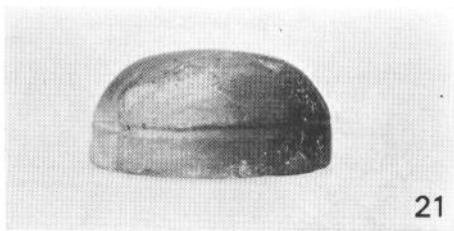
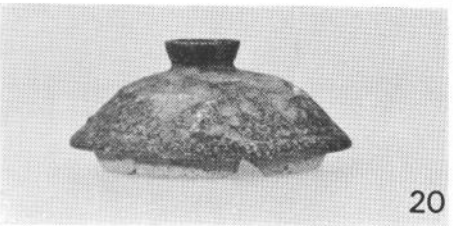
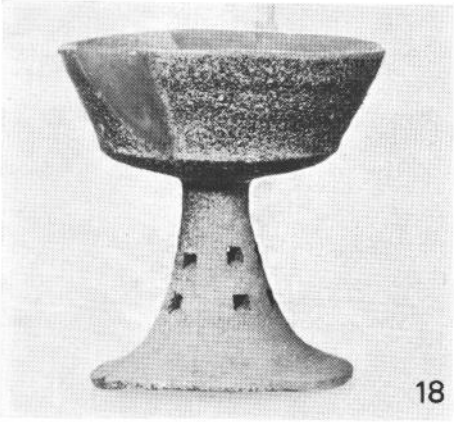


110

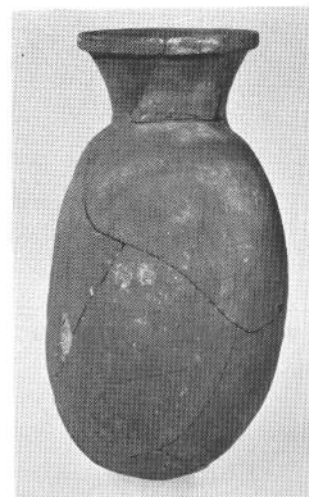
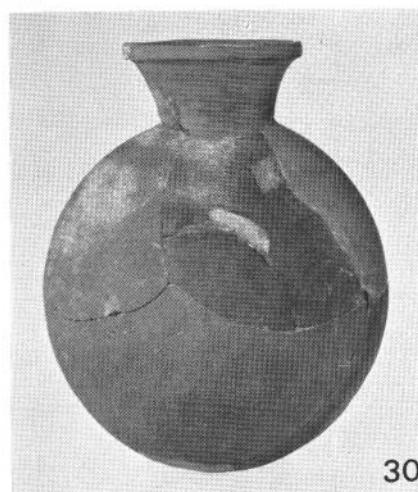
汐井掛16号墳出土遺物

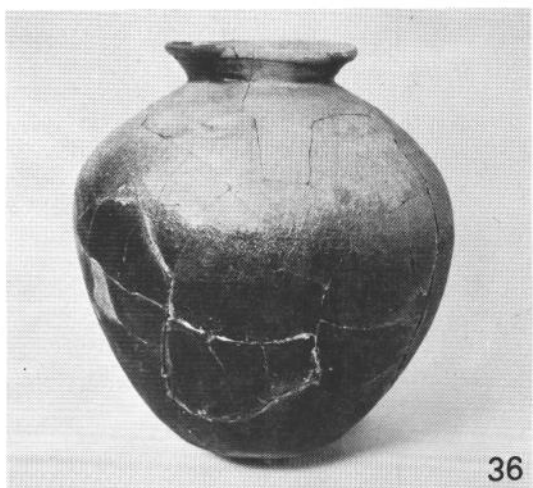
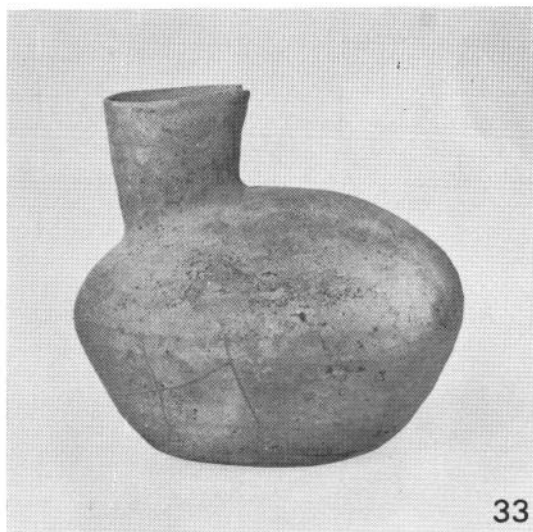
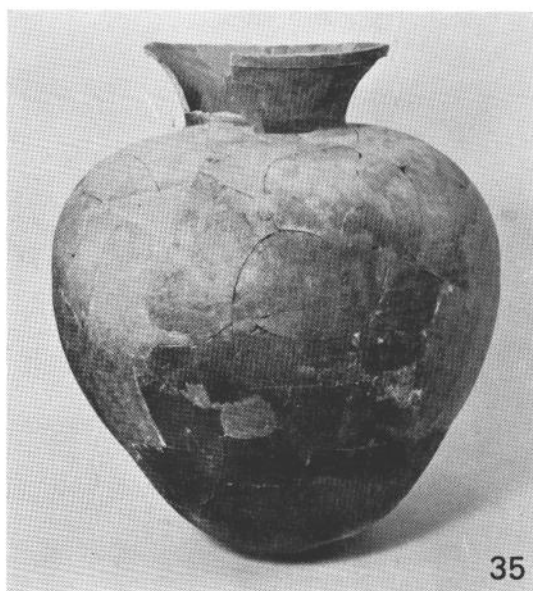


高平1号墳出土土器

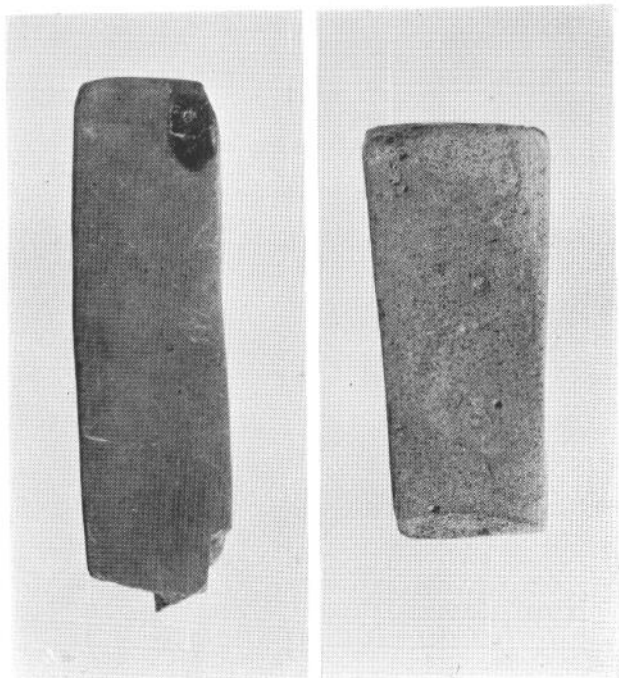


高平1号出填土土器

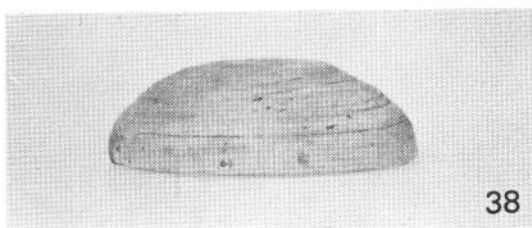




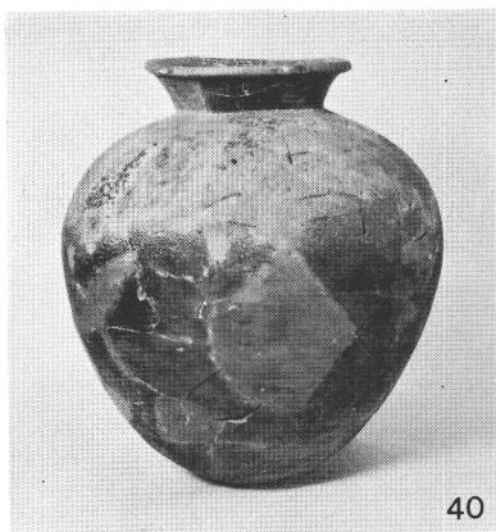
高平1号墳出土土器



高平1号墳出土砥石



38



40

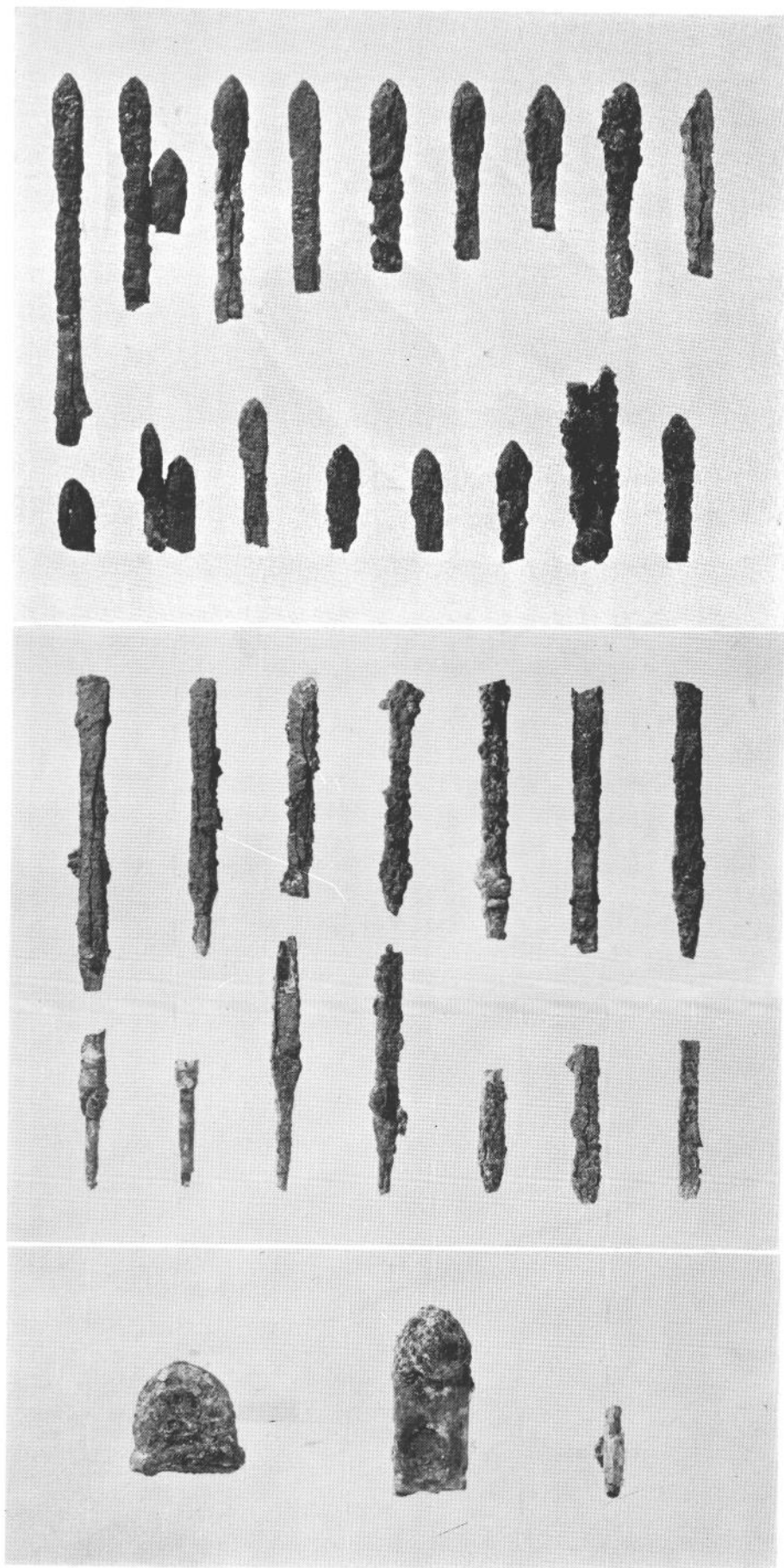
高平3号墳出土土器

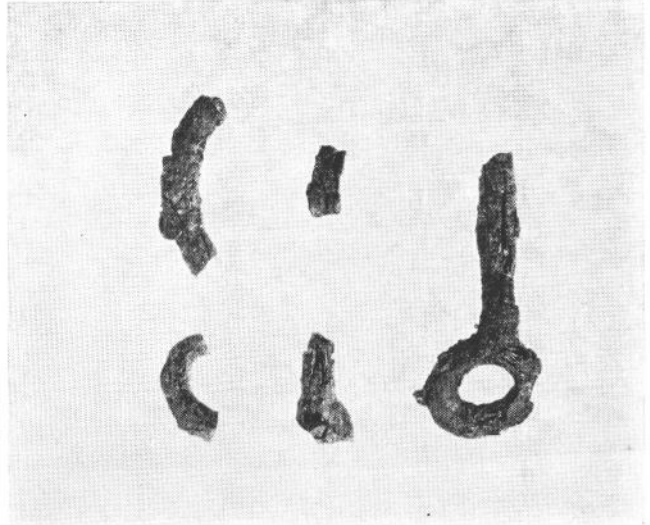
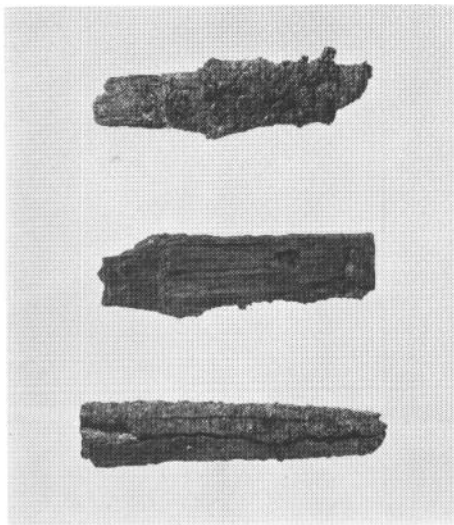
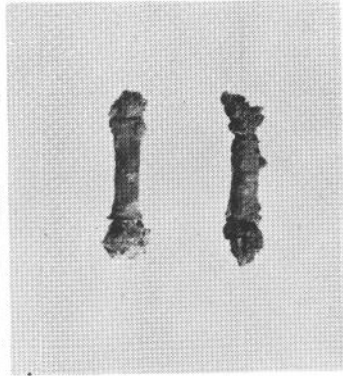
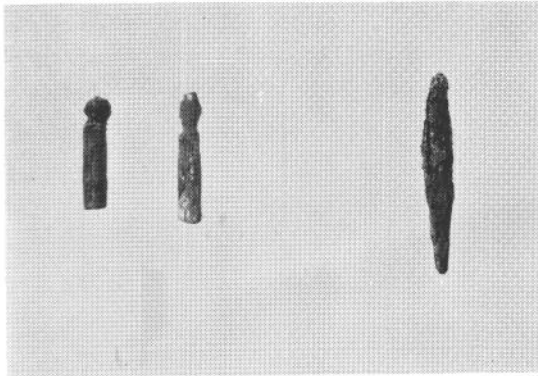
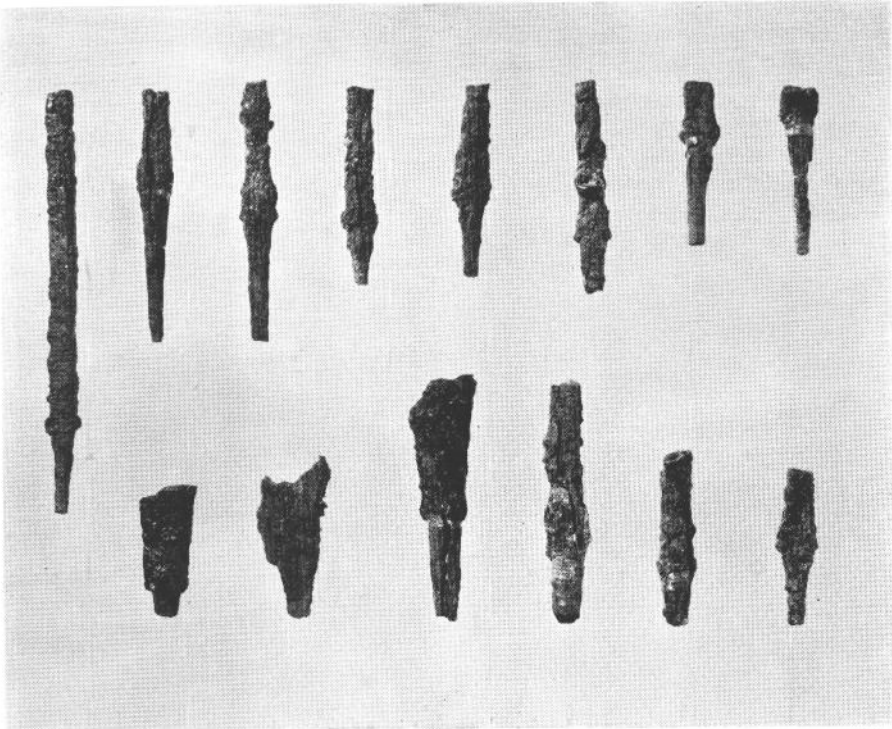


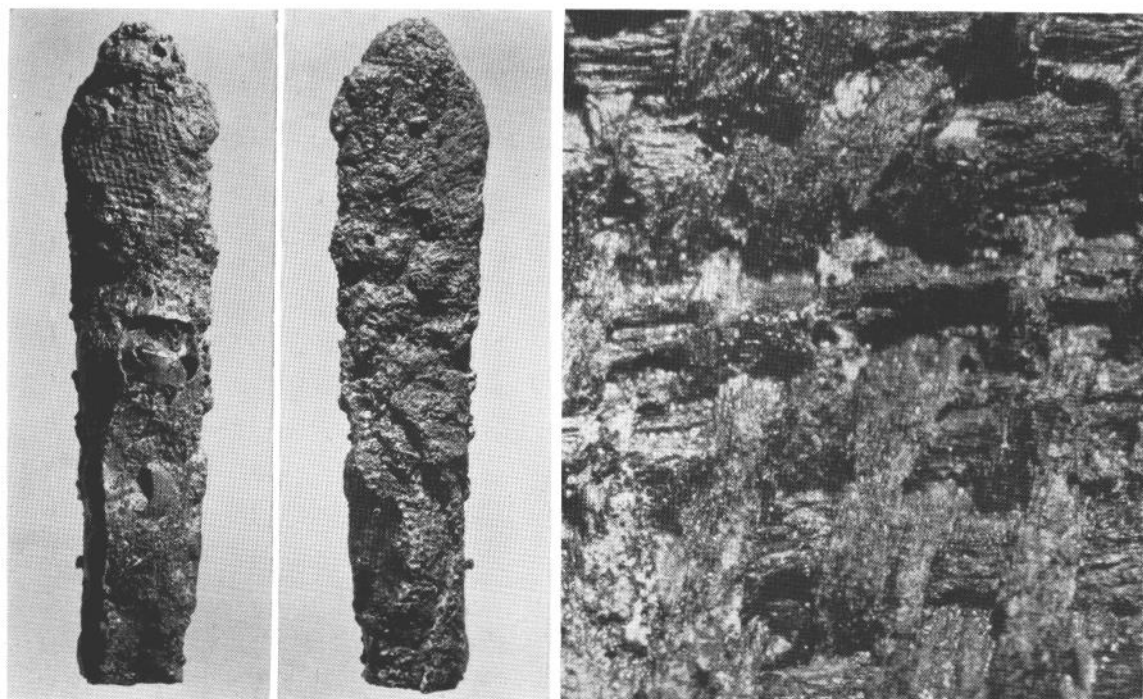
39



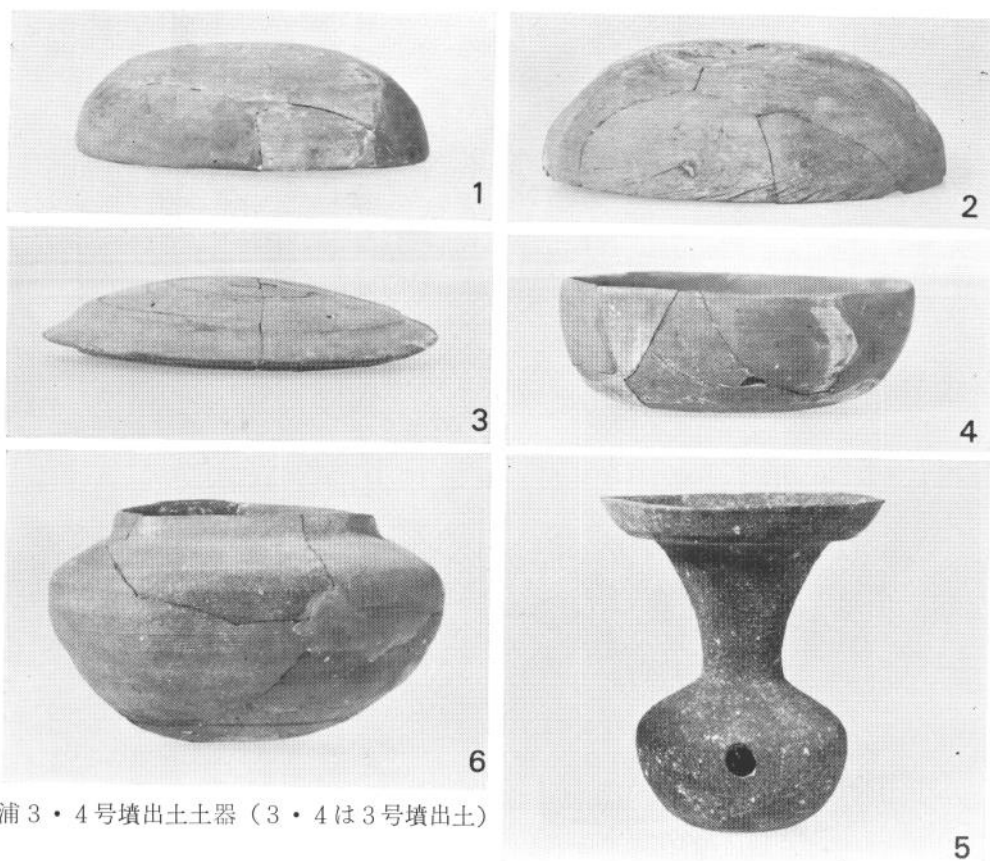
南ヶ浦 2 号墳出土遺物



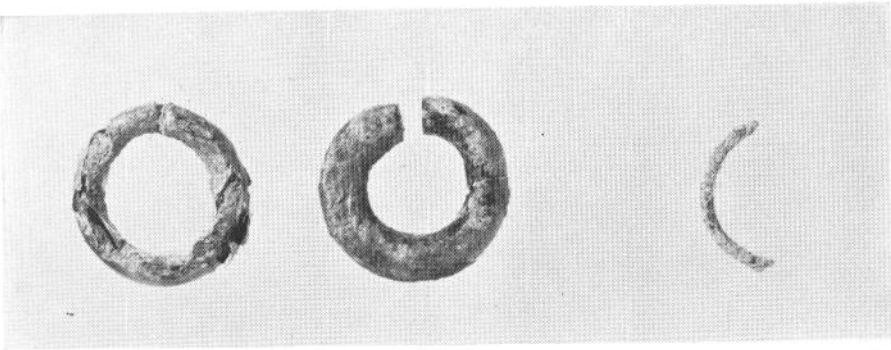




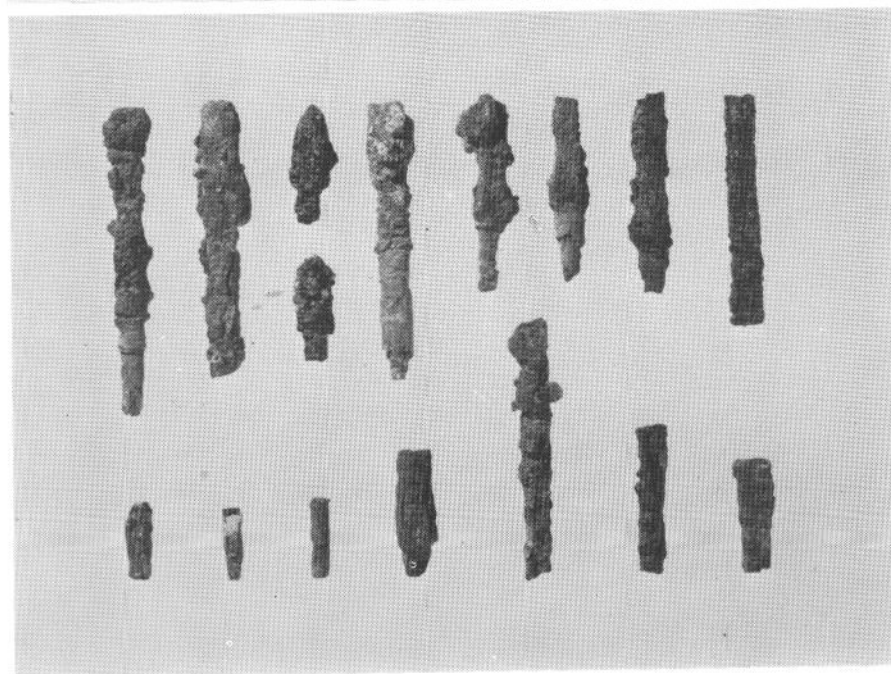
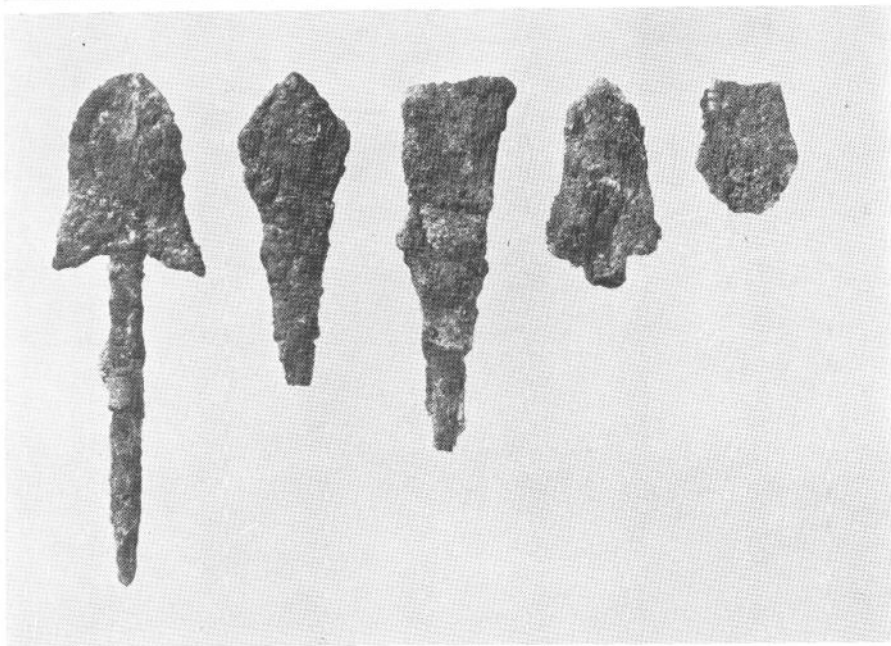
南ヶ浦2号墳出土の布付着鉄鏃（左から表・裏・拡大写真）

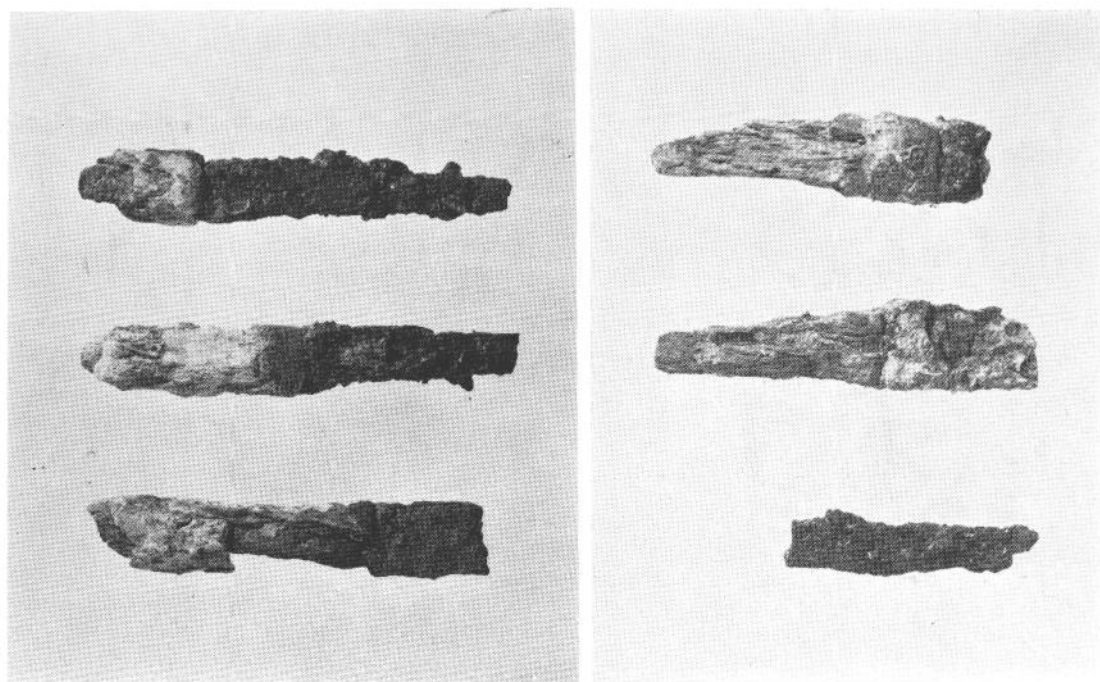


南ヶ浦3・4号墳出土土器（3・4は3号墳出土）

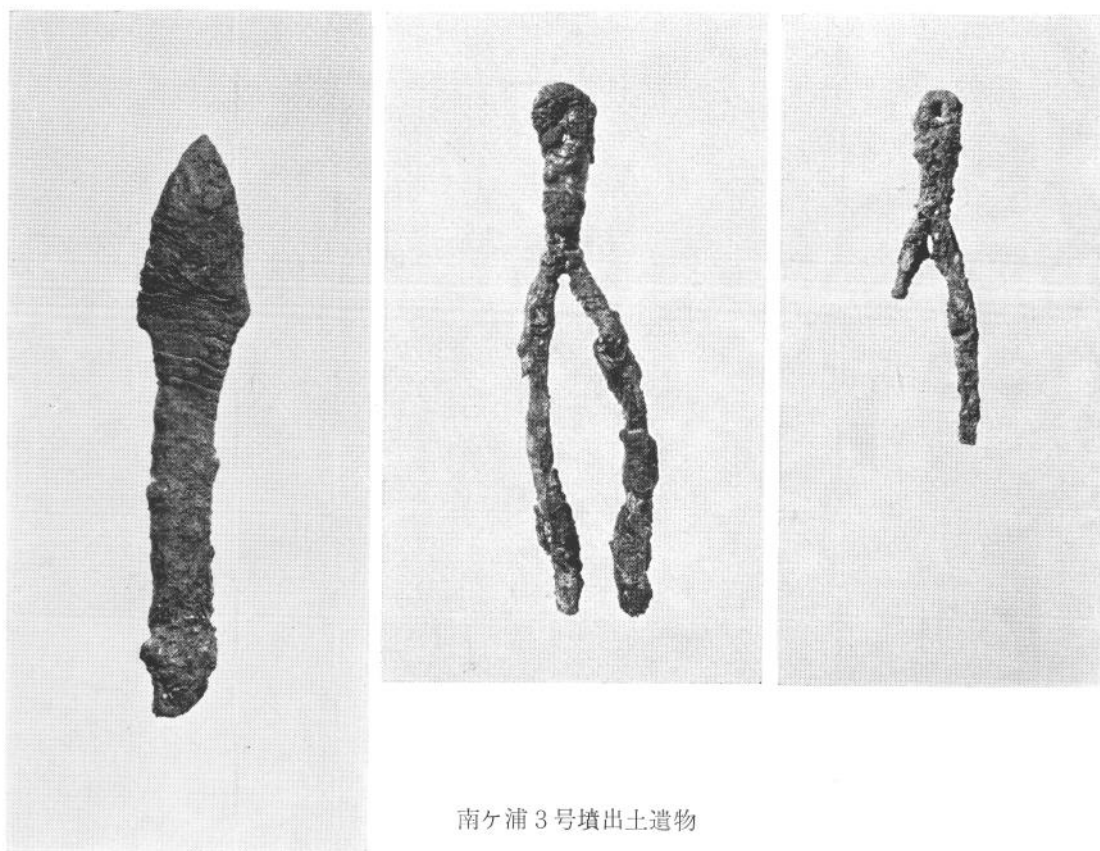


南ヶ浦3号墳出土遺物
(耳環のうち左の2点
は4号墳出土)

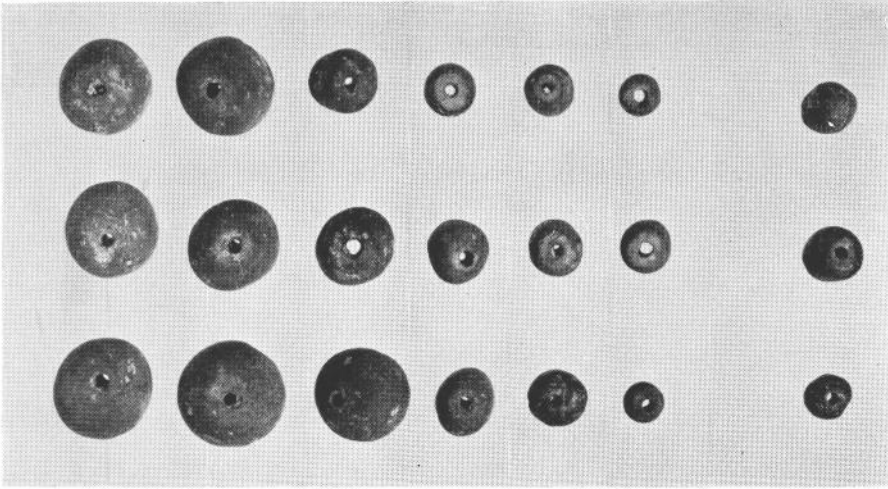




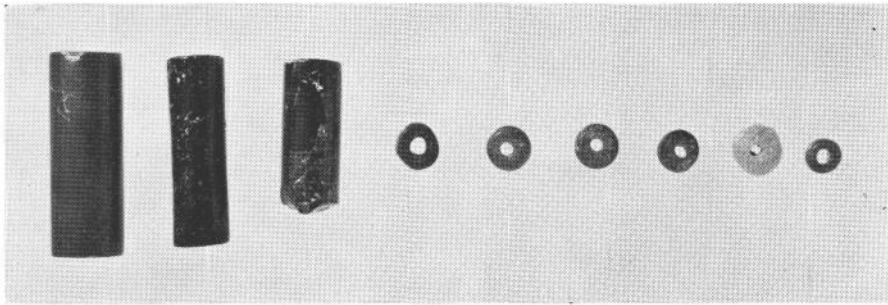
南ヶ浦 3号墳出土遺物



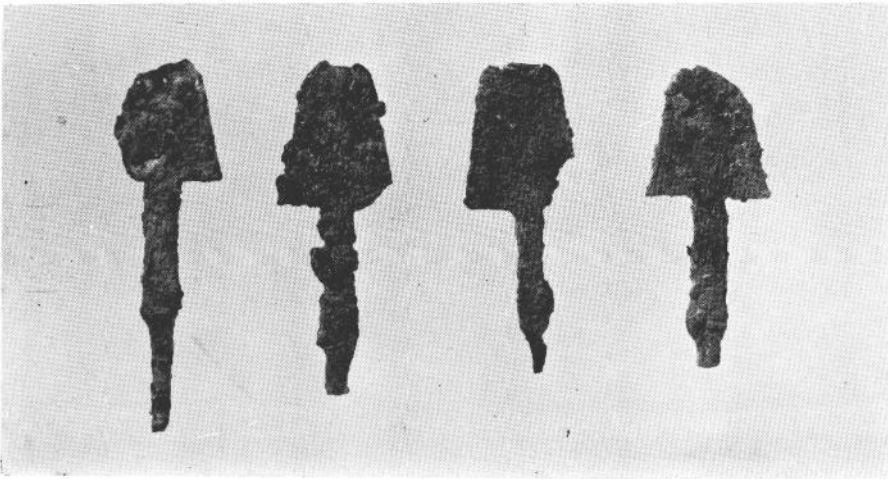
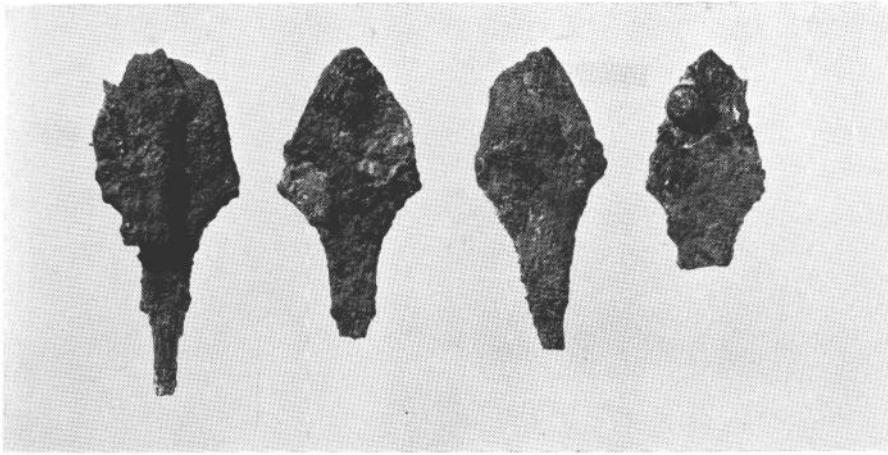
南ヶ浦 3号墳出土遺物

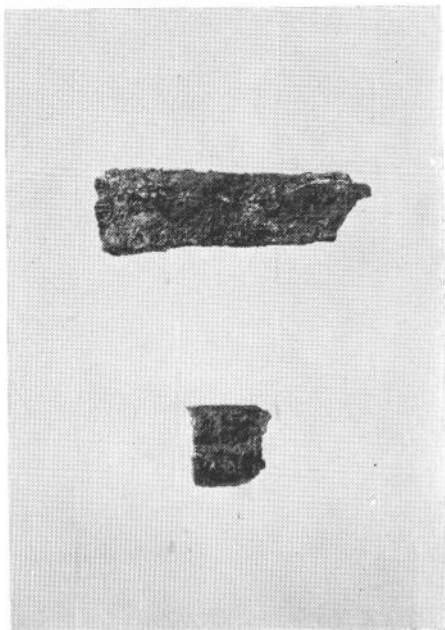
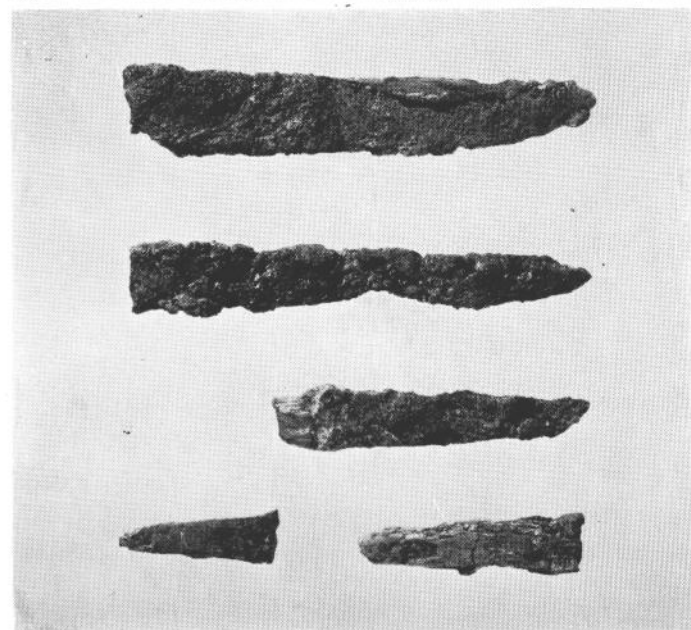
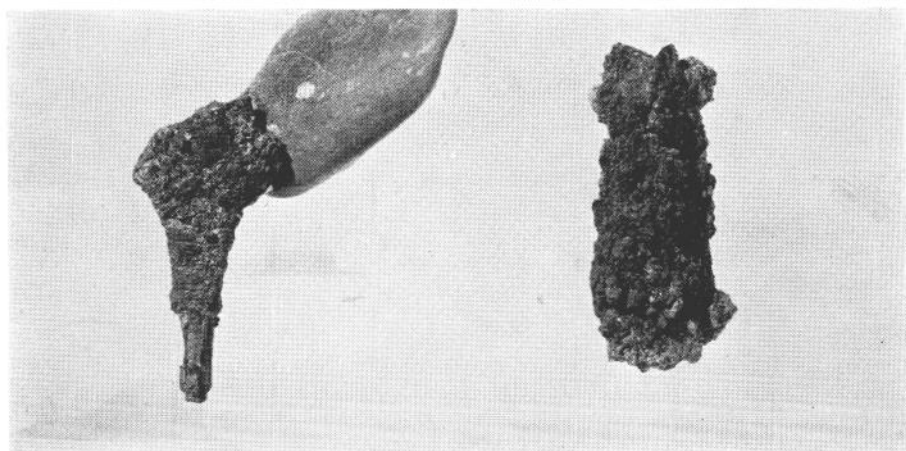
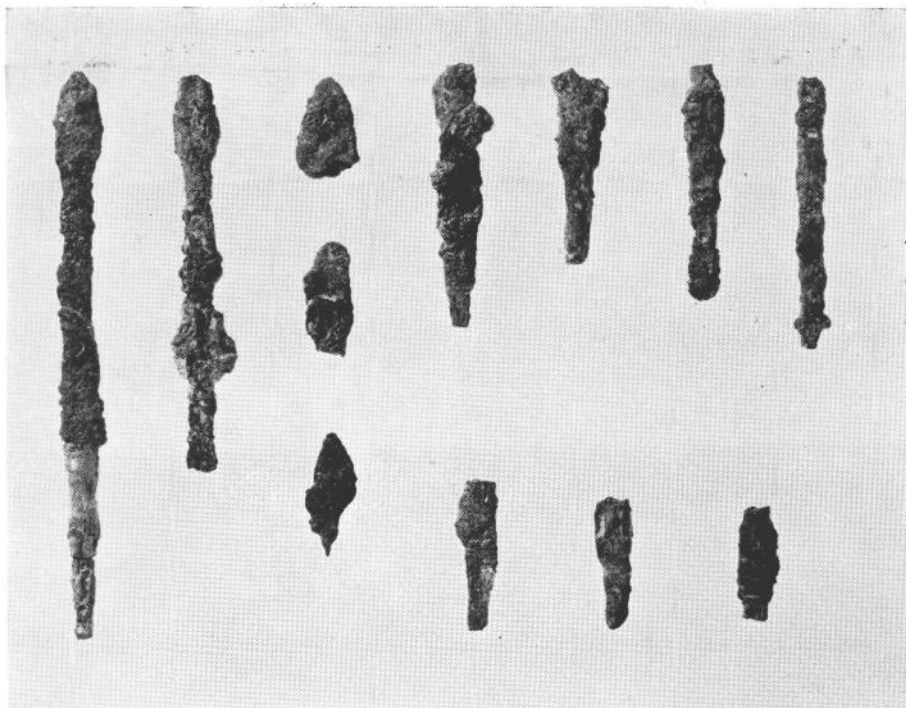


南ヶ浦3・5号墳出土
遺物
(右側1列が3号墳出
土)



南ヶ浦5号墳出土遺物





若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

第 1 集

昭和 54 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市中央区西中洲 6-29

印 刷 有 限 会 社 松 古 堂 印 刷
福岡市西区大字周船寺407